

## 杵築城下町遺跡 2

—都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008

## 杵築城下町遺跡 2

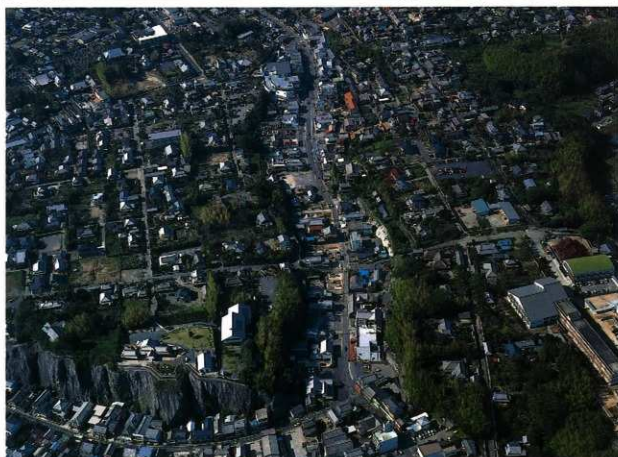
—都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター



町屋敷絵図（文化12年）



上：守江湾からみた杵築市街地 下：谷町及び周辺



伊賀系陶器花入 (2/3)

## 序 文

本書は、県教育委員会が別府土木事務所の依頼を受けて実施した、都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う杵築城下町遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する杵築市谷町地区は、八坂川左岸の河口に近い丘陵谷部に位置しており、周辺の豊かな自然と歴史に恵まれています。

今回調査した杵築城下町は、南北の台地上に展開する武家屋敷に挟まれた町屋の中心部にあたります。

発掘調査の結果、江戸時代初頭頃から現在に至る町の変遷をみることができました。特に、江戸時代を通じて多く発生した火災、その後の造成過程や出土した陶磁器類から当時営まれた町人の生活を窺うことができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助となれば幸いです。

終わりに、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成20年2月15日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 福田 快次

## 例 言

- 1 本書は大分県教育委員会が実施した、都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う平成15年度から平成18年度の4カ年に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
- 3 出土遺物の整理作業は大分県教育庁埋蔵文化財センター（以下、センターという。）で行った。
- 4 出土遺物、図面、写真等はセンターで保管している。
- 5 本書の作成にあたり、出土遺物については佐賀県立九州陶磁文化館館長の大橋康二氏、センター副主幹の吉田寛氏の教示を得た。また、東京都中央区教育委員会の仲光克顕氏に多くの協力を得た。
- 6 杵築城下町遺跡の文献資料の検討に関しては大分県立歴史博物館主任学芸員の平川毅氏に依頼した。
- 7 本書の執筆は調査を担当した栗田勝弘、小林昭彦が担当した。執筆分担は次のとおりである。

栗田勝弘（第1章、第2章、第3章第1節～第10節、第5章）  
小林昭彦（第3章第11節～第13節）  
平川 毅（第4章）
- 8 発掘調査にあたり杵築市教育委員会、県土木建築部別府土木事務所、地元関係者の協力を得た。  
特に、きつき城下町資料館には発掘調査及び「町屋敷絵図」の撮影・掲載許可など過分の配慮をいただいた。
- 9 本書の編集は栗田勝弘、小林昭彦が担当した。

# 目次

序文

例言

## 第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯と調査方法……………1

第2節 調査団の構成……………1

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境……………3

## 第3章 調査の成果

第1節 17調査区……………6

第2節 18調査区……………14

第3節 19調査区……………19

第4節 20調査区……………34

第5節 21調査区……………47

第6節 22調査区……………58

第7節 23調査区……………66

第8節 24調査区……………77

第9節 25調査区……………87

第10節 26調査区……………89

第11節 27調査区……………101

第12節 28調査区……………125

第13節 29調査区……………145

第4章 文献資料調査……………165

第5章 総括……………170

報告書抄録



## 図 版 目 次

<p>第1図 調査遺跡及び周辺遺跡分布図 (1/25, 000)……………4</p> <p>第3図 町原敷絵図(文化12年)―中町・谷町― ……………付図</p> <p>第5図 17調査区側溝と石列突測図(1/60)……………7</p> <p>第7図 17調査区石組遺構突測図(1/20)……………7</p> <p>第9図 17調査区出土遺物(1/3) ※15は1/4……………9</p> <p>第11図 17調査区出土遺物(1/3)……………11</p> <p>第13図 18調査区遺構配置図(1/120)……………14</p> <p>第15図 18調査区出土遺物(1/3)……………16</p> <p>第17図 18調査区出土遺物(1/3、2/3)……………17</p> <p>第19図 19調査区1号石列突測図(1/60)……………20</p> <p>第21図 19調査区4号石列遺構突測図(1/60)……………21</p> <p>第23図 19調査区2号土坑遺構突測図(1/60)……………21</p> <p>第25図 19調査区出土遺物(1/3)……………23</p> <p>第27図 19調査区出土遺物(1/3) ※17は1/4……………25</p> <p>第29図 19調査区出土遺物(1/3)……………27</p> <p>第31図 19調査区出土遺物(1/3) ※58は1/4……………29</p> <p>第33図 19調査区出土遺物(1/3) ※71～73、76、77は1/4……………31</p> <p>第35図 19調査区出土遺物(2/3)……………32</p> <p>第37図 20調査区2号側溝突測図(1/60)……………35</p> <p>第39図 20調査区1号土坑突測図(1/60)……………35</p> <p>第41図 20調査区3号土坑突測図(1/60)……………35</p> <p>第43図 20調査区3号溝突測図(1/60)……………35</p> <p>第45図 20調査区出土遺物(1/3)……………38</p> <p>第47図 20調査区出土遺物(1/3) ※32は1/4……………40</p> <p>第49図 20調査区出土遺物(1/3) ※49は1/4、54は1/6……………42</p> <p>第51図 20調査区出土遺物(1/3、2/3)……………44</p> <p>第53図 21調査区1号側溝突測図(1/60)……………49</p> <p>第55図 21調査区2号土坑突測図(1/60)……………49</p> <p>第57図 21調査区6号土坑突測図(1/60)……………49</p> <p>第59図 21調査区出土遺物(1/3)……………52</p> <p>第61図 21調査区出土遺物(1/3)……………54</p> <p>第63図 21調査区出土遺物(1/3)……………56</p> <p>第65図 22調査区遺物配置図(1/120)……………58</p> <p>第67図 22調査区1号土坑突測図(1/60)……………59</p> <p>第69図 22調査区1号集石突測図(1/60)……………59</p>	<p>第2図 杵築城下町遺跡(中町・谷町地区)の調査区 ……………付図</p> <p>第4図 17調査区遺構配置図(1/120)……………6</p> <p>第6図 17調査区1号土坑突測図(1/60)……………7</p> <p>第8図 17調査区出土遺物(1/3)……………8</p> <p>第10図 17調査区出土遺物(1/3)……………10</p> <p>第12図 17調査区出土遺物(1/3、2/3)……………12</p> <p>第14図 18調査区側溝突測図(1/60)……………15</p> <p>第16図 18調査区出土遺物(1/3)……………17</p> <p>第18図 19調査区遺構配置図(1/120)……………20</p> <p>第20図 19調査区3号石列遺構突測図(1/60)……………20</p> <p>第22図 19調査区1号土坑遺構突測図(1/60)……………21</p> <p>第24図 19調査区3号土坑遺構突測図(1/60)……………21</p> <p>第26図 19調査区出土遺物(1/3)……………24</p> <p>第28図 19調査区出土遺物(1/3)……………26</p> <p>第30図 19調査区出土遺物(1/3)……………28</p> <p>第32図 19調査区出土遺物(1/3)……………30</p> <p>第34図 19調査区出土遺物(1/3)……………32</p> <p>第36図 20調査区遺構配置図(1/120)……………34</p> <p>第38図 20調査区5号側溝突測図(1/60)……………35</p> <p>第40図 20調査区2号土坑突測図(1/60)……………35</p> <p>第42図 20調査区4号、6号土坑突測図(1/60)……………35</p> <p>第44図 20調査区出土遺物(1/3)……………37</p> <p>第46図 20調査区出土遺物(1/3) ※19は1/4……………39</p> <p>第48図 20調査区出土遺物(1/3) ※46、48は1/4……………41</p> <p>第50図 20調査区出土遺物(1/3)……………43</p> <p>第52図 21調査区遺構配置図(1/120)……………48</p> <p>第54図 21調査区1号集石突測図(1/60)……………49</p> <p>第56図 21調査区4号土坑突測図(1/60)……………49</p> <p>第58図 21調査区最下層面杭列突測図(1/30)……………50</p> <p>第60図 21調査区出土遺物(1/3)……………53</p> <p>第62図 21調査区出土遺物(1/3) ※39、40、45は1/6……………55</p> <p>第64図 21調査区出土遺物(2/3)……………56</p> <p>第66図 22調査区1号側溝突測図(1/60)……………50</p> <p>第68図 22調査区5号土坑突測図(1/60)……………59</p> <p>第70図 22調査区2号集石突測図(1/60)……………59</p>
---	---

第71回	22調査区出土遺物 (1/3).....61	第72回	22調査区出土遺物 (1/3) ※17は1/8.....62
第73回	22調査区出土遺物 (1/3) ※16は1/8、18は1/4.....63	第74回	22調査区出土遺物 (1/3) ※28、29は2/3...64
第75回	23調査区遺構配置図 (1/120).....66	第76回	23調査区出土遺物 (1/3).....67
第77回	23調査区出土遺物 (1/3).....68	第78回	23調査区出土遺物 (1/3).....69
第79回	23調査区出土遺物 (1/3).....70	第80回	23調査区出土遺物 (1/3) ※40は1/4.....71
第81回	23調査区出土遺物 (1/3) ※43、45、46は1/6.....72	第82回	23調査区出土遺物 (1/3).....73
第83回	23調査区出土遺物 (1/3、2/3) .....74	第84回	24調査区遺構配置図 (1/120).....77
第85回	24調査区1号側溝実測図 (上部遺構) (1/60).....78	第86回	24調査区横伏側溝実測図 (下部遺構) (1/60).....78
第87回	24調査区出土遺物 (1/3).....79	第88回	24調査区出土遺物 (1/3).....80
第89回	24調査区出土遺物 (1/3).....81	第90回	24調査区出土遺物 (1/3).....82
第91回	24調査区出土遺物 (1/3).....83	第92回	24調査区出土遺物実測図 (2/3、1/3) .....83
第93回	24調査区出土遺物 (2/3).....84	第94回	25調査区遺構配置図 (1/120).....87
第95回	25調査区遺構配置図 (1/60) .....88	第96回	25調査区出土遺構実測図 (1/3、2/3) .....88
第97回	26調査区遺構配置図 (1/120).....89	第98回	26調査区1号側溝実測図 (1/60) .....90
第99回	26調査区3号集石実測図 (1/60) .....90	第100回	26調査区1号上坑実測図 (1/60).....90
第101回	26調査区2号土坑実測図 (1/60).....90	第102回	26調査区3号上坑実測図 (1/60).....90
第103回	26調査区4号土坑実測図 (1/60).....90	第104回	26調査区5号、6号上坑実測図 (1/60).....90
第105回	26調査区出土遺物 (1/3) ※41は1/5.....92	第106回	26調査区出土遺物 (1/3) ※14は1/5.....93
第107回	26調査区出土遺物 (1/3) .....94	第108回	26調査区出土遺物 (1/3) .....95
第109回	26調査区出土遺物 (1/3) .....96	第110回	26調査区出土遺物 (1/3、2/3).....97
第111回	27調査区遺構配置図 (1/120).....101	第112回	27調査区北辺A-A'土層断面図 (1/60).....102
第113回	27調査区西辺B-B'、南辺D-D' 土層断面図 (1/40) .....103	第114回	27調査区溝1・3、落込み2・3実測図 (1/60).....104
第115回	27調査区溝2 (I・II) 実測図 (1/60).....105	第116回	27調査区出土遺物 (1/3).....106
第117回	27調査区出土遺物 (1/3).....107	第118回	27調査区出土遺物 (1/3) ※38は1/4.....108
第119回	27調査区出土遺物 (1/3).....109	第120回	27調査区出土遺物 (1/3) ※56は1/4.....110
第121回	27調査区出土遺物 (1/3) ※67・77は1/4.....111	第122回	27調査区出土遺物 (1/3).....112
第123回	27調査区出土遺物 (1/3).....113	第124回	27調査区出土遺物 (1/4).....114
第125回	27調査区出土遺物 (1/3).....115	第126回	27調査区出土遺物 (1/3).....116
第127回	27調査区出土銭貨 (原寸) .....117	第128回	27調査区出土銭貨 (原寸) .....118
第129回	28調査区遺構配置図 (1/120).....125	第130回	28調査区北壁 (東西方向) 土層断面図...126
第131回	28調査区北壁 (東半部) 土層断面図 (1/40).....126	第132回	28調査区南壁 (東西方向) 土層断面図...126
第133回	28調査区西壁 (南北方向) 土層断面図 (1/40).....126	第134回	28調査区溝2・3・4、石組1実測図 (1/60).....127
第135回	28調査区各層の遺構 (1/200).....128	第136回	28調査区遺構 (右組2~8、配石) 実測図 (1/60) .....129

第137図	28調査区出土遺物 (1/3).....130	第138図	28調査区出土遺物 (1/3).....131
第139図	28調査区出土遺物 (1/3) ※27・28は1/4.....132	第140図	28調査区出土遺物 (1/3) ※42・43は1/4.....133
第141図	28調査区出土遺物 (1/3) ※44は1/4、51は1/6.....134	第142図	28調査区出土遺物 (1/3) ※56は1/2、55は1/6.....135
第143図	28調査区出土遺物 (1/3).....136	第144図	28調査区出土遺物 (1/3).....137
第145図	28調査区出土遺物 (1/3).....138	第146図	28調査区出土遺物 (1/3).....139
第147図	28調査区出土銭貨 (原寸).....140	第148図	29調査区遺構配置図 (1/120).....145
第149図	29調査区西辺A-A' 上層断面図 (1/40).....146	第150図	29調査区北辺西半部土層断面図 (1/40).....147
第151図	29調査区北辺東半部C-C' 土層断面図 (1/40).....147	第152図	29調査区北辺西半部B-B' 土層断面図 (1/80).....148
第153図	29調査区南辺D-D' 土層断面図 (1/80).....148	第154図	29調査区溝1、土坑1・2・3・5・9・10、 ピット1〜6実測図 (1/60).....149
第155図	29調査区溝2実測図 (1/30).....150	第156図	29調査区溝3実測図 (1/80).....150
第157図	29調査区溝4実測図 (1/60).....151	第158図	29調査区埋塞実測図 (1/20).....151
第159図	29調査区建物1・2実測図 (1/60).....152	第160図	29調査区出土遺物 (1/3) ※4・17は1/4.....153
第161図	29調査区出土遺物 (1/3) ※18は1/4.....154	第162図	29調査区出土遺物 (1/3).....155
第163図	29調査区出土遺物 (1/3).....156	第164図	29調査区出土遺物 (1/8).....157
第165図	29調査区出土遺物 (1/3).....158	第166図	29調査区出土銭貨 (原寸).....159
第167図	29調査区出土銭貨 (原寸).....160		

## 写真図版目次

巻頭図版	町屋敷絵図 (文化12年) 守江湾からみた杵築市街地 谷町及び周辺 伊賀系陶器花入 (2/3) 杵築城下町遺跡の形成過程 一杵築城下町の土層 (221区)..... 5		
写真1	17調査区南壁上層 (北方向から).....13 調査区全景 (東方向から).....13 石列、側溝検出状態 (南方向から).....13 石列1、側溝1検出 (南方向から).....13 遺構検出状況 (東方向から).....13 石組遺構彫形完備状態 (北方向から).....13 焼土5面遺物出土状態.....13	写真2	18調査区側溝検出状態 (北方向から).....18 南壁上層 (北方向から).....18 石列検出状態 (北方向から).....18 SX1検出状態 (北方向から).....18 調査区検出状態 (東方向から).....18

写真3	19調査区遺構検出状態(西方向から) ……33	写真4	20調査区作業風景(東方向から) ……46
	1号石列検出状態(北方向から) ……33		20調査区全景(東方向から) ……46
	南壁土層断面 ……33		南側壁面(北方向から) ……46
	焼土5面陶磁器出土状態(西方向から) ……33		北側壁面(南東方向から) ……46
	1号土坑完掘状態(北方向から) ……33		2号側溝(北方向から) ……46
	2号土坑検出状態(西方向から) ……33		5号側溝(西方向から) ……46
	3号土坑検出状態(西方向から) ……33		焼土3面1号土坑 ……46
	3号石列検出状態(北方向から) ……33		焼土4面遺物出土状態 ……46
写真5	21調査区作業風景(北東方向から) ……57	写真6	22調査区全景(東方向から) ……65
	調査区全景(西方向から) ……57		南壁土層(北方向から) ……65
	1号側溝(北方向から) ……57		1号溝(北方向から) ……65
	南壁土層(北方向から) ……57		1号集石(北方向から) ……65
	1号側溝断面(北方向から) ……57		2号集石(南方向から) ……65
	築石遺構 ……57		1号土坑(北方向から) ……65
	最下層遺構 ……57		遺物出土状態 ……65
	最下層出土の掘立柱痕跡 ……57	写真8	24調査区全景(西方向から) ……86
写真7	23調査区全景(西方向から) ……76		1号側溝(北方向から) ……86
	南壁面(北方向から) ……76		北壁面(南方向から) ……86
	東壁面(西方向から) ……76		配石(南方向から) ……86
	焼土3面粟出土状態 ……76		槽状側溝(南方向から) ……86
	焼土3・4面整地層 遺物出土状態		槽状側溝(北方向から) ……86
	(東方向から) ……76		槽状側溝(西方向から) ……86
	遺物出土状態 ……76	写真10	26調査区全景(西方向から) ……100
	焼土4面 遺物出土状態 ……76		調査区全景(東方向から) ……100
	焼土5面 遺物出土状態 ……76		1号側溝(北方向から) ……100
写真9	1号溝出土状態(南方向から) ……88		1号集石(下)、2号集石(上)(南方向から)
			……100
			池状遺構・南壁土層面(北方向から) ……100
			池状遺構・北壁土層面(南方向から) ……100
			4号土坑(南方向から) ……100
			6号土坑(南方向から) ……100
写真11	27調査区遠景(南方向から) ……124	写真12	28調査区遠景(東上方向から) ……144
	全景(西方向から) ……124		溝1全景(北方向から) ……144
	溝1(南方向から) ……124		溝2全景(南方向から) ……144
	溝2-II(南方向から) ……124		溝3全景(南方向から) ……144
	溝4(南方向から) ……124		溝4全景(南方向から) ……144
	調査西壁土層状態(東方向から) ……124		溝3遺物出土状態(南方向から) ……144

写真13	29調査区完掘時全景（東方向から）	164
	建物2全景（南方向から）	164
	埋掘出土状態（南方向から）	164
	溝2全景（南方向から）	164
	溝3全景（南方向から）	164
	土坑1～5全景（南方向から）	164

## 表 目 次

表1	17調査区出土遺物観察表	12	表2	18調査区出土遺物観察表	15
表3	19調査区出土遺物観察表	21	表4	20調査区出土遺物観察表	44
表5	21調査区出土遺物観察表	50	表6	22調査区出土遺物観察表	60
表7	23調査区出土遺物観察表	74	表8	24調査区出土遺物観察表	84
表9	25調査区出土遺物観察表	87	表10	26調査区出土遺物観察表	98
表11	27調査区出土遺物観察表	119	表12	27調査区出土銭貨観察表	122
表13	28調査区出土遺物観察表	141	表14	28調査区出土銭貨観察表	143
表15	29調査区出土遺物観察表	161	表16	29調査区出土銭貨観察表	163
表17	18世紀前半における杵築藩城下町の火災発生状況	169			

## 第1章 調査の経過と概要

### 第1節 調査に至る経過と調査方法

今回調査した杵築城下町遺跡は都市計画道路宗近魚町線の拡幅工事に伴うものである。調査対象地は杵築市大字杵築字谷町及び中町に位置している。武家屋敷が建ち並ぶ北台と南台に挟まれた谷状部に相当しており、当時の一般民衆が住む町屋に当たる位置を占めている。文化12年頃という城下町絵図によると、宗近魚町線は当時の幹線道路をそのまま踏襲したものであり、道路の両側には間口の狭い鬼冊形の商家が軒を連ねていた町屋であることは判っていた。宗近魚町線の拡幅工事は道路の両側を相互に削って道を拡幅するものであり、当時の家屋の道に面した表部分、つまり入り口部分を4～5m程度だけ調査対象とするものであった。従って、遺構の全体像を把握するには至らなかったというのが現実である。しかし、谷町地区の調査では5～7回の火災遺構が検出されており、その都度、山の上や土砂を持って来ては地表面を高く盛って敷道を嵩上げ構築した痕跡を確認できた。この人為的な盛り上げは約2mにも達しており、一回の火災で30～40cmの嵩上げが行われたことが確認できた。水の出る標高の低い谷町にとっては必要不可欠な行為であったのであろう。

都市計画道路宗近魚町線の拡幅工事は平成13年度に土木建築部企画検査室（現建設政策課）より提示され、平成14年度～平成18年度の5年間に渡って調査条件の整った地点から発掘調査に取り掛かった。用地買収により撤去した商家はそれぞれ背後に移動して商売を再開しており、日常の生活や営業活動の邪魔にならない様に通用口部は調査を保留するか、条件が整えば前を半分ずつ調査するという方法がとられた。従って、調査区は1～29調査区と細切れに設定することになった。また、表土や発掘で出る排土はトラックで一旦搬出し、調査終了後に埋め戻すというものであった。

平成14年度は中町を主体として一部谷町を含む西方の高い位置を対象としており、発掘調査区は1調査区～16調査区を設定した。この調査報告書は既に平成16年度に刊行済みである。

今回の発掘調査報告書は平成15年度、平成16年度、平成17年度、平成18年度の調査成果を纏めて報告するもので、調査区は当初の呼称方法を踏襲した。つまり、平成15年度は谷町の東端部にあたる17調査区～19調査区。平成16年度は谷町から中町の20調査区～26調査区。平成17年度は谷町の27調査区、28調査区。平成18年度は29調査区である。これによって、車道拡幅部分や深く削削が計画された歩道部分に関しての調査を完了した。なお、埋蔵文化財に影響を与えない歩道部分に関しては現状のままで永久保存するという方法で対処した。

### 第2節 調査団の構成

杵築城下町遺跡の調査組織は以下のとおりである。

#### 平成15年度

調査主体	大分県教育委員会
調査組織	今永一成 大分県教育庁文化課長
	麻生祐治 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐
	清水宗昭 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐
	栗田勝弘 大分県教育庁文化課発掘調査一般事業担当主幹（調査担当）
	山本哲也 大分県教育庁文化課発掘調査一般事業担当副託（調査担当）

#### 平成16年度

調査主体	大分県教育委員会
調査組織	伊藤正行 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
	益永孝則 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼総務課長

## 第2節 調査司の構成

- 高橋 徹 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長  
栗田勝弘 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課一般事業担当主幹 (調査担当)  
) 田英佑 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課嘱託 (調査担当)

### 平成17年度

- 調査主体 大分県教育委員会  
調査組織 渋谷忠章 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長  
益永孝則 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼総務課長  
栗田勝弘 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長  
小林昭彦 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課一般事業担当主幹 (調査担当)  
大野瑞恵 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課嘱託 (調査担当)

### 平成18年度

- 調査主体 大分県教育委員会  
調査組織 小玉学司 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長  
岡本義博 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼総務課長  
栗田勝弘 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長  
小林昭彦 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課一般事業担当主幹 (調査担当)

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的・歴史的環境

杵築城下町遺跡(1)の所在する杵築市は国東半島東南部の半島付け根部に位置している。遺跡は広大な下海を有する守江湾の最奥部、北の高山川と南の八坂川とに挟まれた丘陵上に展開している。海に面する丘陵先端部の高台の杵築城木丸跡(3)には、昭和45年に鉄筋コンクリートの天守閣が復元されている。天守閣から眺望できる沖積平野や浅海性の海岸は両河川の長い年月によって形成された「たまもの」ともいえる。

守江湾の北部の海辺の山地には縄文早期の標式遺跡となる稲荷山遺跡が位置している。原体条痕文を持たない繊細な押型文土器と無文厚手土器の共存する古式なタイプの早期土器である。

縄文後期には当時の海岸線に沿って貝塚が形成される傾向が認識できるが、守江湾周辺部にも6箇所に貝塚が点在しており、III森湾を挟んだ宇佐地域に匹敵する県内有数な貝塚集中分布域といえる。高山川の河口付近に位置する東大内山貝塚(19)をはじめ、河口より約2.5kmも遡った地点では後期初頭の山迫貝塚(4)が圓場整備に伴って発見されている。充填縄文の中津式土器や福田kⅡ式土器が石斧、石鏡と伴い出土しており、当時の海岸線が内陸部まで侵入していたことが推量できる。一方、八坂川の河口付近の左岸には須賀貝塚(26)、右岸には須崎貝塚(29)、東貝塚(30)、神領貝塚(35)が発見されている。神領貝塚は平成5年の圓場整備事業に伴って発見され、後期初頭の円縄文土器や中津式土器が出土している。また、東貝塚は後期後葉の三刀出式土器が主体であり、文様の希薄な精製された浅鉢形や深鉢形の土器がセットで出土している。

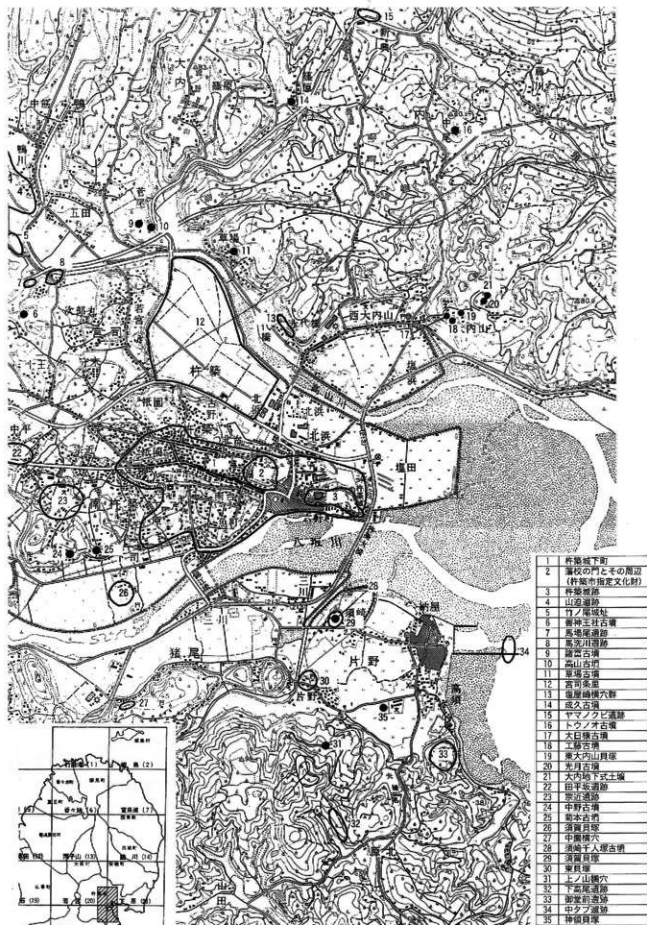
弥生時代の遺跡は希薄であるが、弥生中期のJR杵築駅東遺跡がある。壺や甕や鉢や即付土器等に伴って磨製石剣、磨製石鏃が出土しており中期中葉の須玖式土器が主体となる集落遺跡と推察されている。その他には、杵築市野田区新宮出土の細形銅剣は祭祀に伴う遺物としても留意されるものである。

古墳時代になると杵築市域は県下有数の古墳密集地と化している。近年九州最大級の小嵐山古墳や御塔山古墳が別府湾周辺の望海のよい高台に発見された。杵野地区の小嵐山古墳は全長120mに及ぶ前期の前方後円墳で県下最大級である。墳丘上の埴輪は巴型透かしや鱸付きの円筒埴輪と底部穿孔の壺形埴輪の組み合わせであり、墳丘形態や埴輪群の特徴から畿内色の強いものであった。また、御塔山古墳は小さな造り出しを持つ径約80mの四段築成の円墳で外堤を持つ。墳丘上から円筒埴輪や盾形埴輪等が出土し4世紀末～5世紀初頭のもものと推察されている。古墳時代後期には横穴式石室を持つ七双子古墳群や的場古墳群等の群集墳が急増する。

古代、中世の遺跡としては宇佐・国東に展開する六郷山寺院の中山木寺である横城山東光寺が注目される。寺院の奥ノ院とその周辺部に当たる丘陵尾根の鞍部から裏山埋納を象徴する12世紀前半の経塚遺構群が発見されている。経筒には銅製と陶製があり、14口が検出されている。陶製経筒には和讃や阿闍梨を蓋としたものが多い。一方、八坂川の河川改修工事に伴って八坂久保山遺跡、八坂木匠遺跡、八坂中遺跡が発掘調査され、条里地域の水田開発の様相や漕を廻らせた多数の居館跡が検出され注目されている。大規模な水害が頻繁におこる環境での集落形成である。発掘調査報告書では、畿内系瓦器碗、吉備系土器器碗、京都系土器器等が出土していることから、水上交通にかかわる物資の集積センター的役割に関連する集落遺跡という見解である。10世紀の『和名抄』には速見郡の5つの郷が掲載されているが、八坂郷はこのような遺跡を包括するものであろう。

さて、大友木付氏系図によれば、木付氏は大友家の二代親秀の六男親重を祖とする一族であり、八坂下荘の高山川の下流部の木付という地名を名子としている。初代六郎親重は速見武所として建長2年(1250)に竹ノ尾城(5)を築城した。竹ノ尾城は木付氏4代145年間の居城で八坂郷の中心であった。現在の杵築市街地が中心部となるのは、応永元年(1394)に木付氏4代の頼直が築城した台山城に移った後のことである。厳密に言えば、明徳4年(1393)に台山城は北台に築城され、その後、城山に築城されたという青山賢信氏の注目される説もあるが考古学的には検証されていない。台山城は木付氏14代200年間、杉原、細川、小笠原時代の50年間の250年間の居城である。台山城はその地形から臥牛城とも呼ばれ、天正15年(1587)に島津軍を撃破して郡山城とも賞賛された。慶長5年(1600)には大友軍にも耐えた難攻不落の城であった。





第1図 調査遺跡及び周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

木付氏は文禄2年(1593)に大友氏と運命を共にし、木付17代統治で滅亡する。以後、杵築城主は目まぐるしく交代している。文禄4年(1595)に前田玄以、慶長元年(1596)に杉原長房、慶長5年(1600)に細川忠興、慶長6年(1601)に松井康之、寛永10年(1633)小笠原忠知、正保2年(1645)には初代藩主松平英綱の3万7千石である。松平英綱は城山の北端の低地の城館に入城しており、これが近世の杵築城として明治4年の薩摩藩県まで能見松平氏10代227年間余り領内政治の中核部として機能している。現在、城内と呼ばれる一帯は本丸と西丸があり、本丸には政所が置かれていた。城外には広小路があり、役所や倉庫、武器庫などが建ち並んでいた。城山から杵築城郭に伴う城下町の構造は、幾つかの城下町絵図によって武家屋敷や町屋の様相を伺うことが出来る。

杵築城下町は北台、南台という高台の平坦地には石垣や土塀を築く武家屋敷が並び、その間に挟まれた低い谷部には文字通り谷川が流れ、短冊形の間口の狭い町屋が谷町、中町、新町として展開していた。この様な高台と谷と坂からなる城下町には勘定場の坂、酢屋の坂、塩屋の坂、船屋の坂、天神の坂などの坂道や石段道が有機的に結ばれており杵築城下町の歴史的景観を今なお留めている。

参考文献『杵築市誌本編』(平成17年)



杵築城下町遺跡の形成過程 — 杵築城下町の土層 (22区) —

## 第3章 調査の成果

## 第1節 17調査区

17調査区は長さ約9.2m、幅約4.5mの長方形を呈する。地表面の標高は海拔約3.8mである。土層は地表面から約1.7m～1.9m程度掘ると古灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山と変化している。

層序は比較的に整然と堆積しているが、約1.7mの堆積土内に焼土2面～焼土6面までの5回の焼土・炭化物層がバツクされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.2～0.3mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.3mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山上と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

## 1 検出遺構(第4図、5～7図、写真1)

## 側溝と石列(第5図)

調査区の東側で側溝と石列が検出された。側溝は、現県道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝は二段掘りの様相を呈し、溝幅約0.15mで、深さ約0.2～0.25mである。底部を除く側壁には掌大～人頭大の川原礫を1～2段に並べていた。一方、側溝の西側には、巨大な楕円礫とこれより一回り小振りの礫をセットにして二列に並べており、側溝上面より約0.5m程度高くしている。上面で約2.9～3m、下面で2.6mである。側溝は焼土5面よりは新しく、焼土3面よりは古くなる様相を呈する。

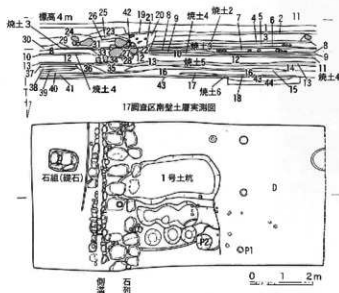
## 土坑(第6図)

調査区の中央部、海拔2.9mの地点で幾つかの不定形な土坑が検出されている。1号土坑は長軸約3.3m、短軸約1.4mであり、深さは約0.75mである。床面は略平坦面を呈する。用途不明であるが、土坑が埋まった後に石列が組まれており、石列より古いものである。

## [17調査区南壁土層説明]

- 1 コンクリート地表面
- 2 黄褐色土
- 3 暗茶褐色土
- 4 暗茶褐色粘質土(炭化物を多く含む。焼土2面)
- 5 灰白色砂質土(砂礫を含む)
- 6 暗茶褐色土(焼土、炭化物を含む。焼土3面)
- 7 暗灰色砂質土(砂礫を含む。焼土3～4面跡①)
- 8 暗黄褐色砂質土(焼土3～4面跡②)

- 9 灰白色砂質土(砂礫を含む。焼土3～4面跡③)
- 10 暗茶褐色土(焼土、炭化物を含む。焼土4面)
- 11 暗黄褐色土(焼土、炭化物を含む。焼土4面)
- 12 暗黄褐色粘質土(焼土4～5面跡①)
- 13 暗黄褐色土(焼土、炭化物を含む。焼土5面)
- 14 暗灰黄褐色粘質土(炭化物、黄色ブロックを含む。焼土5～6面跡①)
- 15 灰白色砂質土(細砂を含む。焼土5～6面跡②)
- 16 灰褐色シルト質土(細砂、炭化物、鉄分を含む。焼土5～6面跡③)
- 17 暗黄褐色粘質土
- 18 暗黄褐色土(焼土若干、炭化物を含む。焼土6面)
- 19 黄褐色土(径2～3cmの小石が混じる)
- 20 暗茶褐色土(径2～5cmの小石が多く混じる)
- 21 淡茶褐色土(焼土跡が少量混入)
- 22 暗灰褐色土(バサバサ径2～3cmの小石が混じる)
- 23 暗褐色土(硬い山土、近現代の埋戻層)
- 24 灰褐色土(近現代の埋戻層)
- 25 暗灰褐色土(焼土、炭化物を含む。焼土1面)
- 26 暗黄褐色土(やや粘性、径5mm程度の小石を含む)
- 27 暗黄褐色粘質土
- 28 暗灰褐色土(焼土、炭化物が若干混入。石列1の充填土)
- 29 淡茶褐色土(径5cm程度の石が多く混じる)
- 30 暗灰褐色土(径2～3cmの小石を多く含む)
- 31 灰白色砂質土(径1cm程度の小石を多く含む)
- 32 暗黄褐色粘質土(粘性有り、炭化物を若干含む)
- 33 灰褐色粘質土(粘性強く、径1cm程度の小石、炭化物、焼土粒を少量含む)
- 34 暗黄褐色粘質土(粘性強い、石列2の充填土)
- 35 淡灰褐色粘質土
- 36 灰褐色粘質土(砂、小石を含まない)
- 37 (14に対応)
- 38 (15に対応)
- 39 灰白色砂質土(砂、小石を含まない)
- 40 暗灰白色砂質土(細砂、径1～2mmの小石を少量含む)
- 41 暗黄褐色粘質土(粘性有り、黄褐色ブロックが多く混じる)
- 42 人頭大の礫多い
- 43 黄褐色砂質土(流れ込み遺物を包含)
- 44 青灰色シルト質土(粘りがあり、細砂、鉄分が混入)



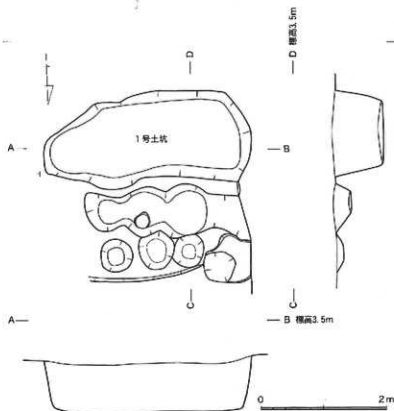
第4図 17調査区遺構配置図(1/120)

石組遺構 (第7図)

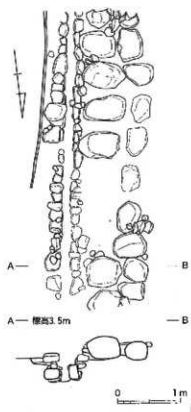
調査区の東端で検出された遺構である。土坑は長軸約2m、短軸約1.5mの隅丸長方形であり、深さは約0.75mである。床面は略平坦面を呈する。中には巨大な礫が組まれた状態であった。礎石の可能性も高い。

2 出土遺物 (第8図～第12図)

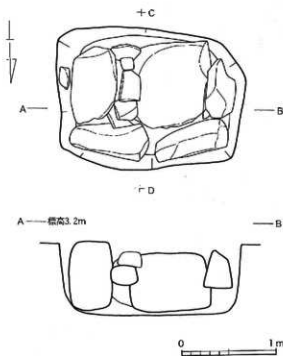
本調査区の出土遺物の詳細は表1に記述している。



第6図 17調査区1号土坑実測図 (1/60)



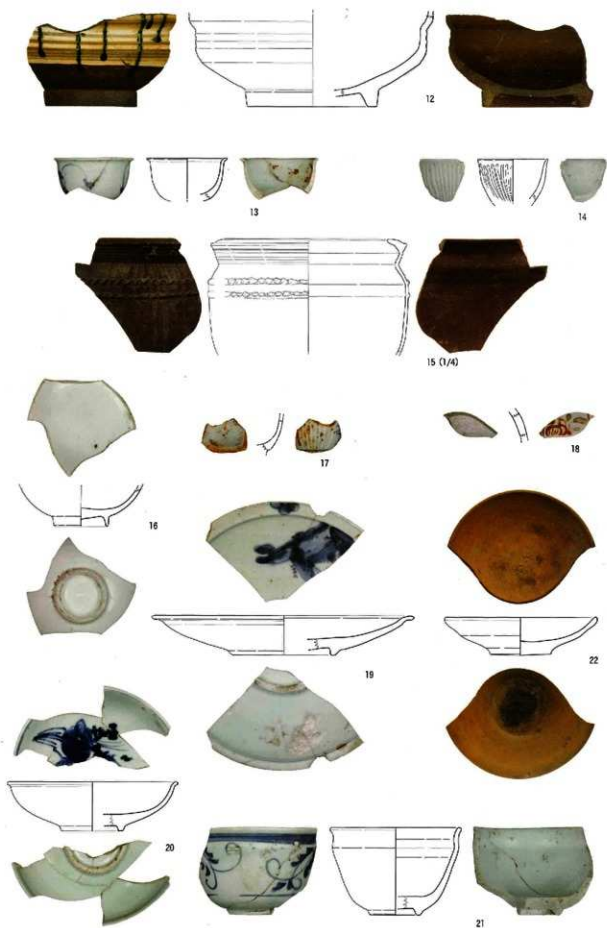
第5図 17調査区側溝と石列実測図 (1/60)



第7図 17調査区石組遺構実測図 (1/20)

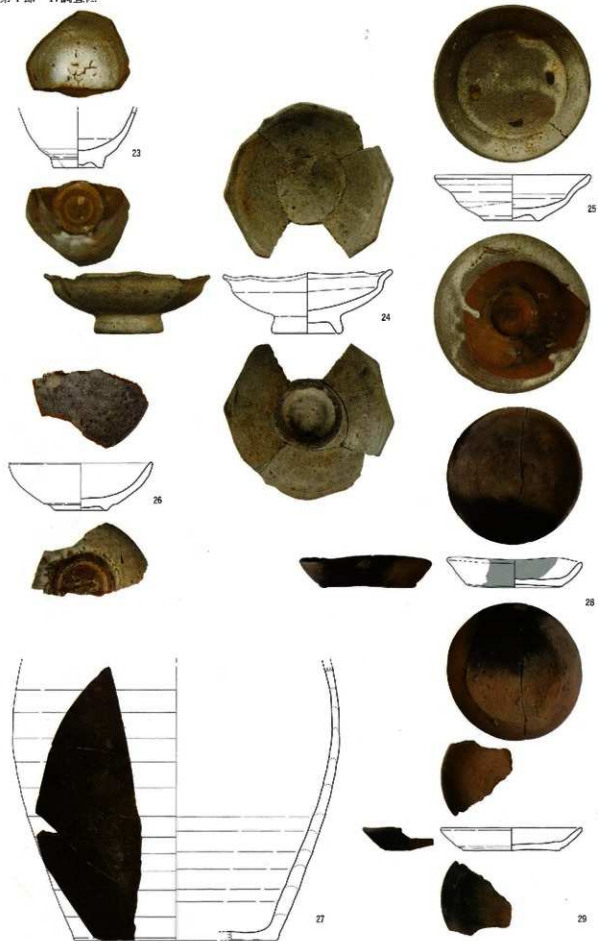


第8図 17調査区出土遺物 (1/3)

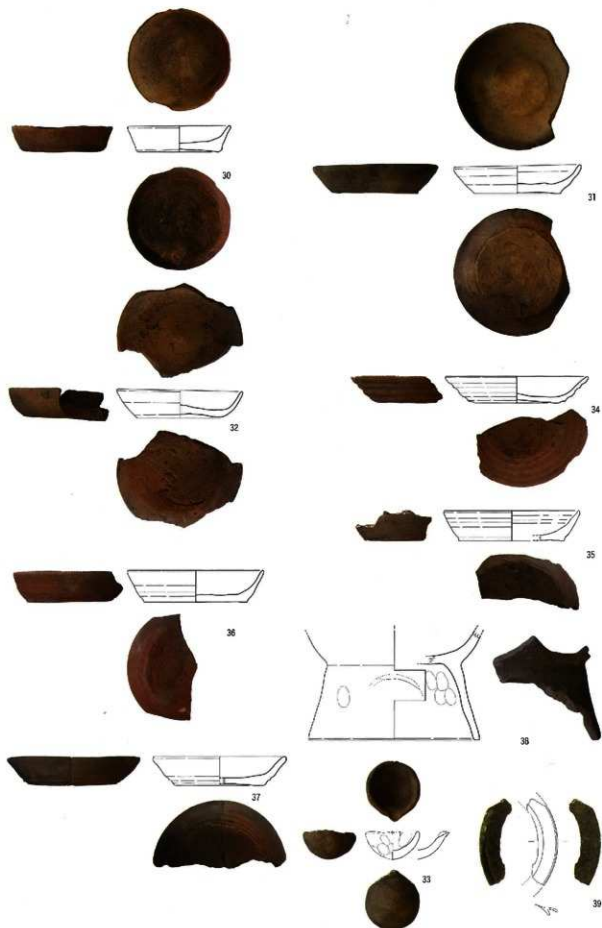


第9図 17調査区出土遺物 (1/3) ※15は1/4

第1節 17調査区

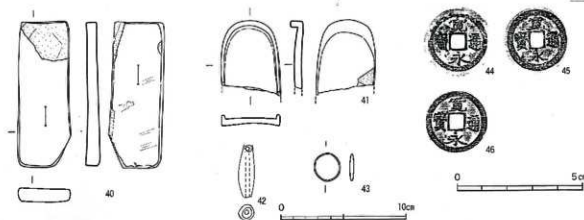


第10圖 17調査区出土遺物 (1/3)



第11図 17調査区出土物 (1/3)





第12図 17調査区出土遺物(1/3、2/3)

表1 17調査区出土遺物観察表

番号	遺物	出土層	産種	大きさ (cm)				形状	検定産地	特徴	時期	
				口径	高さ	底径	胴径					
1	S301		磁				3.4	1/3筒体	肥前		?	
2	S301		磁器 水筒				5.6	1/6筒体	肥前長門	武蔵人形内箱	18世紀前半	
3	S301		陶器 鉢	37.3				1/10筒体	肥前		17世紀後半～18世紀前半	
4	石川1		磁器 香花瓶					1/10筒体	中津		16世紀後半	
5	石川1下層		磁器 小杯	5.6	4.5	2.7		1/2筒体	肥前	島(しのぶ)文	1630～1650年?	
6	石川1下層		磁器 碗				4.5	廣部定形	肥前	蓮柄輪	17世紀～18世紀前半	
7	穴		磁器 碗	16.6	7	5.1		1/2筒体	肥前	高倉内除付盆	1630～1650年?	
8	雲土層		磁器 染付皿	13.2	3.3	3.5		1/3筒体	肥前	雲龍刺り、山吹除付	明治10年以降	
9	焼土3層		陶器 碗				4.2	廣部定形	肥前	蓮柄輪	17世紀～18世紀前半	
10	焼土3層		陶器 鉢	11.5	6.9	5.2		廣部～調部	肥前	蓮柄輪	17世紀後半～3回半層	
11	焼土3層		陶器 鉢	17.6				口縁の無	肥前		?	
12	焼土3層		陶器 鉢				10	廣部～調部1/3	肥前		17世紀後半～18世紀前半	
13	焼土3～4回層		磁器 小杯	6.3				1/3筒体	肥前	蓮華文	1630～1650年	
14	焼土3～4回層		磁器 小杯	5.6				1/5筒体	肥前	島(しのぶ)文	1630～1650年	
15	焼土4層		磁器 鉢	25				口縁の1/10	肥前		?	
16	焼土4層		磁器 碗				4.1	廣部定形	肥前	色絵	17世紀後半	
17	焼土4層		磁器 小杯					廣部定形	肥前	島(しのぶ)文、寿字文	1630～1650年	
18	焼土4層		磁器 鉢					廣部定形	肥前	色絵	?	
19	焼土4層		磁器 碗	20.2	3.1	8.1		1/4筒体	肥前	山吹文	1630～1650年	
20	焼土5層		磁器 空付瓶	13.6	3.5	4.9		1/3筒体	肥前		1630～1650年、1610～1630?	
21	焼土5層		磁器 染付碗	10.2	6.5	1		口縁の1/5	肥前	蓮柄輪	17世紀後半、1610～1630	
22	焼土5層下層		陶器 皿	11.5	2.9	4.8		2/3筒体	肥前		?	
23	焼土5層下層		陶器 碗				3.9	廣部定形	肥前	内丹豆柄輪	1380～1610	
24	焼土5層下層		陶器 鉢	12.2	6	6.6		碗定形	肥前	八内	1390～1610	
25	焼土5層下層		陶器 皿	12.1	3.6	4.7		碗形	肥前	内丹	1390～1610	
26	焼土5～6回層		陶器 皿	11.2	3.7	4.3		廣部の1/2	肥前		1390～1610	
27	焼土3～4回層		磁器 碗				16	26	廣部の1/10	肥前		
28	焼土5層下層		陶器 鉢	10.7	2～2.5	7.5		碗形	肥前	内丹赤切り、コクロ調	正徳4年	
29	焼土5層下層		陶器 鉢	11.2	1.8	7.6		口縁の1/5	肥前	内丹赤切り、コクロ調		
30	焼土5層下層		陶器 鉢	8.2	2～2.1	6.7		碗形	肥前	内丹赤切り、コクロ調		
31	焼土5層下層		陶器 鉢	10.1	2.1～2.3	6.9		碗形	肥前	内丹赤切り、コクロ調、正徳4年		
32	焼土5層下層		陶器 鉢	10	2.1～2.3	6.8		碗形1/2	肥前	内丹赤切り、コクロ調、ヘタ切		
33	焼土5層下層		陶器 鉢	4.3	2.2			碗形	肥前			
34	焼土5層下層		陶器 鉢	11.3	2.1	6.7		碗形1/3	肥前			
35	焼土5層下層		陶器 鉢	10.8	2.4	8.4		碗形1/5	肥前	内丹赤切り、コクロ調		
36	焼土5層下層		陶器 鉢	10.9	8.1	2.5		碗形1/5	肥前	内丹赤切り、コクロ調		
37	焼土5層下層		陶器 鉢	10.6	2.3	7.2		廣部の1/2	肥前	内丹赤切り、コクロ調		
38	焼土5層下層		陶器 鉢				13.6	廣部の1/5	肥前			
39	S301		銅製品				幅1.5	環状				
40	焼土5層下層		銅製品	長さ11	幅4.2	厚さ1	重さ38g	環状				
41	焼土4～5回層		銅	長さ4.6	幅0.6	厚さ0.6	重さ30.7g	環状				
42	焼土5層下層		土器	長さ11	幅1.2	高さ6.4g		碗形				
43	S301		磁器	長さ2.1		高さ2.5g		碗形				
44	S301		磁器 水筒	長さ2.1		高さ2.7g		碗形			「ス」の古貨	
45	焼土3～4回層		磁器 水筒	長さ2.4		高さ3.1g		碗形			「ス」の古貨	
46	焼土4層		磁器 水筒	長さ2.4		高さ2.9g		碗形			「ス」の古貨	



17調査区南壁土層（北方向から）



調査区全景（東方向から）



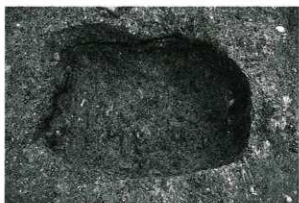
石列、側溝検出状態（南方向から）



石列1、側溝1検出（南方向から）



遺構検出状況（東方向から）



石組遺構掘形完掘状態（北方向から）



焼土5面遺物出土状態



焼土5面遺物出土状態

第2節 18調査区

18調査区は長さ約13.5m、幅約4mの長方形を呈する。地表面の標高は海拔約3.9~4mである。発掘調査は、地表面から約1.6m~2.1m程度掘ったが、約1.6mで青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山と変化している。

層序は比較的整然と堆積しているが、約1.6mの堆積土内に焼土3面~焼土5面までの3回の焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。3回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.02~0.03mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1~0.3mの黄褐色土層は礫を含み、人為的に持ち込まれた整地層であった。この搬入土は山土と想定され、人為的な遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

1 検出遺構 (第13、14回、写真2)

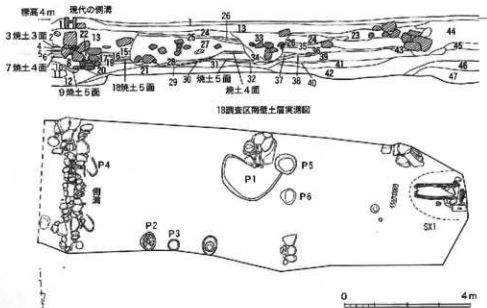
側溝 (第14回)

調査区の東端で側溝が検出された。側溝は、現泉道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝は、幅約0.15~0.18mで、深さ約0.15~0.3mである。底部を除く側壁には掌大~人頭大の川原礫を1~3段に並べていた。なお、この側溝から西に約6mと10.5mの位置には、人頭大の川原礫が調査区南壁沿いに縛まった痕跡があり、側溝の残影とも推測できる。一方、この側溝の直上やや東寄りには、現代の側溝が機能しており、側溝の位置が踏襲されてきたことが推察できる。

側溝は焼土5面よりは新しく、焼土3面よりは古くなる様相を呈する。

2 出土遺物 (第15回~第17回)

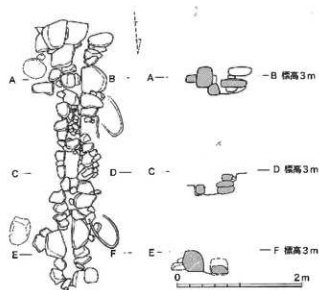
本調査区の出土遺物の詳細は表2に記述している。



第13回 18調査区遺構配置図 (1/120)

【18調査区南壁土層説明】

- |    |                                    |    |                               |    |                                    |
|----|------------------------------------|----|-------------------------------|----|------------------------------------|
| 1  | コンクリート地表面                          | 47 | 暗赤褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土4面)        | 65 | 暗赤褐色土 (焼土粒、小石、人頭大の礫を多く含む)          |
| 5  | 灰白色砂質土 (砂礫を含む)                     | 48 | 暗赤褐色粘質土 (径1cm程度の小石を多く含む)      | 66 | 暗赤褐色土                              |
| 8  | 暗赤褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土3面)             | 49 | 暗赤褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土5面)        | 67 | 赤褐色砂礫                              |
| 9  | 暗赤褐色粘質土 (焼土、炭化物を含む。焼土3面)           | 50 | 暗赤褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土5面)        | 68 | 灰褐色土 (小石を多く含む)                     |
| 11 | 暗赤褐色粘質土 (焼土3~4面間①)                 | 51 | 灰褐色粘質土 (径1cm程度の小石が混じる)        | 69 | 暗赤褐色粘質土                            |
| 12 | 暗赤褐色粘質土 (焼土4~5面間①)                 | 52 | 灰褐色粘質土 (黄色ブロックを含む)            | 70 | 暗赤褐色土 (炭化物層。焼土5面)                  |
| 13 | 暗赤褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土5面)             | 53 | 暗赤褐色粘質土                       | 71 | 暗赤褐色粘質土 (粘性強く、1cm程度の小石が入る)         |
| 14 | 暗赤褐色粘質土 (炭化物、黄色ブロックを含む。焼土5面①)      | 54 | 暗赤褐色粘質土 (赤褐色の礫土。掌大の礫、炭化物少量含む) | 72 | 暗赤褐色粘質土                            |
| 16 | 灰褐色シルト質土 (細砂、炭化物、鉄分を含む。焼土5面間③)     | 55 | 暗赤褐色土 (径5cm程度の石を含む)           | 73 | 暗赤褐色粘質土 (粘性強く、2cm程度の小石が入る)         |
| 44 | 青灰色シルト質土 (粒が小さく、細砂、鉄分が混入する。焼土5面間⑤) | 56 | 暗赤褐色土 (径2cm程度の小石を含む)          | 74 | 暗赤褐色粘質土                            |
| 45 | 暗赤褐色土                              | 57 | 暗赤褐色土 (炭化物を多く含む)              | 75 | 暗赤褐色土 (粘性強く、5cm程度の小石、鉄分が混入する)      |
| 46 | 淡灰褐色土 (径2cm程度の小石を多く含む)             | 58 | 灰白色土 (小石を含まない)                | 76 | 暗赤褐色土 (小石を含む)                      |
|    |                                    | 59 | 灰白色砂礫土 (径5~10cmの小石を多く含む)      | 77 | 淡赤褐色土                              |
|    |                                    | 60 | 暗赤褐色土 (炭化物層。焼土5面)             | 78 | 暗赤褐色砂礫土 (1cm程度の小石が混入する)            |
|    |                                    | 61 | 赤褐色土 (焼土層。焼土5面)               | 79 | 青灰色シルト質土 (粒が小さく、細砂、鉄分が混入する。44層に对应) |
|    |                                    | 62 | 暗赤褐色土 (径2cm程度の礫石が少量混じる)       |    |                                    |
|    |                                    | 63 | 暗赤褐色粘質土 (粘性強く、鉄分が混入する)        |    |                                    |
|    |                                    | 64 | 灰褐色粘質土 (径2cm程度の小石を含む)         |    |                                    |

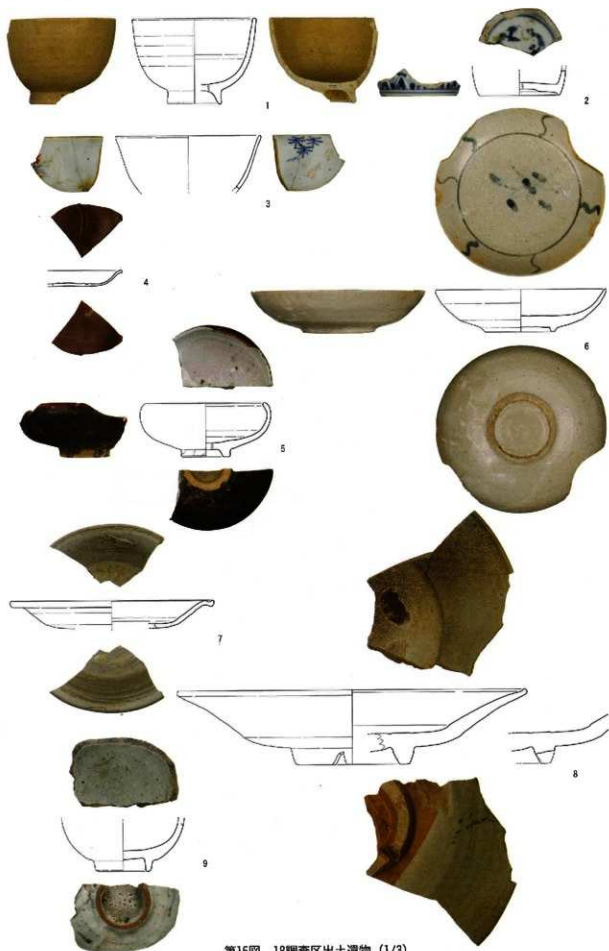


第14図 18調査区側溝尖測図 (1/60)

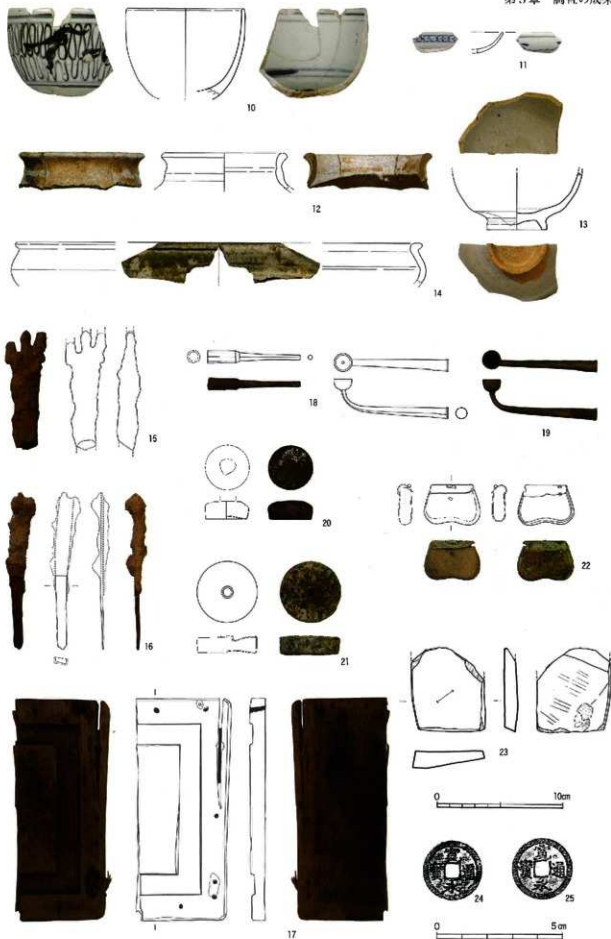
表2 18調査区出土遺物観察表

番号	遺物	出土層	器種	大きさ (mm)				残存状況	発見層地	特徴	時期
				口径他	器高他	底径他	器深他				
1	一拵		陶器 筒	9.6	6.6	4.2		1/5 断片	肥前	内外透切筋	17世紀後半～18世紀前半
2	一拵		磁器 開口			6.2		底部の1/2	肥前		18世紀後半
3	一拵		磁器 碗	11.4				口縁の1/10	肥前	赤絵、黒灰釉、焼き跡等あり	1810～1860年
4	一拵		陶器 皿		1.2			底部の1/5	筑前系	物打ち成形	19世紀
5	一拵		磁器 鉢	8.4	4.2	3.8	10.4	1/3 断片	伊豆	外黒釉、内透切筋	1630～1630年
6	一拵		磁器 染付皿	13.5	3.3	5.6		略欠部	肥前		1630～1630年
7	側溝2下面		陶器 皿	16	2.2			口縁の1/5	肥前	調緑色	1600～1630年
8		礎上4面	陶器 鉢	25.8	5.9	8.8		1/5 断片	肥前	砂土、磨り返し	1600～1630年
9		灰白色砂層層	陶器 碗			4.3		底部の1/2	肥前	陶器染付	18世紀前半
10		礎上5面～灰白色砂層層	陶器 染付碗	9.1				口縁の1/5	肥前		17世紀中頃～後半
11		礎上5面下層	磁器 染付皿		1.6			口縁の1/10	肥前		18世紀前半
12		礎上5面下層	陶器 壺	9.3				口縁の1/2	肥前上野	ワラ灰地	17世紀前半
13		礎上5面下層	陶器 碗			4.7		底部の1/2	肥前		1500～1610年
14		礎上5面下層	陶器 鉢	31.2				口縁断片	肥前	灰釉	?
15	側溝2下面		鉄製品		幅3.2	厚0.7～1.7	重さ51.1g	破片		三叉の金突き	
16	一拵		鉄製品				重さ38.5g	破片		小銃	
17	一拵		木器	長さ17.6		幅さ1～1.2		破片		「o」字の溝、背割痕	
18	一拵		磁器 碗	高さ7.4			重さ3.6g	破片			
19	一拵		磁器 碗	長さ9.2		火跡径1.3	重さ6.9g	破片			
20	一拵		陶器品	高さ1.4		底径3.3	重さ13.2g	破片			
21	一拵		陶器品	高さ1.4		底径4.8	重さ43.6g	破片			
22	一拵		銅製品	長さ4.5	高さ3.2	厚さ1～1.2	重さ19.1g	略欠部		不明	

第2節 18調査区



第15図 18調査区出土遺物 (1/3)



第16図 18調査区出土遺物 (1/3)

第17図 18調査区出土遺物 (1/3、2/3)

写真2



18調査区側溝検出状態 (北方向から)



南壁土層 (北方向から)



石列検出状態 (北方向から)



SX1検出状態 (北方向から)



調査区検出状態 (東方向から)

### 第3節 19調査区

19調査区は長さ約11m、幅約5.4～7mの長方形を呈する。地表面の標高は海拔約3.8mである。土層は地表面から約1.8m程度掘ると青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地層と変化している。発掘調査は部分的であるが2.5mの深さまで土層の確認をした。

層層は比較的整然と堆積しているが、約2.5mの堆積土内に焼土3面～焼土6面までの4回の焼土・炭化物層がパツクされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。4回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.02～0.03mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.3～0.6mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

#### 1 検出遺構 (第18回～第24回、写真3)

##### 1号石列 (第19回)

調査区の中央部で長さ4.8mの石列が検出された。石列は、一抱えもある巨大な川原石を1～2段に並べて直線的に配列したもので、巨石と巨石の間に拳大や人頭大の石を置いたものである。現泉道の宗近魚町線にほぼ直角に配置されており、南方の谷川へと続く御溝の東片側のみが遺存したものとも推量できる。石列中央部での標高は、検出面で約2.9～3m、下面で2.6mである。

##### 2号石列 (第18回)

調査区の南壁近くに位置する石列である。大、小の礫が混在しており、石列が築石遺構かも知れずとしない。検出面の標高は約2.5m前後であり、4号石列の上面に位置している。

##### 3号石列 (第20回)

調査区の中央部で長さ4.5mの石列が検出された。石列は、一抱えもある巨大な川原石と拳大や人頭大の石を集めて直線的に並べたものである。石列内の石の密度には濃淡がある。南壁近くで直角に曲がり、西向きに2m程延びる様相を呈する。石列中央部での標高は、検出面で約1.9m、下面で1.45mである。この石列の上面に2号土坑が位置している。

##### 4号石列 (第21回)

調査区の中央部やや東側で長さ約6.9mの石列が検出された。石列は、川原石を1～2段に並べて直線的に配列したもので、巨石と巨石の間に拳大や人頭大の石を置いたものである。石列中央部での標高は、検出面で1.25m、下面で1.05mである。水が湧き出る状態である。この石列の上面に2号石列が位置している。

##### 1号土坑 (第22回)

調査区の中央部西寄りで長方形の土坑が検出されている。土坑は長軸約3m $\times$  $\alpha$ 、短軸約0.9m～1.4mであり、深さは約0.5mである。床面は略平坦面を呈する。用途不明である。土坑の標高は、検出面で2.95m、床面で2.25mである。この土坑は3号石列の上面に位置している。

##### 2号土坑 (第23回)

調査区の中央部西寄りで方形の土坑が検出されている。土坑は長軸約1.4m、短軸約1.2mの隅丸方形であり、検出面からの深さは約0.05mである。床面は略平坦面を呈する。土坑の中央は1字形に心持ち窪み、土坑内には縁に沿って拳大～人頭大の礫が並べて配列された状態であった。土坑の標高は、検出面で2.75～2.8m、床面で2.63mである。この土坑は3号石列の上面に位置している。

##### 3号土坑 (第24回)

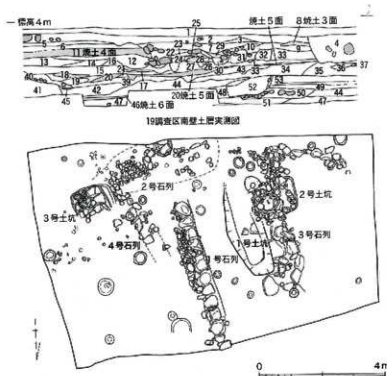
調査区の東端で検出された遺構である。土坑は北半分を欠損しており、現長軸で約1.35m、現短軸で約1mの隅丸方形であり、検出面からの深さは約0.25～0.3mである。床面は略平坦面を呈する。中には1段の礫や拳大の礫が整然と組まれた状態に入っていた。土坑の標高は、検出面で2.45～2.5m、床面で2.2mである。この土坑は4号石列の上面に位置している。

#### 2 出土遺物 (第25回～第35回)

本調査区の出土遺物の詳細は表3に記述している。

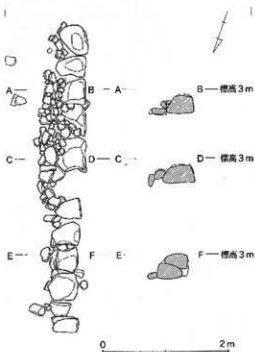


第3節 19調査区



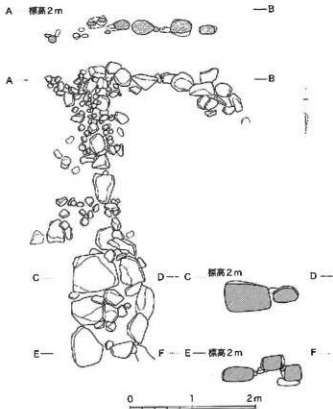
第18図 19調査区遺構配置図 (1/120)

- 44 黄灰色粘質土 (粘りが強い)
- 45 紫褐色土 (炭化物層)
- 46 灰褐色シルト質土 (炭化物層。焼土6面)
- 47 灰色砂礫層 (3cm前後の砂礫を多く含む。石列4はこの層中で検出)
- 48 灰褐色粘質土 (1m程度の砂礫が混じる)
- 49 緑灰色粘質土 (炭化物が微量部分的に混る)
- 50 暗褐色粘質土 (石列3はこの層中で検出)
- 51 黄褐色砂質土
- 52 黄褐色粘質土
- 53 灰褐色粘質土 (鉄分が珪に入る)



第19図 19調査区1号石列実測図 (1/60)

- 【19調査区南壁土層説明】
- 1 コルクリード地表面
  - 2 淡茶褐色土 (焼土、炭化物、礫を多く含む)
  - 3 赤褐色砂質土 (1m程度の小石を多く含む)
  - 4 紫褐色土 (黄肌層。炭土、炭化物、礫を多く含む)
  - 5 暗褐色土 (焼土。炭化物少量含む)
  - 6 淡茶褐色土 (軟土質。炭化物を含む)
  - 7 淡茶褐色土
  - 8 (厚2cm程度の砂礫を含む。瓦片が多い。炭化物を少量含む)
  - 9 暗赤褐色土 (焼土。炭化物を多く含む。焼土3面)
  - 10 暗灰褐色土 (炭化物を少量含む。1m程度の砂礫を含む)
  - 11 暗赤褐色土 (焼土。下部に炭化物を含む。焼土4面)
  - 12 暗褐色粘質土 (焼土4〜5面混り)
  - 13 灰白色砂質土 (鉄分が珪に入る。厚2cm程度の小石を多く含む)
  - 14 灰褐色砂質土 (鉄分が珪に入る。粗砂)
  - 15 黄褐色粘質土 (厚5cm程度の小石を多く含む)
  - 16 灰褐色粘質土 (炭らかな土質。砂粒を含まない。鉄分が珪に入る)
  - 17 灰褐色粘質土 (厚2cm程度の小石を含む)
  - 18 淡灰褐色土 (炭化物、焼土粒を少量含む。焼土5面)
  - 19 灰褐色粘質土 (厚5cm程度の小石を含む)
  - 20 暗茶褐色土 (炭化物を多く含む。焼土は少ない。焼土5面)
  - 21 灰褐色粘質土 (鉄分が珪に入る)
  - 22 暗茶褐色土 (1m程度の鉄分が少量混じり。灰色ブロックが珪に入る)
  - 23 暗灰褐色土 (下部に焼土粒が集積。焼土4面)
  - 24 淡灰褐色砂質土
  - 25 淡黄褐色砂質土
  - 26 暗灰褐色土 (炭化物を少量含む)
  - 27 暗灰色土
  - 28 灰褐色粘質土 (炭化物、焼土粒を多く含むビット埋土)
  - 29 淡灰褐色土 (黄色ブロック。厚1cm程度の小石を多く含む)
  - 30 暗灰褐色粘質土 (粘りが強く、炭化物を少量混じる)
  - 31 暗灰褐色粘質土 (炭化物、焼土粒を少量含むビット埋土)
  - 32 暗茶褐色土 (炭化物、焼土粒を少量含むビット埋土)
  - 33 灰褐色砂礫層 (厚2cm程度の小石を含む)
  - 34 淡灰褐色粘質土 (黄色ブロックを多く含む)
  - 35 暗黄褐色粘質土 (厚2cm程度の小石を多く含む)
  - 36 暗茶褐色土 (炭化物多いビット埋土)
  - 37 茶褐色粘質土
  - 38 暗褐色土 (石列3の埋土)
  - 39 暗黄褐色粘質土 (鉄分が珪に入る。小石を多く含む)
  - 40 灰褐色土 (赤大石を含む)
  - 41 灰黄色砂質土 (鉄分が珪に入る)
  - 42 灰褐色粘質土 (中に炭化物の集積)
  - 43 淡黄褐色粘質土 (厚2cm程度の小石を含む)



第20図 19調査区3号石列遺構実測図 (1/60)

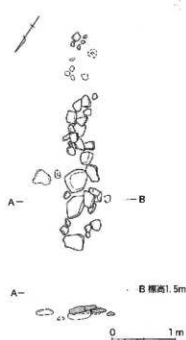
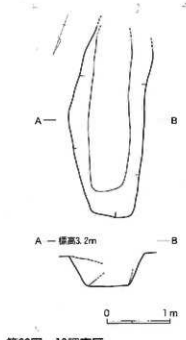
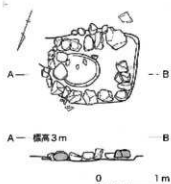
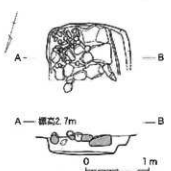
第21図 19調査区  
4号石列遺構実測図 (1/60)第22図 19調査区  
1号土坑遺構実測図 (1/60)第23図 19調査区  
2号土坑遺構実測図 (1/60)第24図 19調査区  
3号土坑遺構実測図 (1/60)

表3 19調査区出土遺物観察表

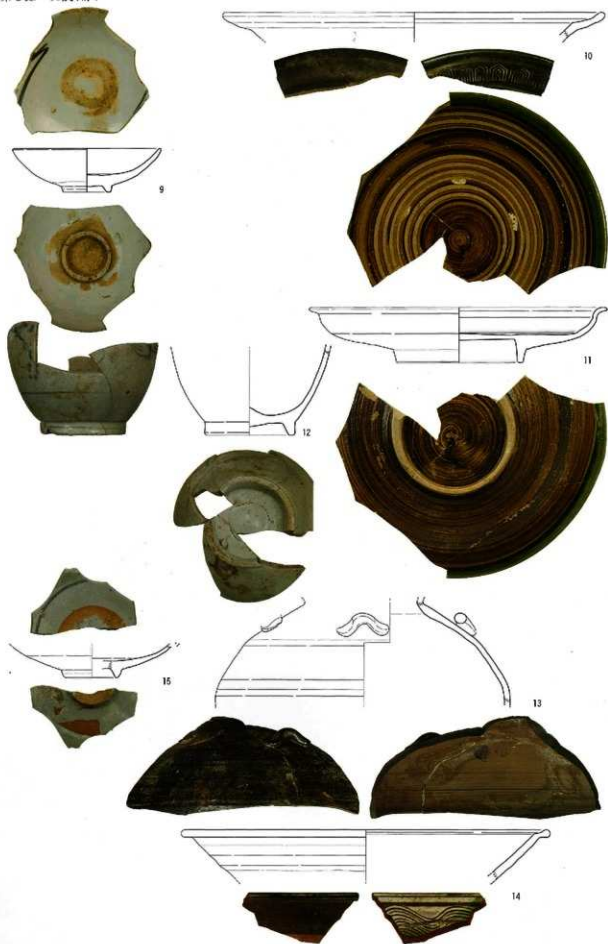
番号	遺物	出土層	器種	大きさ (mm)				残存状況	発見状況	発見地	特徴	時期
				口径他	輪高他	器体高	器体最大径					
1	柄		陶器 輪鉢	31.8				口縁の1/5	帯		?	
2	柄		陶器 急須	14.3	2.8	8.8		1/4個体	底面		17世紀後半?	
3	一拵		磁器 急須	4.1		8		1/4個体	底面	増設扉?	明後10世紀	
4	一拵		陶器 小椀			5.3		底面	底面	縁毛目、縁部の内側に輪高を有する	1850～1850年	
5	一拵		磁器 急須	6.8			9	口縁の1/5	底面、折角	裏付小椀	17世紀後半	
6	一拵		陶器 鉢	16.9				口縁の1/2	底面		?	
7	一拵		陶器 小椀			3.6		底面の1/2	裏付小椀		大正後半～昭和	
8	一拵		陶器 鉢	30.3	13.1	10.2		口縁の1/5	?	?	?	
9	一拵		磁器 鉢	11.6	3.4	3.9		1/2個体	底面		?	
10	一拵		陶器 大皿	29.4					破片			
11	一拵		陶器 鉢	22.8	4.4	9.7		2/3個体	肥前陶器、手付、縁部に内側に、裏面		1630～1630年、1650年	
12	一拵		磁器 急須			7		2/3個体	底面	ぶどう文、二次産物	1650～1670年	
13	1号土坑	(表13第5の層付点)	陶器 茶碗				23	底面片	表阿・裏内底	裏付小椀	17世紀	
14	1号土坑	(表13第6の層付点)	陶器 鉢	28.2					底面	縁毛目	17世紀後半～18世紀前半	
15	1号土坑	(表13第6の層付点)	陶器 鉢			4.2		底面の1/5	底面	縁毛目	18世紀後半	
16	1号土坑	(表13第6の層付点)	陶器 鉢	5.1	25.9	11	14.1	底面	底面	ワタ糸織、1号茶碗、二次産物	17世紀後半～18世紀前半	
17	1号土坑	(表13第6の層付点)	陶器 鉢	29	13.1	12.9	30.5	底面	底面		?	
18	1号土坑	(表13第6の層付点)	小形 小形	4.2	3.2	1.8		1/2個体	底面		?	
19	1号土坑	(表13第6の層付点)	陶器 鉢	9	13.7	6.4	14.2	1/3個体	底面		?	
20	2号土坑		陶器 鉢	28.8	18.2	14.2	32.3	11個の1/3	?		?	
21	石付3上層		磁器 急須	13.9	3.1	8.5		底面の1/3	底面		17世紀後半?	
22	鉢蓋子陶器		陶器 急須	13.4	2.9	5.2		1/5個体	底面		?	
23	表13上層		陶器 鉢	26.2				口縁の1/3	底面	縁毛目	17世紀後半～18世紀前半	
24	表13上層		陶器 鉢			5.2		底面の1/3	底面		?	
25	表13上層		陶器 内皿	4.6	0.9	2.4		底面	底面	縁毛目、底面に内側に、上層に縁毛目	?	
26	表13上層		陶器 鉢			8.8		底面の1/4	底面		?	
27	表13上層		陶器 鉢			11		底面の1/2	底面	内面縁毛目	17世紀後半～18世紀前半	
28	表13上層		陶器 鉢			14.4		底面の1/2	裏面	内底	1650年後半～1850年	
29	表13上層		磁器 急須				10	底面	底面、有用		?	
30	表13上層		白磁 白磁			5.1		底面の1/2	底面		?	
31	表13上層		陶器 鉢			4.5		底面	底面	縁毛目	?	
32	表13上層		陶器 鉢			9.6		底面	底面	内面縁毛目	?	
33	表13上層		陶器 鉢			3.4		口縁の1/5	裏面	底面	19世紀後半	

第3節 19調査区

番号	遺構	遺土上部	層号	大きさ (cm)			存在否	植込の深	小径	時期	
				1径径	断面径	外径径					
24	礎土4面	切石	礎	12	4.8	4.3	1/4 残存	肥前	現出(うつ)近江、キヌタホ	17世紀末～18世紀前半	
25	礎土4面	切石	礎	4.8			11層の1/2	肥前	遺構のみ?	?	
26	礎土4面	切石	礎				1/4 残存	肥前		17世紀後半～18世紀	
27	礎土4面	切石	礎	6.7			1/4 残存	肥前		17世紀後半～18世紀前半	
38	礎土4面	切石	礎	14.2	3	8.4	1/4 残存	肥前		?	
39	礎土4～5面間	切石	礎	30.3			11層の1/5	肥前		?	
40	礎土4～5面間	切石	礎			8.4	肥前	跡部	跡部	?	
41	礎土4～5面間	切石	礎			4.7	肥前	跡部	跡部	1630～1650年	
42	礎土4～5面間	切石	礎			4.6	肥前	跡部	跡部	1630～1650年	
43	礎土4～5面間	切石	礎	10.9	7.1	3.8	1/4 残存	肥前	文相、木軸	17世紀前半?	
44	礎土4～5面間	切石	礎			4.1	肥前	跡部		17世紀前半	
45	礎土4～5面間	切石	礎			3.9	1/4 残存	肥前	跡部	1630～1650年	
46	礎土4～5面間	切石	礎			3.9	11層の1/5	肥前	跡部	17世紀前半	
47	礎土4～5面間	切石	礎			5.2	1/3 残存	肥前	跡部	1630～1650年	
48	礎土4～5面間	切石	礎			4.4	肥前	跡部		1630～1650年	
49	礎土4～5面間	切石	礎	18.4	10.3	8.2	1/2 残存	肥前	跡部	17世紀前半	
50	礎土4～5面間	切石	礎	9.9	6.7	4.2	肥前	跡部	外郭跡、内郭跡	1630～1650年	
51	礎土4～5面間	切石	礎	10.4	6.9	4.4	1/3 残存	肥前	跡部	?	
52	礎土4～5面間	切石	礎			5	肥前	跡部	跡部	1630～1650年	
53	礎土4～5面間	切石	礎			4.1	肥前	跡部	肥前	1530～1630年	
54	礎土4～5面間	切石	礎			18.6	肥前	跡部	肥前	1530～1630年	
55	礎土4～5面間	切石	礎			11.4	肥前	跡部	肥前	?	
56	礎土5面	切石	礎			9.3	肥前	跡部	跡部	17世紀前半	
57	礎土5面	切石	礎	9.7			13.2	肥前	跡部	跡部	17世紀前半
58	礎土5面	切石	礎	16.2	8.5	17	13.7	肥前	跡部	跡部	1630～1650年
59	礎土5面	切石	礎			4.9	肥前	跡部	跡部	1630～1650年	
60	礎土5面	切石	礎	13.9	8.1	5.4	1/2 残存	肥前	跡部	1630～1650年	
61	礎土5面	切石	礎	11.2	5.8	4.6	1/3 残存	肥前	跡部	1630～1650年	
62	礎土5面	切石	礎	13.9	4.2	5.3	1/2 残存	肥前	跡部	1590～1630年	
63	礎土5面	切石	礎			4.8	肥前	跡部	跡部	?	
64	礎土5面	切石	礎	13.9	4.1	5.2	1/3 残存	肥前	跡部	1590～1630年	
65	礎土5面	切石	礎	10.1	2.4	5.3	肥前	跡部	跡部	1590～1630年	
66	礎土5面	切石	礎			5.4	肥前	跡部	跡部	1630～1650年	
67	礎土5面	切石	礎	11.0	3.3	4.4	11層の1/5	肥前	跡部	1630～1650年	
68	礎土5面	切石	礎	11.6	3.3	4.4	1/2 残存	肥前	跡部	1630～1650年	
69	礎土5面	切石	礎			8.9	2/3 残存	肥前	跡部	?	
70	礎土5面	切石	礎			25.2	肥前	跡部	肥前	?	
71	礎土5面	切石	礎			22.2	肥前	跡部	肥前	?	
72	礎土5面	切石	礎			17.2	肥前	跡部	肥前	?	
73	礎土4面	切石	礎	45	11.7	20	11層の1/5	肥前	跡部	?	
74	礎土4面	切石	礎	10.1	2.5	6.7	1/4 残存	肥前	跡部	?	
75	礎土4～5面間	切石	礎	8.2			11層の1/5	肥前	跡部	?	
76	礎土4～5面間	切石	礎	9.9	2.1	6.3	跡部	跡部	跡部	?	
77	礎土5面	切石	礎	26.4			跡部	跡部	跡部	?	
78	礎土5面	切石	礎			6.3	跡部	跡部	跡部	?	
79	礎土5面	切石	礎			6.3	跡部	跡部	跡部	?	
80	礎土4～5面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
81	礎土4～5面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
82	礎土5面	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
83	礎土5面	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
84	礎土5面	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
85	礎土5面	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
86	礎土5面	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
87	礎土4面	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
88	礎土3面	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
89	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
90	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
91	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
92	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
93	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
94	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
95	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
96	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
97	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
98	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
99	礎土4～5面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
100	礎土4～5面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
101	礎土4～5面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
102	礎土4～5面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
103	礎土4～5面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
104	礎土4～5面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
105	礎土5面	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
106	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
107	礎土3～4面間	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	
108	礎土5面	切石	礎			6.4	跡部	跡部	跡部	?	



第25図 19調査区出土遺物 (1/3)

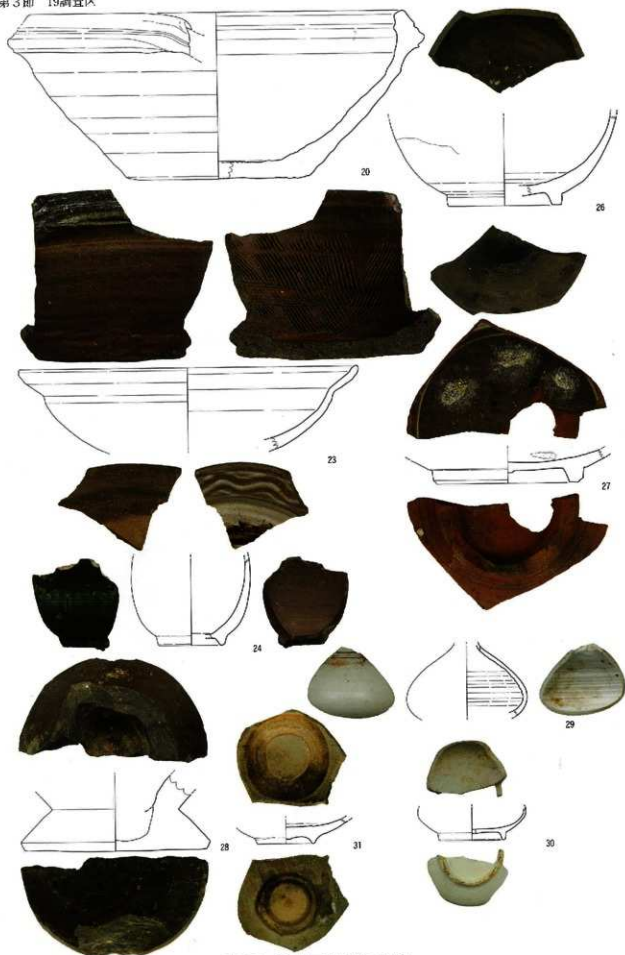


第26図 19調査区出土遺物 (1/3)

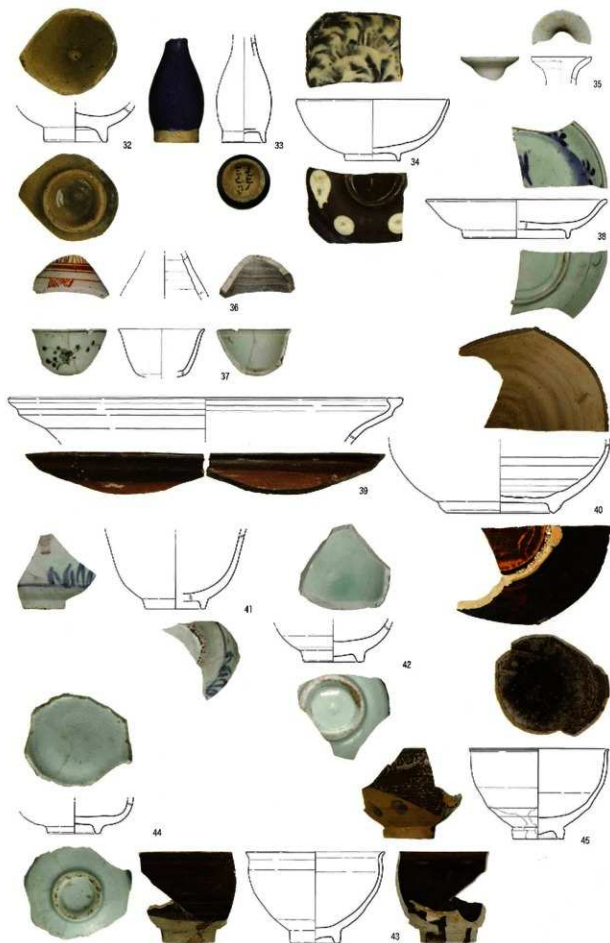


第27図 19調査区出土遺物 (1/3)

※17は1/4

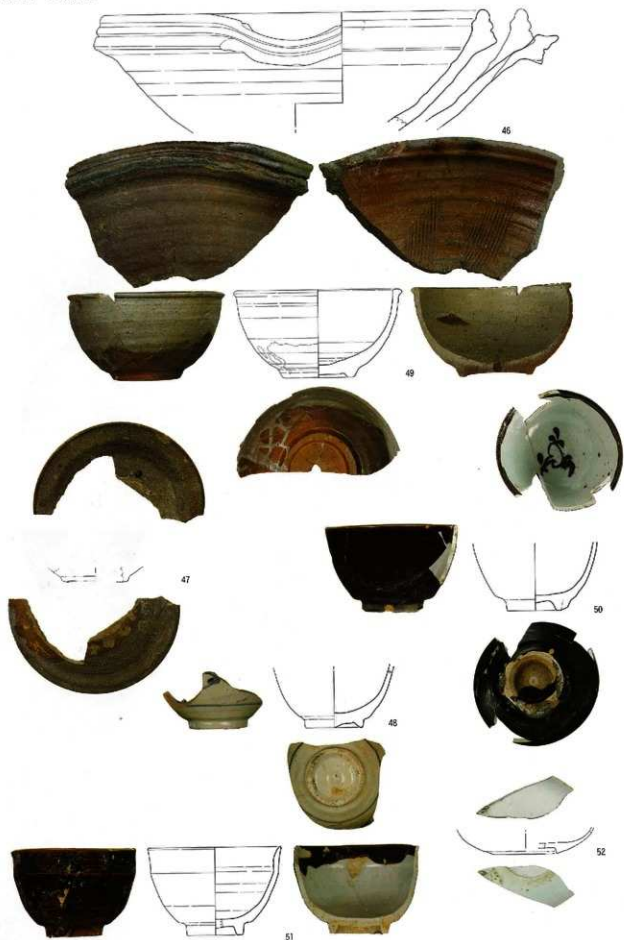


第28図 19調査区出土遺物 (1/3)

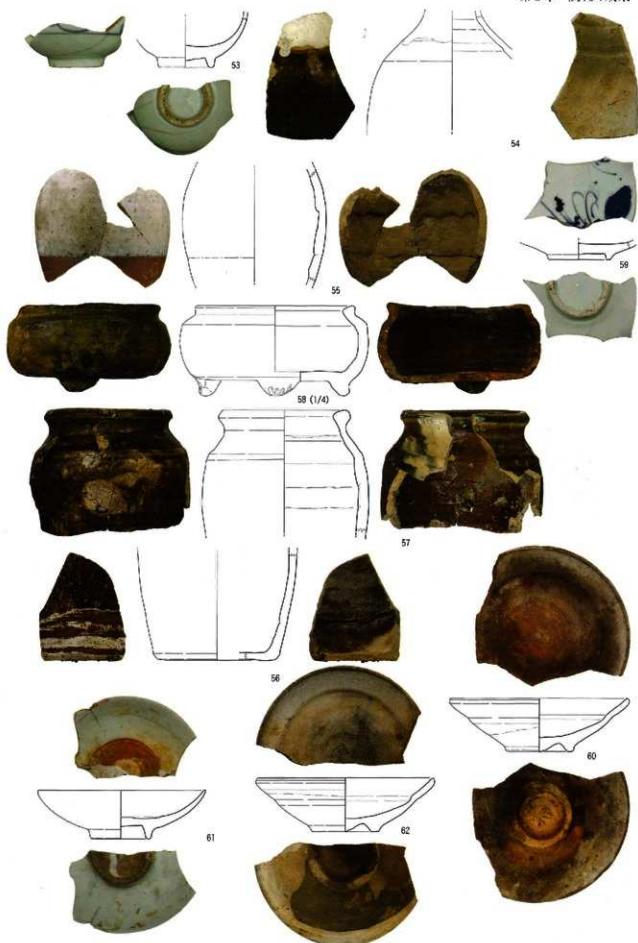


第29図 19調査区出土遺物 (1/3)





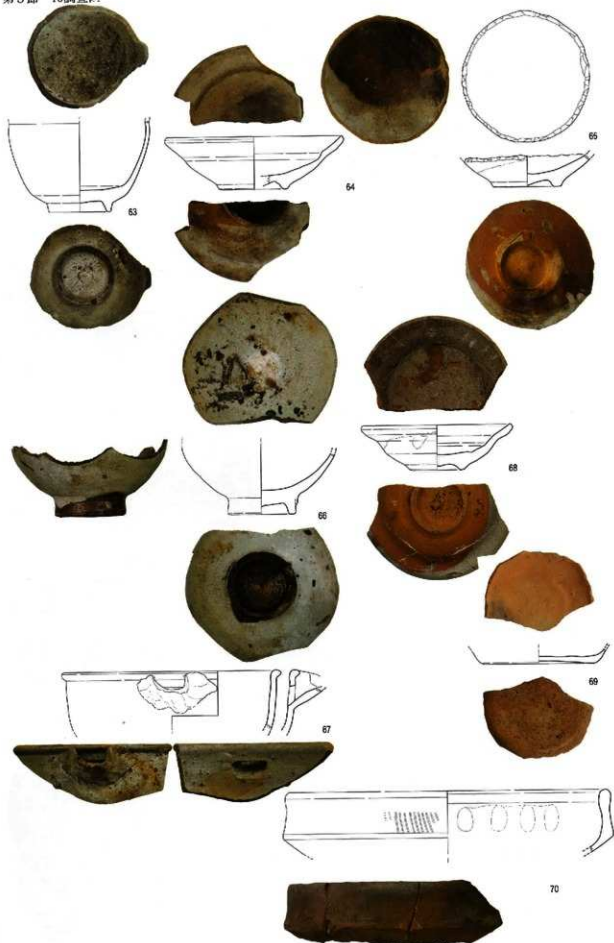
第30圖 19調査区出土遺物 (1/3)



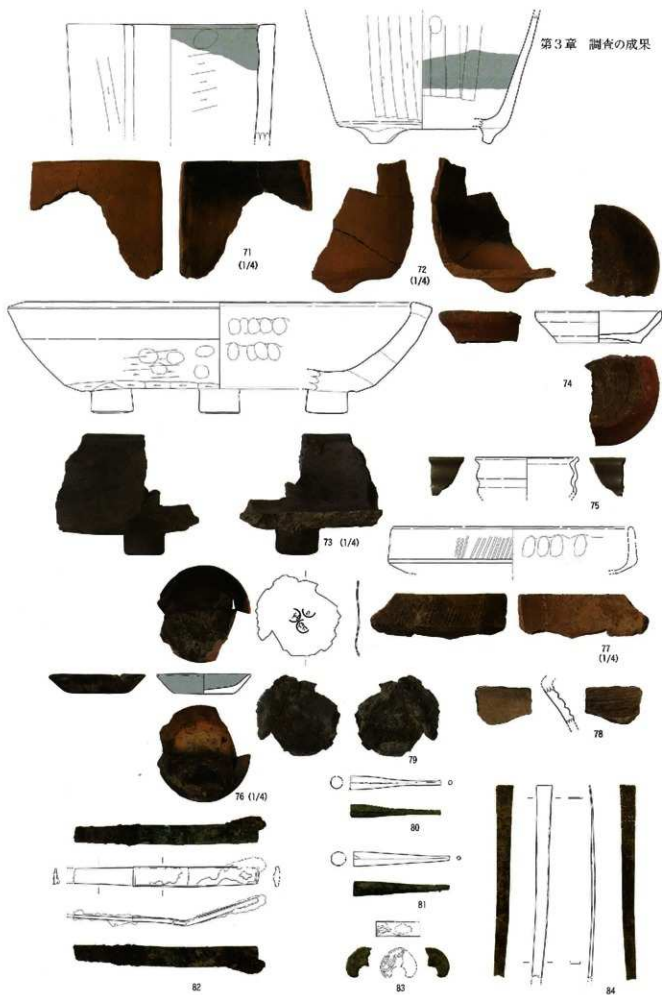
第31図 19調査区出土遺物 (1/3)

※58は1/4

第3節 19調査区

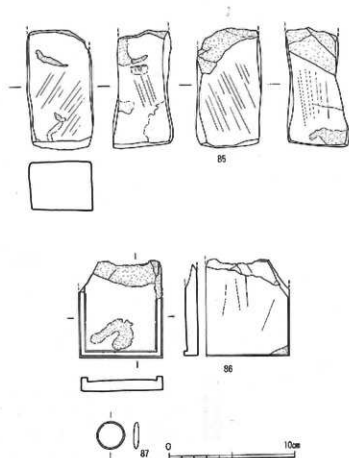


第32図 19調査区出土遺物 (1/3)

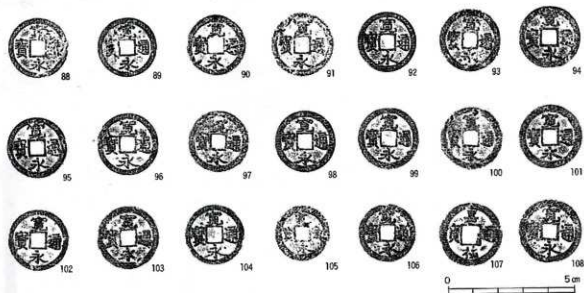


第33図 19調査区出土遺物 (1/3)

※71~73、76、77は1/4



第34図 19調査区出土遺物 (1/3)



第35図 19調査区出土遺物 (2/3)



19調査区遺構検出状態（西方向から）



1号石列検出状態（北方向から）



南壁土層断面



焼土5面陶磁器出土状態（西方向から）



1号土坑完掘状態（北方向から）



2号土坑検出状態（西方向から）



3号土坑検出状態（西方向から）



3号石列検出状態（北方向から）

## 第4節 20調査区

20調査区は長さ約16m、幅約4mの長方形を呈する。地表面の標高は約4.1mである。調査区の出土遺構を俯瞰すると、調査区南壁断面には東隅から約3.5～4m置きに巨石が並んで遺存しており、側溝の痕跡と推察できる。土層は地表面から約1.7m～1.9m程度掘ると青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山と変化している。層序は比較的整然と堆積しているが、約1.8mの堆積上内に焼土1面～焼土6面までの6回の焼土・炭化物層がバックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。6回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.02～0.03mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.7mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山上と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に上砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

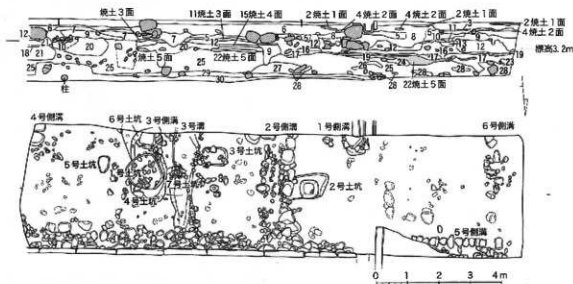
## 1 検出遺構 (第36～43図、写真4)

## 1号側溝 (第36図)

1号側溝は現在のコンクリート製の側溝の位置を踏襲しており、調査区南壁に巨石が卵巣まで遺存していた。これは、1号側溝の東片側の石垣の一部と推量できる。石の底面の標高は3.13、3.16、3.18mである。一方、1号側溝の西片側の石垣は調査区の中央部に3～4個並んでいる巨石と推察できる。石の底面の標高は3.11、3.15、3.17mである。焼土5面より上位に位置している。

## 2号側溝 (第37図)

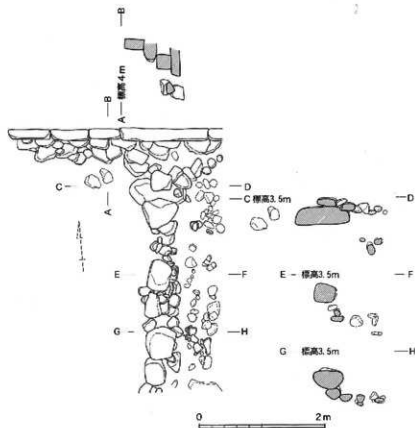
調査区の中央部に遺存する側溝である。側溝の西側には巨大な石と人頭大や拳大の石が2～3段に積まれているが、東側には人頭大や拳大の石が二列に並んでおり巨石は内壁を除いて確認できない。側溝は、現泉道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の幅は約0.3～0.45m程であるが



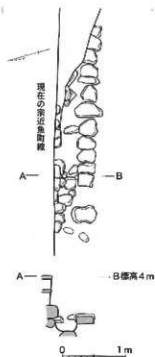
第36図 20調査区遺構配置図 (1/120)

## 【20調査区南壁土層説明】

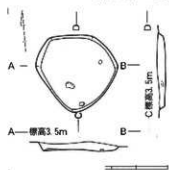
- |                            |                                 |
|----------------------------|---------------------------------|
| 1 コンクリート地表面                | 16 灰褐色砂質土 (人頭大の礫を含む)            |
| 2 赤茶褐色土 (炭化物を僅かに含む。焼土1面)   | 17 灰褐色砂質土 (小石を含む)               |
| 3 暗褐色土                     | 18 灰褐色砂質土                       |
| 4 焼土2面 (炭化物を多く含む)          | 19 茶褐色粘質土 (径5cm程度の小石を含む)        |
| 5 茶褐色砂質土 (小石、炭化物を少量含む)     | 20 暗灰褐色粘質土 (焼土粒を含む)             |
| 6 淡茶褐色土 (礫、焼土粒、炭化物を含む)     | 21 灰白色粘質土 (礫かに砂粒を含む)            |
| 7 灰黄褐色砂質土 (瓦片や礫を含む)        | 22 焼土5面 (炭化物、焼土塊を多く含む)          |
| 8 は5層と同様 (瓦を多く含む)          | 23 暗黄褐色土 (礫や礫かに炭化物を含む)          |
| 9 暗褐色砂質土 (最大の礫を多数に含む)      | 24 灰黄色砂質土 (小粒の礫を含む)             |
| 10 暗褐色土 (黄褐色の砂と小石を含む)      | 25 暗黄褐色砂質土 (焼土、炭化物や小粒～人頭大の礫を含む) |
| 11 焼土3面 (焼土粒を僅かに含む。炭化物層)   | 26 淡灰褐色土 (径1cm程度の小石を多く含む)       |
| 12 暗黄褐色土 (径10cm程度の小石を多く含む) | 27 暗灰褐色砂質土 (鉄分の沈着あり)            |
| 13 暗黄褐色土 (炭化物を少量含む)        | 28 暗灰褐色土 (鉄分の沈着あり)              |
| 14 暗黄褐色土 (暗黄褐色土が混入)        | 29 灰褐色シルト (マンガンの沈着あり、最上層は焼土6面)  |
| 15 焼土4面 (上に炭化物の礫、下に厚い焼土層)  | 30 青灰色シルト層                      |



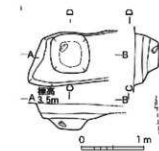
第37図 20調査区2号側溝実測図 (1/60)



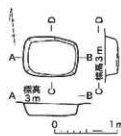
第38図 20調査区5号側溝実測図 (1/60)



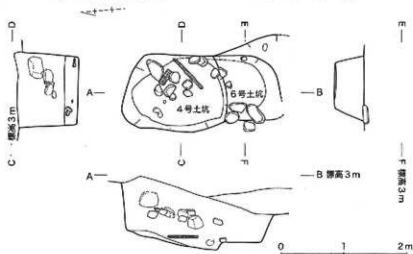
第39図 20調査区  
1号土坑実測図 (1/60)



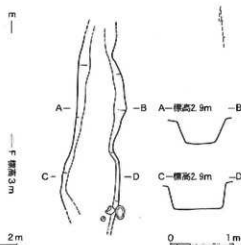
第40図 20調査区  
2号土坑実測図 (1/60)



第41図 20調査区  
3号土坑実測図 (1/60)



第42図 20調査区4号、6号土坑実測図 (1/60)



第43図 20調査区3号溝実測図 (1/60)



拳大の礫が二列に配置されており、溝幅は定かではない。溝の深さは0.4～0.5m程度である。検出面の側溝上面は標高3.25～3.5mで、下面では2.55～2.65mである。

### 3号側溝・3号溝 (第36、43図)

調査区の中央東寄り、3号溝の東片側の調査区南壁には巨石を組んだ痕跡があり、側溝の一部と推量された。しかし、3号溝との関係は明瞭ではない。

3号溝は調査区の中央東寄りに位置する溝である。溝は現泉道の宗近魚町線に接して直角に配置されているが、平面は定型ではない。溝はいわゆる箱掘りであり、溝幅は約0.5～0.9mと一定ではないが、深さは約0.4m程度である。検出面の側溝上面は標高2.7～2.75mで、下面では2.4～2.45mである。

### 4号側溝 (第36図)

調査区の東端の南壁に位置する巨石である。側溝の痕跡は明瞭ではないが、現在の側溝の位置から推量するとこの巨石の位置が側溝と想定できる。

### 5号側溝 (第38図)

調査区の北西隅に位置する側溝である。側溝は現泉道の標高約4mの宗近魚町線に接して並行に配置されており、調査区の北壁に沿って遺存している様相を呈する。昔の道路の側溝の一部と推察できる。側溝は3m程度が明瞭であり、南片側には一抱えもある大きな石と人頭大の石が整然と配置されているが、北片側には同じ様な石を二段に並べており、その上面が切つての道路と推察される。側溝の溝幅は約0.3m程度であるが、現道路敷きからの深さは0.45m程度下位である。検出面の側溝上面は標高3.55mで、下面では3.15mである。

### 6号側溝・石列 (第36図)

調査区の西端で石列が発見されている。拳大～人頭大の石礫を、他の側溝と同じように平行して並べたものである。石の底面の標高は2.12、2.14、2.16、2.18m等と低く、水が湧き出る位置である。側溝か石列かの判断も定かではないが6号側溝としておく。

### 1号土坑 (第39図)

調査区の中央部東寄りに位置する土坑である。平面形は不整形で、長軸約1.25m、短軸約1.1mであり、確認面から床面までは僅か0.1～0.15m程度である。土坑は4、6、7号土坑の上に位置しており、確認面の標高は3.35m、床面は3.2mである。

### 2号土坑 (第40図)

調査区の中央部、2号側溝の中央西側に接する土坑である。平面形は不整形で、長軸約1.2m+ $\alpha$ 、短軸約0.85mであり、確認面から床面までは僅か0.1～0.25m程度であるが、一部に一辺0.6mの隅丸方形で深さ0.4mを呈する部分がある。土坑確認面の標高は3.45m、床面は3mである。

### 3号土坑 (第41図)

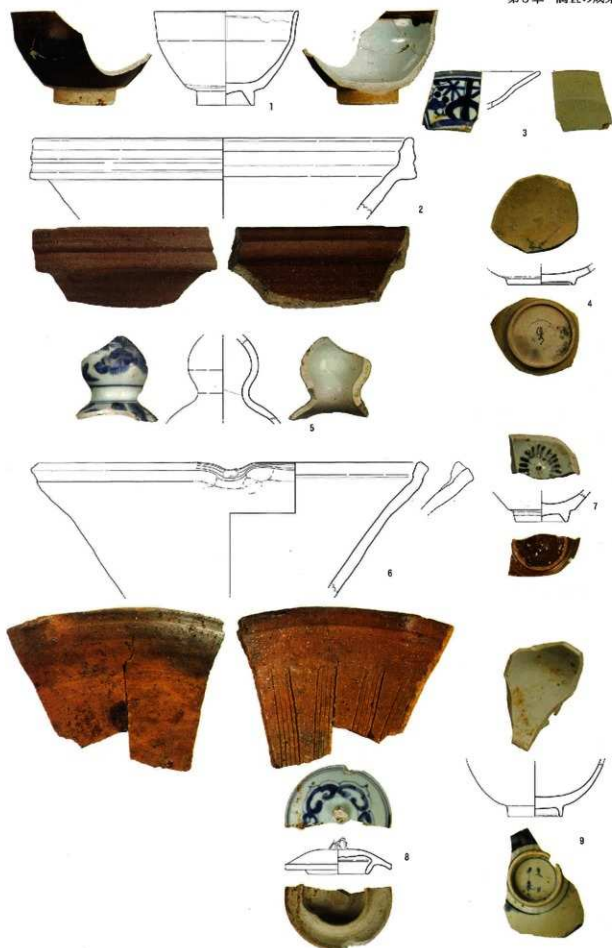
調査区の中央部やや東側に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸約0.87m、短軸約0.63mであり、確認面から床面までは僅か0.2m程度である。土坑確認面の標高は2.9m、床面は2.7mである。

### 4、6、7号土坑 (第36、42図)

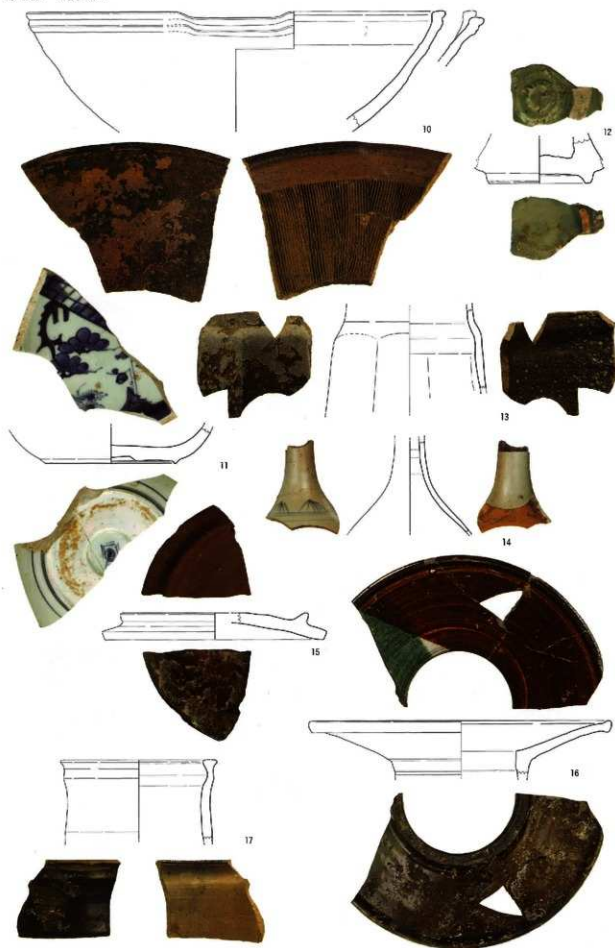
調査区の東寄りに位置する重複した土坑である。平面形は隅丸の不整形であり断面は箱掘りを呈する。4号土坑は長軸約1.68m、短軸約1.2mであり、確認面から床面までは0.75～0.95m程度である。土坑内には川原礫や木片が流れ込んでいた。水が湧く状態である。1号土坑の下に位置しており、4号土坑の確認面の標高は2.89m、床面1.83～2.15mである。

6号土坑は長軸約0.85m+ $\alpha$ 、短軸約1mであり、確認面から床面までは0.45m程度である。土坑の確認面の標高は2.39～2.66m、床面1.94mである。

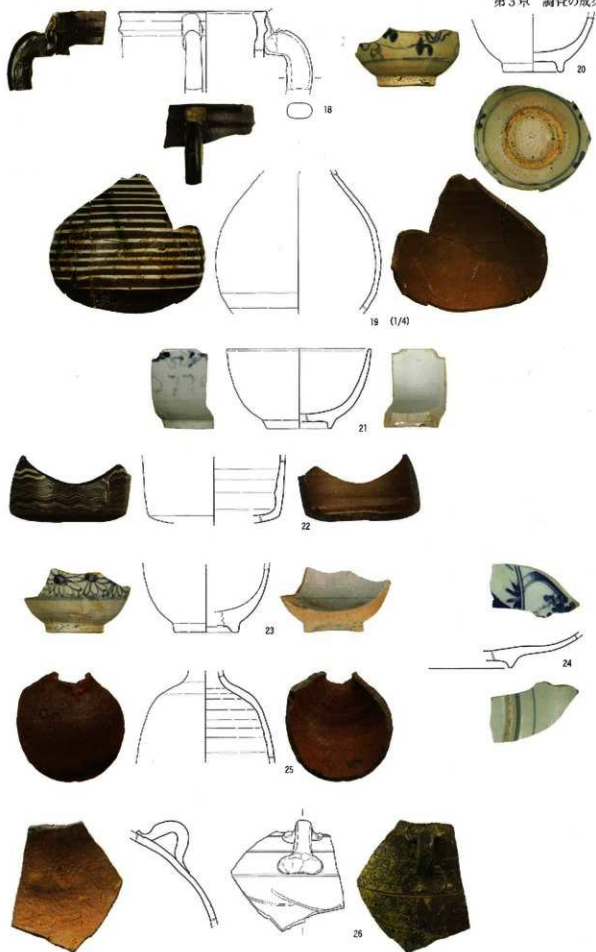
7号土坑は長軸約0.7m+ $\alpha$ 、短軸約1mであり、確認面から床面までは0.57m程度である。土坑の確認面の標高は2.84m、床面2.27mである。



第44図 20調査区出土遺物 (1/3)



第45図 20調査区出土遺物 (1/3)



第46図 20調査区出土物 (1/3)

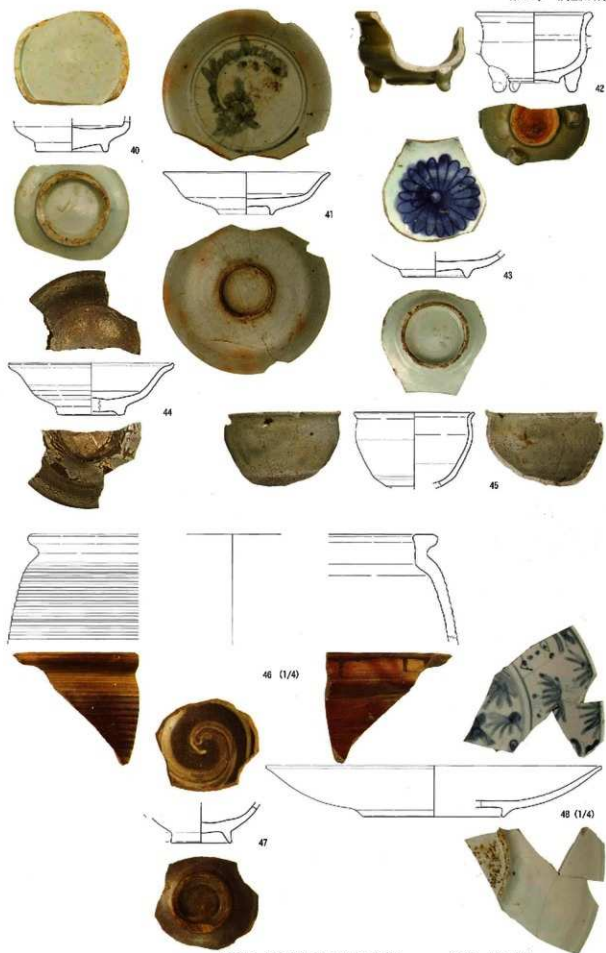
※19は1/4

第4節 20調査区



第47図 20調査区出土遺物 (1/3)

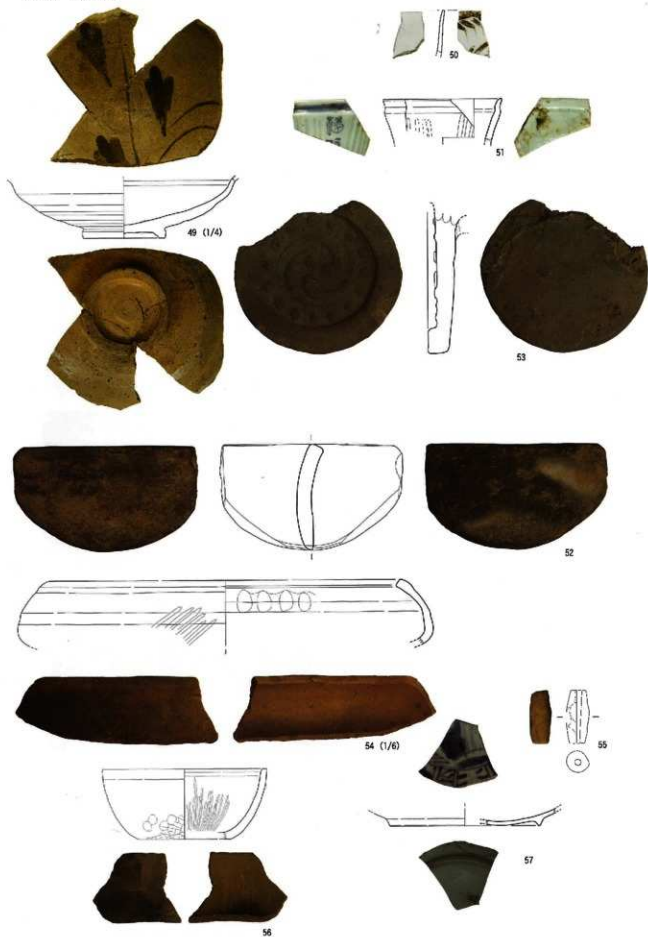
※32は1/4



第48図 20調査区出土遺物 (1/3)

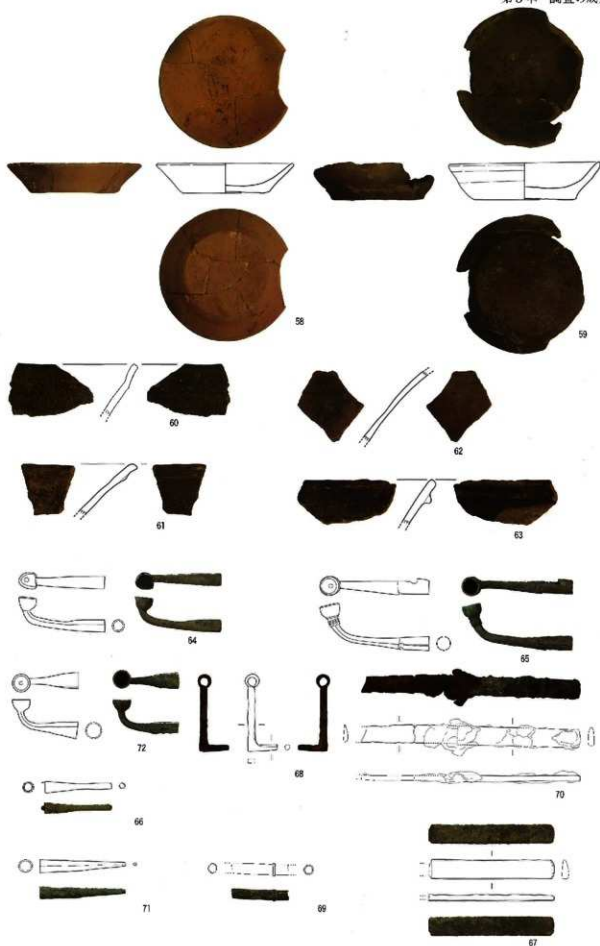
※46、48は1/4

第4節 20調査区



第49図 20調査区出土遺物 (1/3)

※49は1/4、54は1/6



第50図 20調査区出土遺物 (1/3)



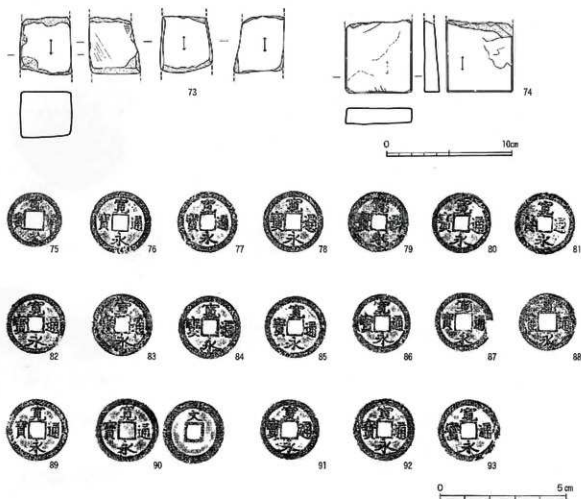
第4節 20調査区

5号土坑 (第36図)

1、4、6、7号土坑の東に位置する不定形土坑である。長軸約0.6m、短軸約0.37mであり、確認面から床面までは0.08m程度である。土坑の確認面の標高は2.630m、床面2.520mである。

2 出土遺物 (第44図～第51図)

本調査区の出土遺物の詳細は表4に記述している。



第51図 20調査区出土遺物 (1/3、2/3)

表4 20調査区出土遺物観察表

番号	遺物	出土時期	種類	大きさ (cm)				現存数	検定品数	付属	年代
				口径	高さ	厚さ	径間				
1	一括		磁器	幅	11.3	7.3	4.6	1/1 磁片	磁器	外装飾、内装有様	1630～1650年
2	一括		陶器	磁片	20.2			1/磁片 30	磁器	玉ねねき磁片	17世紀
3	1号土坑		磁器	磁片				磁片	磁器		17世紀前半～18世紀前半
4	4号土坑		陶器	磁片			5.4	磁器文部	茶器		?
5	4号土坑		磁器	磁片				1/4 磁片	磁器	茶器類	?
6	4号土坑	底上1～5の間	陶器	磁片	29.6			1/磁器類4	1/磁の1/5	丹波子	17世紀末～17世紀前半
7	1号溝		陶器	磁片	4.2			磁の2/3	磁器	外装飾、内装明輪	1630～1650年
8	1号溝		磁器	磁片	4.6	現存品2.6		1/磁片 4	磁器		17世紀
9		底上2～3の間	陶器	磁片	4.3				磁器	CC製	17世紀前半～18世紀前半
10		底上2～3の間	陶器	磁片	32.4				?	丹波子	?
11		底上3の間	陶器	磁片			10.2		1/磁の1/5	磁器	18世紀前半～後半
12		底上3の間	古物	磁片			8		磁の1/4	磁器	?
13		底上3の間	陶器	磁片					磁片	外装飾、内装磁片	17世紀
14		底上3の間	磁器	磁片				1/磁片	磁器		?
15		底上3の間	陶器	磁片	17.6		2.1		1/磁の1/5	?	?



第4節 20調査区

写真4



20調査区作業風景（東方向から）



20調査区全景（東方向から）



南側壁面（北方向から）



北側壁面（南東方向から）



2号側溝（北方向から）



5号側溝（西方向から）



焼土3面1号土坑



焼土4面遺物出土状態

## 第5節 21調査区

21調査区は長さ約17m、幅約4～4.8mの長方形を呈する。地表面の標高は約4mである。調査区の出土遺構を俯瞰すると、調査区の東側半分には不定形の土坑が遺存し、西半分には側溝や集石遺構が検出されている。

土層は地表面から約1.4m程度掘ると、水の濁く青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山と変化している。層序は比較的に整然と堆積しているが、約1.9mの堆積土内に焼上3面～焼上7面までの5回の焼上・炭化物層がバックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼上・炭化物層はそれぞれ約0.01～0.02mから約0.4mの厚さがあり、これらに挟まれた約0.2～0.35mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。青灰色シルト層の直上にある焼上6面は炭化物の層であり、他の火災遺構とは様相が異なる。

### 1 検出遺構 (第52～58図、写真5)

#### 1号側溝 (第53図)

1号側溝は調査区の中央部やや西側に位置する。側溝は、現泉道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の溝幅は約0.3～0.4m程度である。側溝の東片側には拳大～人頭大の川原礫が堆まれ、西片側には人頭大～口大な川原礫が整然と組まれていた。側溝の断面をみると、側溝の両側には拳大～人頭大の石垣の川原礫が10段前後に組まれていた。西片側には木杭が二本確認でき、側溝と嵩上げ土の補強用に使用されたことが推察できた。

側溝の確認面の標高は東片側で3.6m、西片側で3.72mであり、西側が高く整地されていた。石垣の基礎部は標高2.5m前後であり、石垣の側溝が1m以上も繰り返し組まれたことが判る。石垣を組む以前には、素掘りの溝が遺存していたことが堆積土層から推量できる。

#### 2号側溝 (第52図)

調査区の中央部の北壁に沿って遺存する側溝である。側溝の南片側には巨大な石と人頭大や拳大の石が片面を揃えて一列に配置されている。側溝は、現泉道の宗近魚町線に平行に位置していた。検出面の側溝上面は標高3.35～3.5mで、下面では3.13～3.28mである。

#### 3号側溝 (第52図)

調査区の西端に位置する現在使用中の側溝である。人頭大の川原礫を溝の両端に並べたものである。溝幅は0.5m前後である。溝は現泉道の宗近魚町線に接して直角に配置されている。

#### 1号集石 (第54図)

調査区の西南に位置する集石遺構である。拳大～人頭大の円礫を直径0.8m前後に集めたものである。

#### 1号土坑 (第52図)

調査区の中央部に位置する土坑である。平面形は不整形で、長軸約0.7m、短軸約0.6mであり、確認面から床面までは僅か0.1m程度である。確認面の標高は3.08m、床面は2.98mである。

#### 2号土坑 (第55図)

調査区の中央部、4号土坑に接する土坑である。平面形は不整形で、長軸約0.8m、短軸約0.6mであり、確認面から床面までは僅か0.16m程度であるが、片方に深さ0.6mを呈する柱穴様の落ち込み部分がある。土坑確認面の標高は3.1mである。

#### 3号土坑 (第52図)

調査区の中央部やや東側に位置する。平面形は不整形で、長軸約0.7m、短軸約0.65mであり、確認面から床面は0.1mと0.2mの段差がある。土坑確認面の標高は3.1m、床面は2.9mである。

#### 4号土坑 (第56図)

調査区の中央部北寄り位置する不定形土坑である。平面形は隅丸の不整形で、長軸約1.45m、短軸約1mであり、確認面から床面までは0.15m程度である。土坑確認面の標高は3.1m、床面は2.95mである。

5号土坑 (第52図)

5号土坑は長軸約0.5m、短軸約0.4mであり、確認面から床面までは0.2m程度である。土坑の確認面の標高は3.05mである。

6号土坑 (第57図)

調査区の東寄りに位置する不定形土坑である。平面形は隅丸の不整形で、長軸約1.45m、短軸約0.98mであり、確認面から床面までは0.25m程度である。土坑確認面の標高は3.08m、床面は2.8mである。

7号土坑 (第52図)

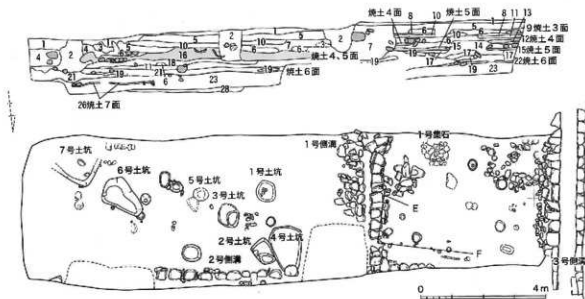
調査区の東寄りに位置する方形土坑である。北隅のコーナーを残すのみである。確認面から床面までは0.2m程度である。土坑確認面の標高は3.07m、床面は2.92mである。

最下層面枕列 (第58図)

現京道が近魚町線に平行してはしる2号側溝と1号側溝が直角に接合する地点の最下層面で、木杭と中空の竹か草の茎のような小さな枕列が0.15~0.2m置きに検出されている。小さな枕列は石組の側溝と同じように配置されており、石組側溝の以前にはこの様な欄列状の側溝が配置されていた様相である。

2 出土遺物 (第59図~第64図)

本調査区の出土遺物の詳細は表5に記述している。

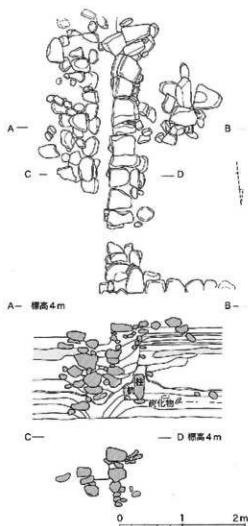


第52図 21調査区遺構配置図 (1/120)

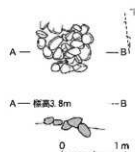
[21調査区南壁土層説明]

- 1 地表面
- 2 腐乱層 (コンクリート片や鉄骨を含む)
- 3 砂層 (砂礫の層)
- 4 茶褐色土 (焼土、炭化物を少量含む)
- 5 茶褐色土
- 6 暗黄褐色土 (小石~人頭大の石を多く含む)
- 7 暗茶褐色土 (炭化物を少量含む)
- 8 肌灰白色砂質土
- 9 焼土3面 (焼土と炭化物の層)
- 10 淡茶褐色土 (糠や小石を多く含む)
- 11 灰白色砂質土 (僅かに砂粒を含む)
- 12 焼土4面 (炭化物、焼土層)
- 13 黄褐色土
- 14 灰茶褐色土 (砂質と粘土質が混在した層。炭化物や焼土塊を若干含む)

- 15 焼土5面 (炭化物、焼土塊を多く含む)
- 16 焼土4、5面  
(焼土4、5面の区分が不明瞭。炭化物、焼土塊を多く含む)
- 17 灰黄褐色砂質土 (小石を含む)
- 18 茶褐色粘質土 (黄褐色土が混入)
- 19 淡灰褐色粘質土 (小石を含む)
- 20 黄褐色粘質土
- 21 灰褐色シルト (鉄分の沈着あり)
- 22 暗黄褐色土 (炭化物の層、焼土6面)
- 23 青灰色シルト層
- 24 青灰色シルト層 (黄褐色土を帯びる)
- 25 淡黄灰色砂層 (小石を少量含む)
- 26 暗黄褐色土 (炭化物を含む。焼土7面)
- 27 青灰色砂質土層
- 28 地山 (砂礫堆積層)



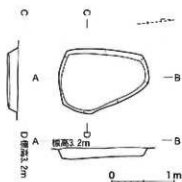
第53図 21調査区1号側溝実測図 (1/60)



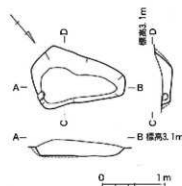
第54図 21調査区1号集石実測図 (1/60)



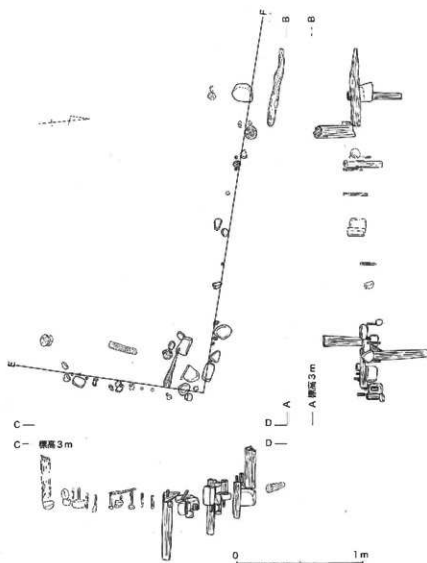
第55図 21調査区2号土坑実測図 (1/60)



第56図 21調査区4号土坑実測図 (1/60)



第57図 21調査区6号土坑実測図 (1/60)



第58図 21調査区最下層面杭列実測図 (1/30)

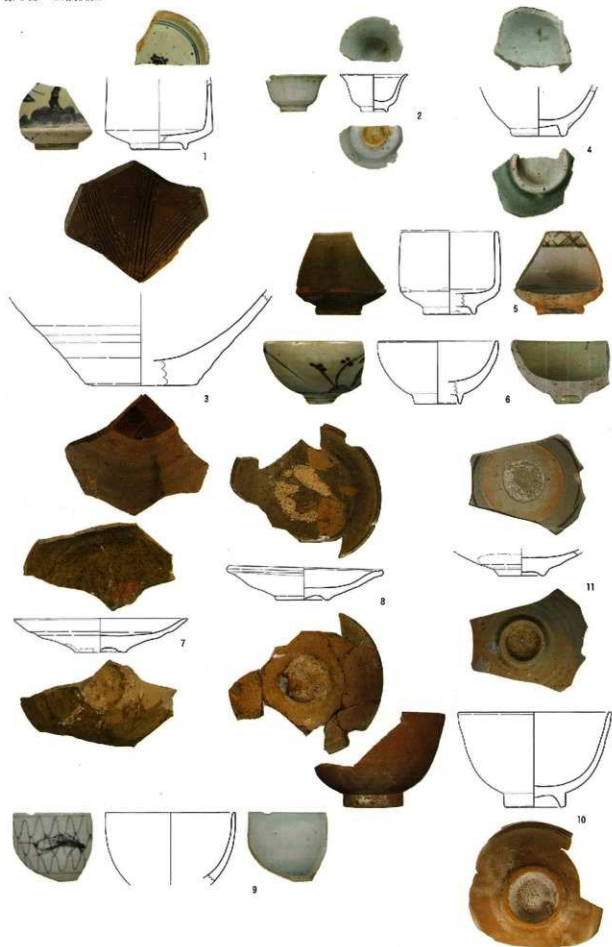
表5 21調査区出土遺物観察表

番号	遺構	出土位置	遺種	大きさ (m)			数量	保存状況	出土層	出土地	特徴	時期
				幅	長さ	高さ						
1	一坑		銅器	赤付板		4.2	8.6		底面の1/4	肥前		18世紀後半
2	一坑		銅器	小杯	5.3	3	2		2/3部	肥前		1630～1650年
3	2等土坑		陶器	陶器			8.8		底面の1/5	?		?
4	6号土坑		青磁	瓶			4.2		底面の2/3	肥前		1630～1650年
5		奥上3～4の間	銅器	赤付板	7.4	6.4	4	8	1/4部	肥前		18世紀後半
6		奥上3～4の間	銅器	赤付板	9.3	4.5	3.6		1/4部	肥前	くさかた、底面見出し、文様文・梅花文	18世紀後半
7		奥上3～4の間	陶器	皿	13.8	2.6	4		1/3部	肥前	砂付	1630～1650年
8		奥上3～4の間	陶器	皿	12.2	2.5	4.3		1/2部	肥前	砂付、赤付板	1630～1650年
9		奥上3～4の間	銅器	赤付板	10.2				1/3部の1/5	肥前	遺跡目文	17世紀中頃～後半
10		奥上3～4の間	陶器	瓶	12	7.4	4.8		1/3部	肥前		
11		奥上3～4の間	銅器	赤付板			3.8		底面	肥前	足込蛇目繪柄	18世紀後半
12		奥上4面	陶器	皿	11.7	2.9	3.6		1/3部	肥前	砂付、赤付板	1630～1650年
13		奥上4面	陶器	赤付板			5		1/3部	肥前		1630～1650年
14		奥上4面	陶器	皿	12	3	4.2		1/3部	肥前	砂付、赤付板	1630～1650年
15		奥上4面	銅器	皿			3.5		底面の2/3	肥前	型付、成形	17世紀後半
16		奥上4面	銅器	赤付板	13.2	3.3	4.8		1/5部	肥前		1630～1650年
17		奥上4面	銅器	赤付板			4.8		底面	肥前		1630～1650年
18		奥上4面	銅器	赤付板	5.4				底面	肥前	遺跡目文	?
19		奥上4面	陶器	瓶		1.6			底面	肥前	大付板	1630～1650年

## 第3章 調査の結果

架号	遺構	出土層	器種	大きさ (cm)				存在	出土時期	特徴	時期
				白磁地	赤磁地	磁石地	磁石地				
20		焼土4層	青磁 碗				4.3	焼土型	肥前		
21		焼土4層	磁器 赤付皿	13.7	3.4	4.8		1/2割作	肥前	17世紀前半	
22		焼土4層	磁器 赤付碗	4.9				前面の4/3	肥前	1600～1650年	
23		焼土4層～焼土4～5層間の埋土	磁器 赤付小杯	7.2	4.4	2.8		2/3割作	肥前	内面に耳付	
24		焼土4層	磁器 赤付碗	4.6				磁石の1/3	肥前	1600～1650年	
25		焼土4層下層	陶器 碗	10.8	6.7	4		1/2割作	肥前	天目型	
26		焼土4～5層2部	陶器 赤付碗	4.9				底面光面	肥前		
27		焼土4～5層2部	陶器 赤付碗	底面径6.8	底面径4.9	4.5		底面光面	肥前	打ち欠き磁器	
28		焼土4～5層2部間の埋土	磁器 皿				4.2	底面光面	肥前	砂目	
29		焼土4～5層2部間の埋土	陶器 皿	10.3	6.1	4.2		光面	肥前	灰青	
30		焼土5層	磁器 赤付碗	4				口縁の1/2	肥前	天目型	
31		焼土5層	陶器 赤付碗	10.4				口縁の1/3	肥前	1600～1650年	
32		焼土5層	陶器 小杯	7.1	4.1	3.6		1/3割作	肥前	1500～1610年	
33		青灰色粘質土層	陶器 碗				21.7	磁片	?	?	
34		青灰色粘質土層	陶器 皿				4	底面光面	肥前	赤灰胎、片取	
35		青灰色粘質土層	陶器 小杯	8.3				磁片	中国	16世紀～17世紀前半	
36		青灰色粘質土層	白磁地 碗	13.1	2.7	6.8		1/5割作	中国	16世紀	
37		青灰色粘質土層	陶器 碗				4.4	底面の1/2	肥前	鉄胎、天目型	
38		青灰色粘質土層	陶器 皿					底面光面	肥前	磁土目	
39		焼土3～4層間	瓦 軒瓦		13.9			略光面			
40		焼土4層	陶器 磁器部			10.9		底面光面	肥前		
41		焼土4層	1割作 磁器部	14				磁片			
42		焼土4層	焼土土層 赤磁地					磁片			
43		焼土5層	瓦 焼瓦		8.4			略光面			
44		青灰色シルト層	陶器 白磁地					磁片			
45	7号土坑		陶器 1割作	32.2				磁片			
46	7号土坑		焼土土層 赤磁地					磁片			
47		焼土2～3層	磁器 碗	底面径4.6	幅1	幅口径0.6	高さ5.2g	磁片			
48		焼土3層	陶器 碗	長さ7.5	幅1.1	幅口径1.3	高さ11.3g	磁片			
49		焼土3層	新銅器	長さ2.6	幅1.13		高さ2.4g	磁片			
50		焼土3～4層	磁器 碗	長さ3.3	幅0.7	幅口径1.6	高さ5.7g	磁片			
51		焼土4層	磁器 碗	底面径5.3	幅0.9	幅口径0.8	高さ2g	磁片			
52		焼土4層	陶器 碗	底面径5.6	幅1.1	幅口径0.4	高さ5.4g	磁片			
53		焼土4層	陶器 碗	長さ4.7	幅0.6		高さ3.2g	磁片			
54		焼土4層	磁器 碗	長さ12	幅0.4～0.9		高さ15.7g	磁片			
55		焼土4層	磁器 碗	長さ7.2	幅1.4		高さ10.5g	磁片			
56		焼土4～5層	陶器 碗	長さ7.8	幅1		高さ4.9g	磁片			
57		焼土4～5層	陶器 碗	長さ6.9	幅0.7	幅口径1.4	高さ5.9g	磁片			
58		焼土4～5層間の埋土	新銅器 銅線	長さ3.9	幅2.2		高さ4.9g	磁片			
59		青灰色シルト層	磁器 碗	底面径5.5	幅1	幅口径0.3	高さ5.6g	磁片			
60		青灰色シルト層	新銅器 銅線	長さ7.9	幅0.9～1.2		高さ5.3g	磁片			
61		青灰色シルト層	新銅器 銅線	長さ12.3	幅0.5～0.6		高さ11g	磁片			
62	一基	焼土4～5層	磁器 碗	高さ6.5	幅1	幅口径0.4	高さ3g	磁片			
63		焼土4～5層	磁器 碗	底面径4.9	幅3.3	厚さ1	高さ42g	磁片			
64		焼土5層	陶器 碗	底面径4.6	幅2.1	厚さ0.9	高さ15.7g	磁片			
65		焼土5層	陶器 碗	底面径5.8	幅2.3	厚さ1.7	高さ15.7g	磁片			
66		焼土5層	陶器 碗	底面径3	幅4.9	厚さ0.7	高さ20.8g	磁片			
67		焼土3層	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ3.1g	貨幣		「ス」の古寛永	
68		焼土3層	磁器 寛永通寶	径2.4			高さ3.4g	貨幣		「ス」の古寛永	
69		焼土3層	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ3.3g	貨幣		「ス」の古寛永	
70		焼土3～4層	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ3.4g	貨幣		「ス」の古寛永	
71		焼土4層	磁器 寛永通寶	径2.4			高さ2.5g	貨幣		「ス」の古寛永	
72		焼土4層	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ2.5g	貨幣		「ス」の古寛永	
73		焼土4層	磁器 寛永通寶	径2.4			高さ2.5g	貨幣		「ス」の古寛永	
74		焼土4層	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ3.4g	貨幣		「ス」の古寛永	
75		焼土4～5層間の埋土	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ3g	貨幣		「ス」の古寛永	
76		焼土4～5層間の埋土	磁器 寛永通寶	径2.3			高さ2.2g	貨幣		「ス」の古寛永	
77		焼土4～5層間の埋土	磁器 寛永通寶	径2.4			高さ3.1g	貨幣		「ス」の古寛永	
78		焼土4～5層間の埋土	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ2.0g	貨幣		「ス」の古寛永	
79		焼土4～5層間の埋土	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ2.9g	貨幣		「ス」の古寛永	
80		焼土4～5層間の埋土	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ2.0g	貨幣			
81		焼土5～6層間	磁器 寛永通寶	径2.5			高さ2.7g	貨幣		「ス」の古寛永	
82	1号土坑		磁器 寛永通寶	径2.4			高さ2.2g	貨幣			
83	7号土坑		磁器 寛永通寶	径2.6			高さ3.5g	貨幣			
84	一基		磁器 寛永通寶	径2.5			高さ3.3g	貨幣			
85	一基		磁器 寛永通寶	径2.5			高さ3.0g	貨幣			



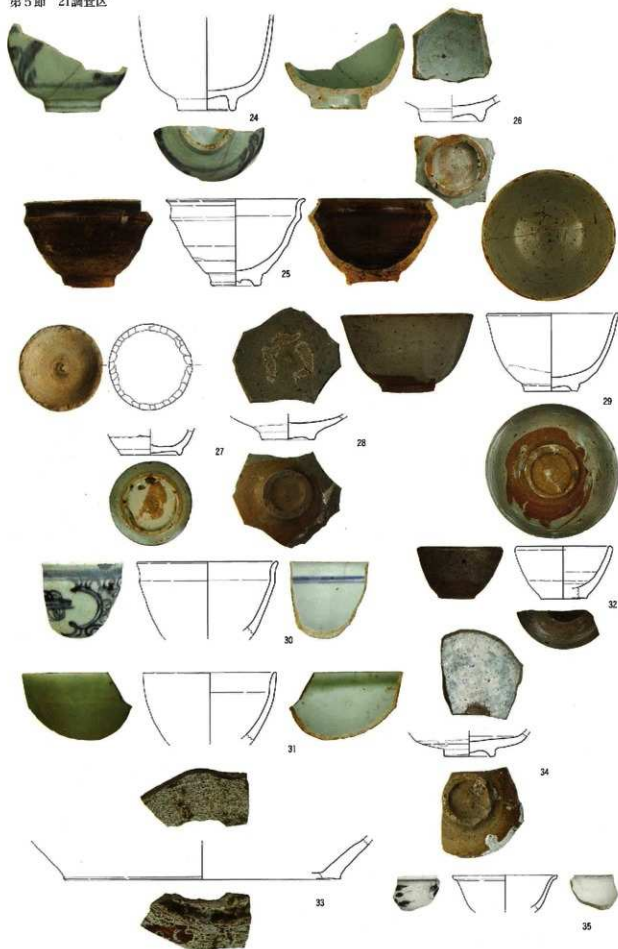


第59図 21調査区出土遺物 (1/3)



第60図 21調査区出土遺物 (1/3)

第5節 21調査区

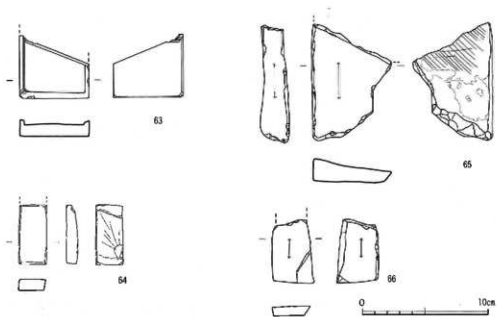


第61図 21調査区出土遺物 (1/3)

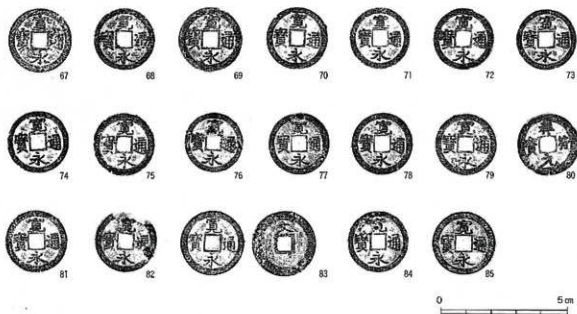


第62図 21調査区出土遺物 (1/3)

※39、40、45は1/6



第63図 21調査区出土遺物 (1/3)



第64図 21調査区出土遺物 (2/3)



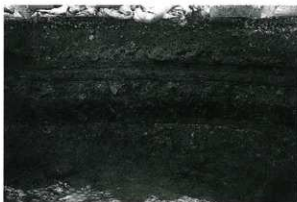
21調査区作業風景（北東方向から）



調査区全景（西方向から）



1号側溝（北方向から）



両壁土層（北方向から）



1号側溝断面（北方向から）



集石遺構



最下層遺構



最下層出土の掘立柱痕跡

## 第6節 22調査区

22調査区は長さ約11.4m、幅約4～6.3mの長方形を呈する。調査区の中央部と西端部には現代の側溝が確認できる。現側溝の全体幅はどちらも0.9mで、側溝間の間隔は4.7mである。一方、調査区の東端には1号側溝が検出されている。ちなみに、中央部の現側溝から1号側溝の間隔は約4.7～4.8mであり同じ区画と考えられる。地表面の標高は東の区画で約3.9m、西の区画で約4mである。調査区の出土遺構を俯瞰すると、側溝、集石遺構、土坑、柱穴等が検出されている。

土層は地表面から約1.3m程度掘ると、水の湧く青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山へと変化している。層厚は比較的に整然と堆積しているが、約2mの堆積土内に焼土1面～焼土6面までの6回の焼土・炭化物層がバツクされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.01～0.02mから約0.1mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.2mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入上であった。この搬入上は山上と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。青灰色シルト層の直上にある焼土6面は炭化物の層であり、他の火災遺構とは様相が異なる。

## 1 検出遺構 (第65～70回、写真6)

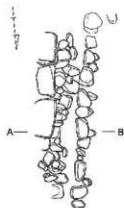
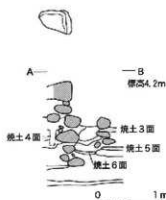
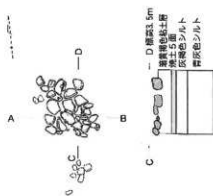
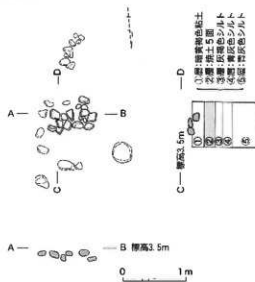
## 1号側溝 (第66回)

1号側溝は調査区の東端に位置する。側溝は、現果道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の全体幅は約1m、溝幅は約0.2～0.3m程である。側溝の東片側には拳大～人頭大の川原礫が組まれ、上面に巨石を乗せている。西片側には拳大～人頭大の川原礫が整然と並んでいた。側溝の断面をみると、側溝の両側には拳大～人頭大の石垣が8段前後に組まれ、西片側には4段の石垣が組まれていた。

側溝の確認面の標高は東片側で4.03mであり現地表面に出ている状態である。石垣の基底部は標高2.7m前後であり、石垣の側溝が1.4m以上も繰り返して組まれたことが判る。石垣を組んだ間には、焼土3面や焼土5面が遺存しており、土層堆積の推移が推量できる。



第65図 22調査区遺物配置図 (1/120)

第66図 22調査区1号側溝実測図  
(1/60)第67図 22調査区1号土坑実測図  
(1/60)第68図 22調査区5号土坑実測図  
(1/60)第69図 22調査区1号集石実測図  
(1/60)第70図 22調査区2号集石実測図  
(1/60)

## 2号側溝 (第65図)

調査区の北壁に沿って遺存する側溝である。側溝の南片側には巨大な石と人頭大や拳大の石が片方を揃えて一列に配置されている。側溝は、現県道の宗近魚町線に平行に位置していた。検出面の側溝上面は標高3.35~3.5mで、下面では3.13~3.28mである。

## 1号集石 (第69図)

調査区の中央部に位置する集石遺構である。拳大~掌大の円礫を直径1~1.2m前後に集めたものである。確認面の標高は3.4m、床面は3.3mである。焼土5面の土層の暗黄褐色粘土層中に確認できる。

## 2号集石 (第70図)

調査区の中央部東寄りに位置する集石遺構である。拳大~掌大の円礫を短径0.5、長径1mの長方形に集め、周辺にも石を集めたものである。確認面の標高は3.4m、床面は3.3mである。焼土5面の土層の暗黄褐色粘土層中に確認できる。

## 1号土坑 (第67図)

調査区の東端に位置する土坑である。平面形は不整楕円形で、長軸約1m、短軸約0.65mであり、確認面から床面までは0.45m程度である。確認面の標高は3.35m、床面は2.9mである。

## 2号土坑 (第68図)

調査区中央部の北壁に位置する不整楕円形の土坑である。一部擾乱されているが、平面形は不整長方形で、長軸約0.65m、短軸約0.4mであり、確認面から床面までは0.8m程度である。土坑確認面の標高は3.25mである。



## 3号土坑（第65図）

調査区の北壁寄りの西端に位置する。平面形は不整形門形で、長軸約0.6m、短軸約0.4mであり、確認面から床面は0.3mである。土坑確認面の標高は3.25m、床面は2.95mである。

## 4号土坑（第65図）

調査区の南寄りに位置する土坑である。平面形は不整形円形で、長軸約0.55m、短軸約0.5mであり、確認面から床面までは0.25m程度である。土坑確認面の標高は3.35m、床面は3.1mである。

## 5号土坑（第68図）

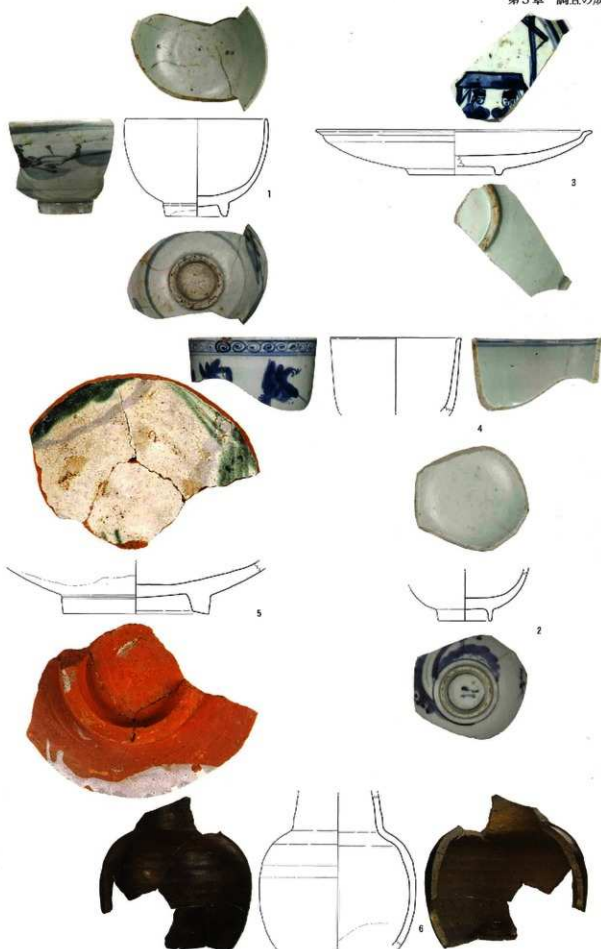
4号土坑に隣接する門形の土坑である。直径は0.45mであり、確認面から床面までは0.1m程度である。中に川原礫が4個入っていた。土坑の確認面の標高は3.4mである。

## 2 出土遺物（第71～74図）

本調査区の出土遺物の詳細は表6に記述している。

表6 22調査区出土遺物観察表

番号	遺物	出土土層	種類	大きさ (cm)			保存状態	推定年代	特徴	時期	
				口径/長さ	幅/高さ	底径/長さ					
1	1号土坑		磁器 染付碗	11	5.7	4.6	1/3割破	肥前	浅井野村古	1630～1650年	
2	3号土坑		磁器 染付碗			4.2	既形完整	肥前		17世紀末～18世紀前半	
3	5号土坑		磁器 染付碗	21.5	3.6	7.2	1/5割破	肥前	心樂の模い碗	1630～1650年	
4	柱穴1		磁器 染付碗	10.3			口縁の1/2	肥前		17世紀前半	
5	坑上4面		陶器 碗			11.4	底縁の2/3	肥前	ニ彩子、内面刷目	17世紀前半～18世紀後半	
6	坑上4面		陶器 瓶・壺				12.4	1/4割破	肥前		1630～17世紀前半44年
7	坑上4面		青磁 碗	11.2	4.8	4.4		形完整	肥前	見立肥前地陶器、共口、砂目古	17世紀前半
8	坑上4面		陶器 鉢	10.6				底縁の1/3	肥前	滑り窯古、瓦込砂目	17世紀前半
9	坑上4面		磁器 染付皿	1.8			7	口縁完整	肥前	タコ目草文	18世紀後半
10	坑上4面		磁器 染付皿	13	3	4.3	3/4割破	志原・滑り窯古	彩目積み、壺成不長	1610～1630年	
11	坑上4面		磁器 鉢			4.6		既形完整	伊豫	瓦目形、丹鉄筋、内透明釉	17世紀前半
12	坑上4面		内陶 瓦			5.7		既形完整	肥前	赤切鉄筋	?
13	坑上4～5面間		磁器 染付碗	9.8	7	4.3	1/2割破	肥前		1630～1650年	
14	坑上5面		陶器 染付碗	9.4	8.1	3.2	1/3割破	肥前		17世紀前半	
15	坑上5～6面間		磁器 染付皿	5.1	4.1		底縁1/3割破	肥前	獅子頭筋古	17世紀前半	
16	坑上5～6面間		陶器 鉢	37	12	11.6		2/3割破	肥前	滑り窯古、ニ彩子、瓦込砂目	17世紀後半～18世紀前半
17	坑上5面～3号土坑		磁器 染付皿				10.4	1/4割破	肥前	二次焼成	1630～1640年
18	柱穴1(4号土坑・5号土坑・6号土坑)		瓦 瓦			11.4	1/3割破	備前	板瓦→瓦切、瓦蓋等古	17世紀	
19	坑内色土4ト層		磁器 染付皿	11				1/3割破	肥前	漆器古	17世紀前半
20	坑内色土4ト層		陶器 瓶	25.1				口縁破損	肥前	赤切鉄筋	1630～1630年
21	坑上5～6面間		瓦質土器 鉢	26.2	7	24		1/3割破	肥前	瓦蓋筋・内透明釉、瓦蓋筋	
22	3号土坑		土師器土器 トリヤ	2.2	2.3			完整		右折久調器	
23	坑上4面		磁器 碗	横径7.3	幅1	縦径6.0	高さ3.1	破片			
24	坑上5面		割製磁 小納	横径11.3	幅1.5	縦径8.4	高さ30.8	破片			
25	坑上5面		割製磁 輪	横径12.6	幅2.6	縦径11.3	高さ5.9	破片			
26	坑上5～6面間		割製磁 小納	横径11.4	幅1.5	縦径8.4	高さ25.2	破片			
27	坑上4面		磁器 鉢	横径8.1	幅5	縦径11.1	高さ20.4	破片			
28	坑上4面		磁質 瓦水遣瓦	縦2.4		横2.3		完整		「A」の古瓦水	
29	坑上5～6面間		磁質 瓦水遣瓦	縦2.5		横2.4		完整		「A」の古瓦水	

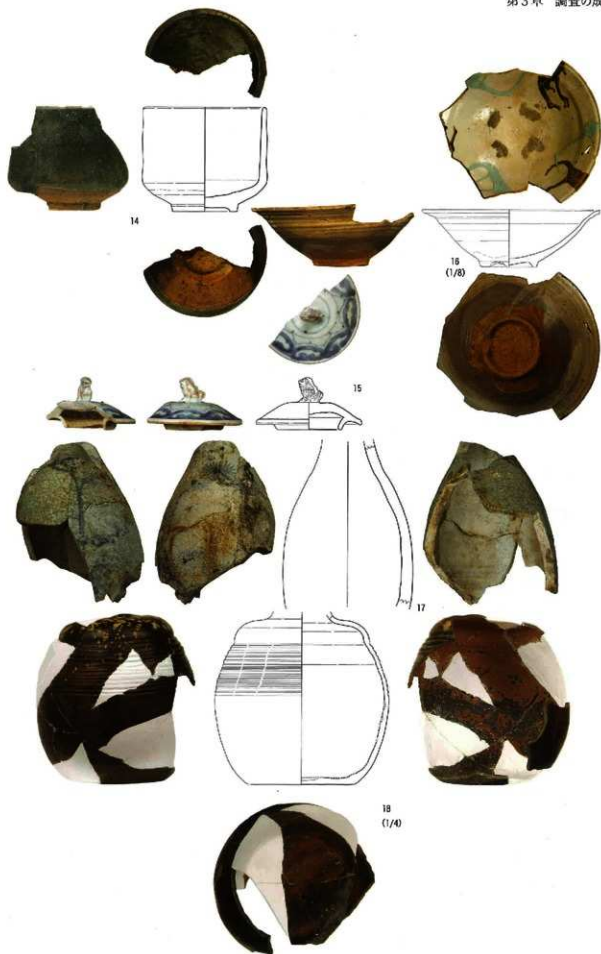


第71図 22調査区出土遺物 (1/3)



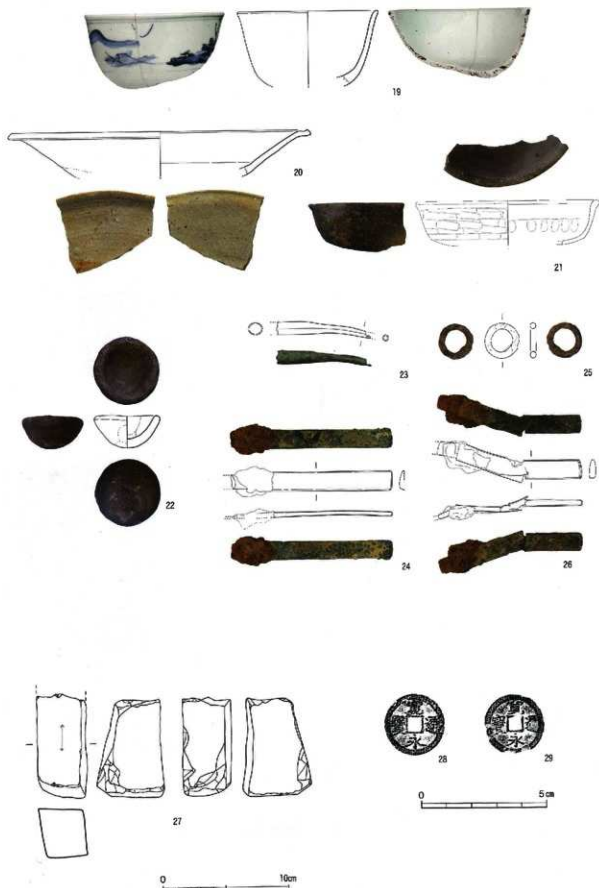
第72図 22調査区出土遺物 (1/3)

※17は1/8



第73図 22調査区出土遺物 (1/3)

※16は1/8、18は1/4



第74図 22調査区出土遺物 (1/3) ※28、29は2/3



22調査区全景（東方向から）



南壁土層（北方向から）



南壁土層（北方向から）



1号溝（北方向から）



1号集石（北方向から）



2号集石（南方向から）



1号土坑（北方向から）



遺物出土状態

第7節 23調査区

23調査区は長さ約6m、幅約5.9mの方形を呈する。調査区の東端部には現代の側溝が確認できる。地表面の標高は約6mである。調査区の上出遺構を俯瞰すると、集石や石の並びが確認できるが、狭い調査区内での全体像は判らない。

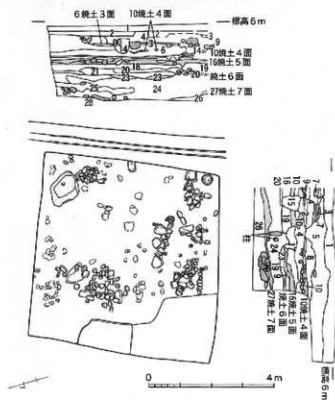
土層は地表面から約1.6m程度掘ると、水の湧く青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山へと変化している。層序は比較的整然と堆積しているが、約2.6mの堆積土内に焼土3面～焼土7面までの5回の焼土・炭化物層がバックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.01～0.02mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.6mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山上と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。青灰色シルト層の直上にある焼土6面は炭化物の層であり、他の火災遺構とは様相が異なる。

1 検出遺構 (第75図、写真7)

集石や人為的な配置をもつ行を確認したが建物や礎元できるものではなかった。基礎の一部と想定される。

2 出土遺物 (第76図～第83図)

本調査区の出土遺物の詳細は表7に記述している。



【23調査区南端土層説明】

- 1 コンクリート、ガラス地表面
- 2 淡赤褐色土層 (最大～人頭大の礫を多量に含む)
- 3 灰褐色粘質土 (炭化物粒を少量含む)
- 4 茶褐色土 (黄褐色のブロック混入)
- 5 茶褐色土 (炭化物粒、焼土粒を含む)
- 6 暗黒褐色土 (炭化物粒を含む、焼土3面)
- 7 灰黄褐色砂質土
- 8 淡茶褐色土 (炭化物粒、焼土粒を含む)
- 9 暗黄褐色粘質土 (炭化物粒を少量含む)
- 10 暗黒褐色土 (炭化物が多く、焼土粒少量含む、焼土4面)
- 11 茶褐色砂質土 (炭化物粒、焼土粒を含む)
- 12 灰白色砂質土 (2～6cmの小石を含む)
- 13 暗灰褐色土 (人頭大の礫を含む)
- 14 淡灰褐色土
- 15 暗褐色土
- 16 暗褐色土 (炭化物多く、焼土を含む、焼土5面)
- 17 淡灰褐色土 (炭化物粒、焼土粒を含む)
- 18 暗灰黄褐色土
- 19 灰黄褐色砂質土 (僅かに礫の混入)
- 20 暗灰黄褐色土 (青色の砂礫含む)
- 21 暗灰褐色粘質土
- 22 淡灰褐色砂質土層 (僅かに礫の混入)
- 23 灰褐色シルト (炭分の沈着あり)
- 24 青灰色シルト層
- 25 淡青灰色シルト層
- 26 青灰色砂質土層 (小石を多く混入)
- 27 暗黒褐色土 (炭化物の層、焼土7面)
- 28 岩盤

第75図 23調査区遺構配置図 (1/120)



第76図 23調査区出土遺物 (1/3)



第7節 23調査区

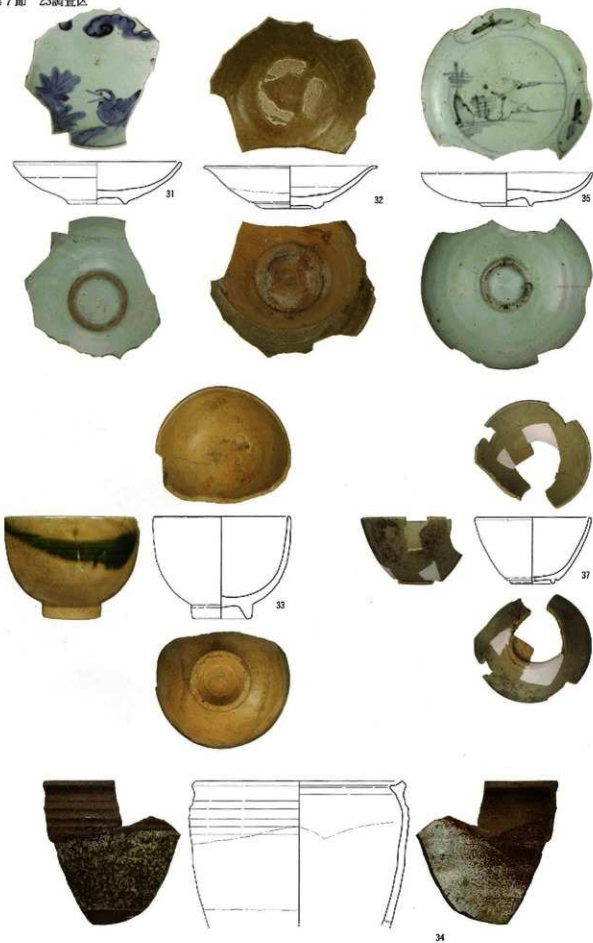


第77図 23調査区出土遺物 (1/3)



第78図 23調査区出土遺物 (1/3)

第7節 23調査区

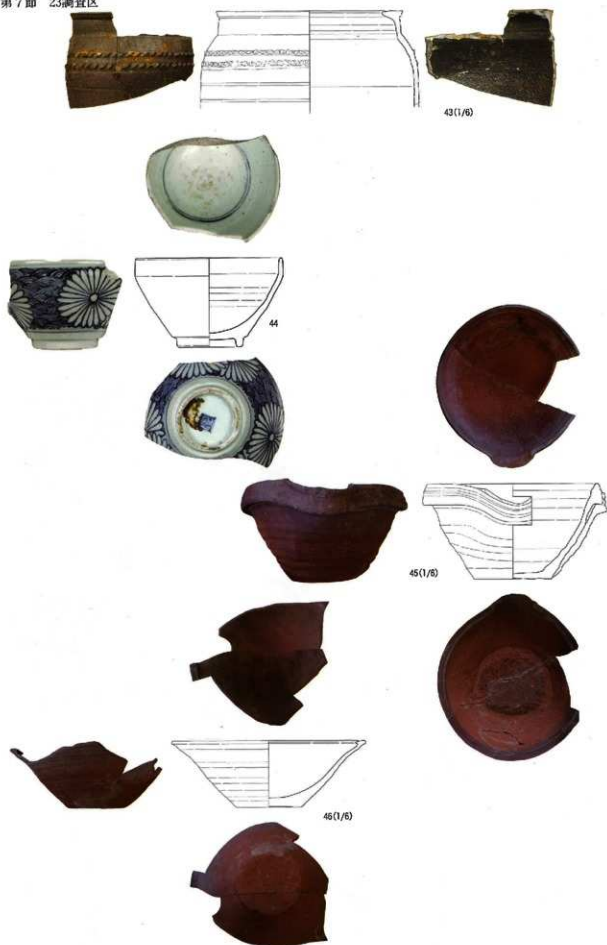


第79図 23調査区出土遺物 (1/3)



第80図 23調査区出土遺物 (1/3) ※40は1/4

第7節 23調査区

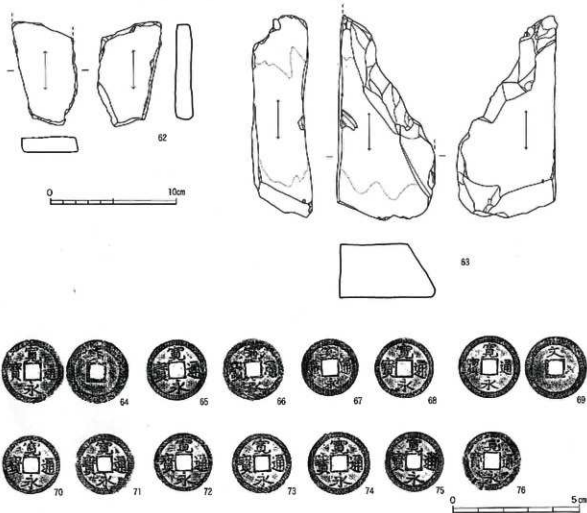


第81図 23調査区出土遺物 (1/3)

※43、45、46は1/6



第82図 23調査区出土遺物 (1/3)



第83図 23調査区出土遺物 (1/3、2/3)

表7 23調査区出土遺物観察表

番号	遺物	出土層	器種	大きさ (cm)				残存数	検定遺地	時代	時期
				口径長	胴径長	底径長	胴幅最大径				
1	一基		磁器 胎付小杯	6.7	4.8	3.1		1/3 個体	肥前	胎付砂付器	17世紀
2	一基		磁器 胎付小杯	6.6	3.8	2.8		1/3 個体	肥前	黄白砂付器	17世紀
3	一基		陶器 鉢				8.2		高津の1/5	陶器系	18世紀後半以降
4	一基		磁器 胎付小杯	6.8	4.6	3.1		1/2 個体	肥前		?
5	一基		土瓶蓋 土瓶蓋	8.7	2.1				赤坂野	陶内系	18世紀後半以降
6	一基		磁器 胎付盃	13.5	3.8	4.5		3/4 個体	肥前	見込み胎付器、黄白砂付器	18世紀後半
7		礎土2~3面	磁器 磁器皿	12.0	2.7	5.6		3/4 個体	瀬戸系	11組小波付	?
8		礎土3面	磁器 胎付皿	9.7	2	4.8			肥前	コンニャク印判、二次焼成	17世紀末~18世紀前半
9		礎土3面	磁器 胎付横門	4.3			4.8	1/2 個体	肥前	クワ唐平文	18世紀後半
10		礎土3面	陶器 焼火鉢	5.3	3	4.4	6	1/2 個体	陶内系		18世紀後半以降
11		礎土3~4面	磁器 胎付小杯	6.9	4.8	3.2		1/2 個体	肥前	黄白砂付器	?
12		礎土3~4面	磁器 胎付皿	10	5.1	3.9		1/3 個体	肥前		18世紀後半
13		礎土2~4面	磁器 胎付盃	10.2	3.2	5.8		2/3 個体	肥前	広重陶に対応	1780~1810年
14		礎土3~4面	磁器 胎付皿	2.3			8.6	1/4 個体	肥前	ボン付油壺	?
15		礎土2~4面	磁器 胎付皿			5.3		磁器完形	肥前	コンニャク印判、5F3文、磁印押印	18世紀後半
16		礎土3~4面	磁器 胎付皿	9.5	5.4	4		1/2 個体	肥前		18世紀後半

## 第3章 調査の成果

番号	場所	出上層	科名	大きさ (cm)				発見地	鑑定準地	特徴	時期
				11区地	御高地	表窪地	調査隊入付地				
17		礎土3~4曲南	磁器	染付文	9.7	3.5	4		真部元形	伊前	18世紀後半~末
18		礎土3~4曲南	磁器	網					被片	表	19世紀前半
19		礎土3~4曲南	磁器	網	11.7	6	7		1/4個体	内内系	ミニチュア、ままごと調子
20		礎土3~4曲南	磁器	染付文	9.4	3.4	4.2		1/3個体	肥前	伊州産物~末
21		礎土3~4曲南	磁器	陶器片口	31.6				口縁の1/3	肥前	丹波付丸、片口付き
22		礎土3~4曲南	磁器	染付文	10.4	6.3	4		1/3個体	肥前	高内砂付志
23		礎土3~4曲南	磁器	染付文	11.7	3.5	4.7		3/4個体	伊前	長田産物
24		礎土3~4曲南	磁器	磁器片	4.6	2.3	2.8		1/4個体	伊前	色絵、ミニチュア、ままごと調子
25		礎土4曲	磁器	染付文	14.8	3.3	5		底部の1/3	肥前	高内砂付志
26		礎土4曲	磁器	網			10		高部完形	肥前	17世紀
27		礎土4曲	磁器	酒花小杯	内径15.4	6.8	2.7		底部完形	中国	景徳窯系、興隆器加丁
28		礎土4曲	磁器	磁器	7.8	6.2	5		2/3個体	肥前	?
29		礎土3	磁器	網	12.1	3.6	4.4		1/2個体	肥前	18世紀
30		礎土4	青磁	染付文	15.5	2.5	9.6	最大径15	1/5個体	肥前	?
31		礎土4曲	磁器	染付文	13.2	3.3	4.4		1/2個体	肥前	高内砂付志
32		礎土4曲	磁器	網	13.8	3.3	4.7		2/3個体	肥前	砂利
33		礎土4曲	陶器	網	10.7	8	4.7		2/3個体	内内系	道明地、網掛志
34		礎土4~5曲	陶器	網	16.2				口縁の1/3	肥前	口縁内径
35		礎土4~5曲	陶器	網	13.3	2.6	5		1/5個体	肥前	1630~1650年
36		表土層、礎土1~4曲間地層	陶器	網	13.9	6.2	5.9		彫刻形	肥前	内外両底地
37		礎土4~5~6曲	陶器	網	9	3.2	3.2		1/2個体	伊前系	18世紀後半
38		礎土4~5~6曲	磁器	網			6.4		底部の1/4	肥前	タコ付文、地付き
39		礎土5曲	青磁	網	13.2	3.7	5.4		1/5個体	伊前	外筒磁器、内筒地
40		礎土5曲	陶器	網	19.4				口縁の1/3	肥前	17世紀後半
41		表層(表土層)上層+礎土5曲	内服	網		10.4			底部完形	肥前	17世紀後半
42		表層(表土層)上層+礎土5曲	磁器	染付文	10.3	6.8	5.4		口縁の1/3	肥前	二次焼結
43		表層(表土層)上層	陶器	網	20			34.2	約1/4個体	肥前	口縁内径、裏面両片有、洗滌
44		表層(表土層)上層	磁器	染付文	11.1	6.9	4.9		1/2個体	肥前	文白型
45		礎土4曲	陶器	網	27.1~28	11.6~15	12.3		底部	肥前	8条の網掛志
46		礎土4曲	陶器	網	30.8	10.6	10.3		完形	肥前	13条の網掛志、内底未切り
47		礎土4~5~6曲	土師器	トリペ	7.2	3.7			完形	伊前系	煎餅志
48		礎土4~5~6曲	土師器	トリペ	7.8	3.3			完形	伊前系	煎餅志、網掛志
49		礎土4~5~6曲	土師器	トリペ	4.7	2.4			完形	伊前系	煎餅志、網掛志
50		礎土4~5~6曲	土師器	トリペ	4.2	1.9			完形	伊前系	煎餅志、網掛志
51		礎土4~5~6曲	土師器	トリペ	3.7	1.7			完形	伊前系	煎餅志、網掛志
52		礎土4~5~6曲	土師器	トリペ	3.1	2.2			完形	伊前系	煎餅志、内内付志
53		礎土4~5~6曲	土師器	トリペ	4.4				彫刻形	伊前系	煎餅志、内内付志
54		礎土5曲	土師器	網	11.2	2~2.4	3.4		完形	伊前系	伊前系、タコ調、表裏両面
55		表層(表土層)上層	土師器	網	8.2	1.9	6.4		完形	伊前系	二次焼結
56		礎土3~4曲	焼石	噴口	残存長4.5	幅1	残厚0.4	高さ4.3	破片		
57		礎土4曲	焼石	噴口	残存長5.8	幅1	残厚0.4	高さ4.3	破片		
58		礎土5曲	焼石	噴口	残存長5.2	幅0.5	残厚1.6	高さ3.3	破片		
59		礎土5曲	焼石	噴口	残存長5.2	幅0.5	残厚1.6	高さ3.3	破片		
60		表層(表土層)上層	陶器片	網	10.3	6.8			高さ16.4	完形	
61	新	礎土3~4曲	陶器片	カヌガイ	残存長16.1	幅1.2	残厚17.1	高さ17.1	破片		
62		礎土4曲	焼石	残存長17.3	幅4.4	高さ1.2	残厚7.1	高さ4.2	破片		
63		礎土5曲	焼石	残存長14.9	幅7.6	高さ4.2	残厚6.6	高さ4.2	破片		
64		礎土5曲	焼石	京永通寶	径2.5	高さ3.4	高さ3.4	高さ3.4	完形		「ス」の新瓦水、表面「文」
65		礎土5曲	焼石	京永通寶	径2.4	高さ3.5	高さ3.5	高さ3.5	完形		「ス」の古瓦水
66		礎土5曲	焼石	京永通寶	径2.5	高さ3.8	高さ3.8	高さ3.8	完形		「ス」の古瓦水
67		礎土3~4曲間	鉄片	京永通寶	径2.3	高さ2.8	高さ2.8	高さ2.8	完形		「ス」の古瓦水
68		礎土3~4曲間	鉄片	京永通寶	径2.4	高さ3.2	高さ3.2	高さ3.2	完形		「ス」の古瓦水
69		礎土4~5曲間	鉄片	京永通寶	径2.5	高さ3.1	高さ3.1	高さ3.1	完形		「ス」の新瓦水、表面「文」
70		礎土5曲	鉄片	京永通寶	径2.3	高さ2.7	高さ2.7	高さ2.7	完形		「ス」の古瓦水
71		礎土5曲	鉄片	京永通寶	径2.3	高さ2.7	高さ2.7	高さ2.7	完形		「ス」の古瓦水
72		礎土5曲	鉄片	京永通寶	径2.4	高さ3.6	高さ3.6	高さ3.6	完形		「ス」の古瓦水
73		礎土5曲	鉄片	京永通寶	径2.4	高さ3.7	高さ3.7	高さ3.7	完形		「ス」の古瓦水
74	新	礎土5曲	鉄片	京永通寶	径2.5	高さ3.1	高さ3.1	高さ3.1	完形		「ス」の古瓦水
75	新	礎土5曲	鉄片	京永通寶	径2.4	高さ2.7	高さ2.7	高さ2.7	完形		「ス」の古瓦水
76	新	礎土5曲	鉄片	京永通寶	径2.4	高さ2.7	高さ2.7	高さ2.7	完形		「ス」の新瓦水



第7節 23調査区

写真7



23調査区全景（西方向から）



南壁面（北方向から）



東壁面（西方向から）



焼土3面発出土状態



焼土3・4面整地層 遺物出土状態（東方向から）



遺物出土状態



焼土4面 遺物出土状態



焼土5面 遺物出土状態

## 第8節 24調査区

24調査区は長さ約8.6m、幅約6.4mの長方形を呈する。調査区の東端部には現代の側溝が確認できる。調査区の西端には1号側溝が検出されている。1号側溝の東側には無数の礫が配置されており、幾つかは並ぶ隙もあるが判断ができない。地表面の標高は北壁で約6.5mである。調査区の出土遺構を俯瞰すると、側溝、集石遺構、埴甕、壺状遺構等が検出されている。槽状遺構は石垣側溝の下層に登場するもので、その前身と考えて良い。

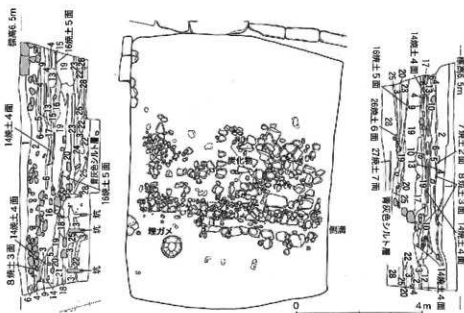
上層は地表面から約2.5m程度調査した。層序は比較的に整然と堆積しているが、約2.5mの堆積上内に焼土3面～焼土7面までの5回の焼土・炭化物質層がバックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼土・炭化物質層はそれぞれ約0.01～0.02mから約0.15mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.5mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

## 1 検出遺構 (第84～86図、写真8)

## 1号側溝 (第85図)

1号側溝は調査区の東端に位置する。側溝は、奥泉道の3近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の全体幅は約1.3～1.7m、溝幅は約0.25～0.3m程である。側溝の東片側には人頭大の川原礫の長軸を溝と直角に並べ、周辺を拳大～人頭大の礫で補強し、その外側に巨石を据えていた。西片側には人頭大の川原礫の長軸を溝と平行に整然と並べていた。側溝の断面をみると、側溝の両側には拳大～人頭大の石垣が2～3段に組まれていた。

側溝の確認面の標高は東片側で5.650～5.420m、西片側で5.42mであり、石垣の基底部は標高5m前後である。



第84図 24調査区遺構配置図 (1/120)

## [24調査区南壁土層説明]

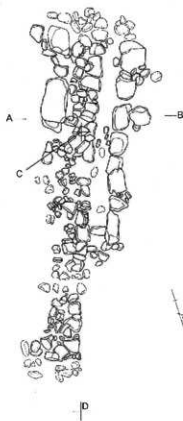
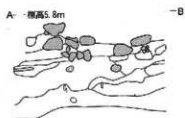
- |    |                     |    |                        |
|----|---------------------|----|------------------------|
| 1  | バラス地表面              | 15 | 淡黄褐色土 (小さな礫を含む)        |
| 2  | 黄褐色土 (灰片や検土粒を含む)    | 16 | 焼土5面                   |
| 3  | 淡黄褐色砂質土 (炭化物粒を少量含む) | 17 | 灰褐色土 (炭化物粒を含む)         |
| 4  | 灰褐色粘質土 (炭化物粒を少量含む)  | 18 | 灰褐色砂質土 (炭化物粒を含む、鉄分の沈着) |
| 5  | 黄褐色土                | 19 | 黄赤褐色土 (径10m前後の礫を混入)    |
| 6  | 淡黄褐色土               | 20 | 灰黄褐色土 (炭化物粒を多く含む)      |
| 7  | 焼土2面                | 21 | 淡茶褐色粘質土                |
| 8  | 焼土3面                | 22 | 黄褐色粘質土 (鉄分の沈着)         |
| 9  | 黄褐色粘質土 ((小石を多く含む)   | 23 | 淡茶褐色砂質土 (炭化物や礫の混入有り)   |
| 10 | 茶褐色砂質土 (炭化物粒を含む)    | 24 | 灰褐色土 (炭化物粒を少量含む)       |
| 11 | 灰白色砂質土 (炭化物粒を含む)    | 25 | 黄褐色シルト層 (小石粒を含む、鉄分の沈着) |
| 12 | 茶褐色土 (黄褐色のブロック混入)   | 26 | 灰土6面 (炭化物粒を含む)         |
| 13 | 暗茶褐色土 (小さな礫を含む)     | 27 | 焼土7面 (炭化物粒を含む)         |
| 14 | 焼土4面                | 28 | 黄灰色シルト層 (小石粒を含む)       |
|    |                     | 29 | 灰褐色土 (径2～10cm前後の礫を混入)  |

柵状側溝 (第86図)

1号側溝の真下の青灰色シルト層の直上而で、直径0.07~0.08m前後の本杭と竹か葦の茎のような中空の小指の太さほどの棒の列が0.05~0.08m置きに検出されている。それらには細い横木が0.03~0.05m置きに出土しており、柵のように編まれた様相と把握された。このような柵列は平行に二列あり、広い所で約0.4mの間隔、狭い所で約0.25mの間隔をあけていた。このような施設は1号側溝の下、厳密には1号側溝の東片側の石垣の下に配置されており、石組み側溝の以前にはこのような柵列状の側溝が配置されていた様相である。

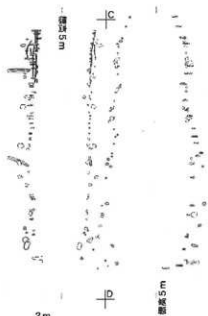
2 出土遺物 (第87図~第93図)

本調査区の出土遺物の詳細は表8に記述している。



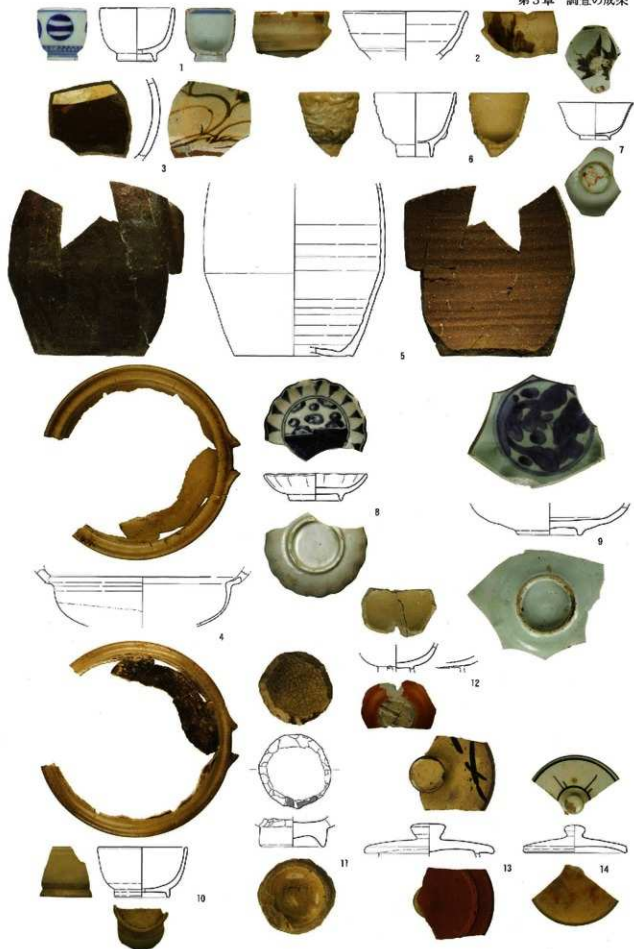
第85図

24調査区1号側溝実測図 (上部遺構) (1/60)

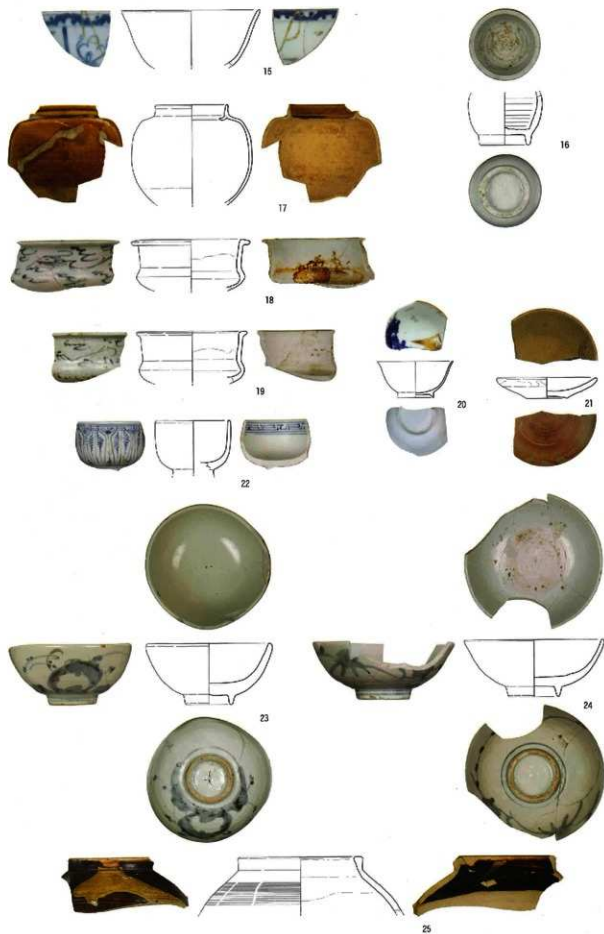


第86図

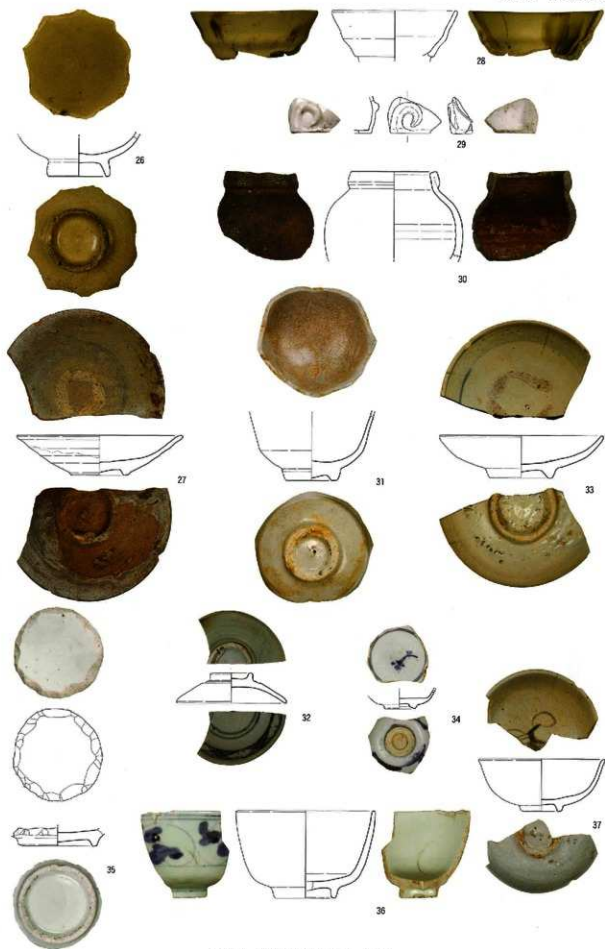
24調査区柵状側溝実測図 (下部遺構) (1/60)



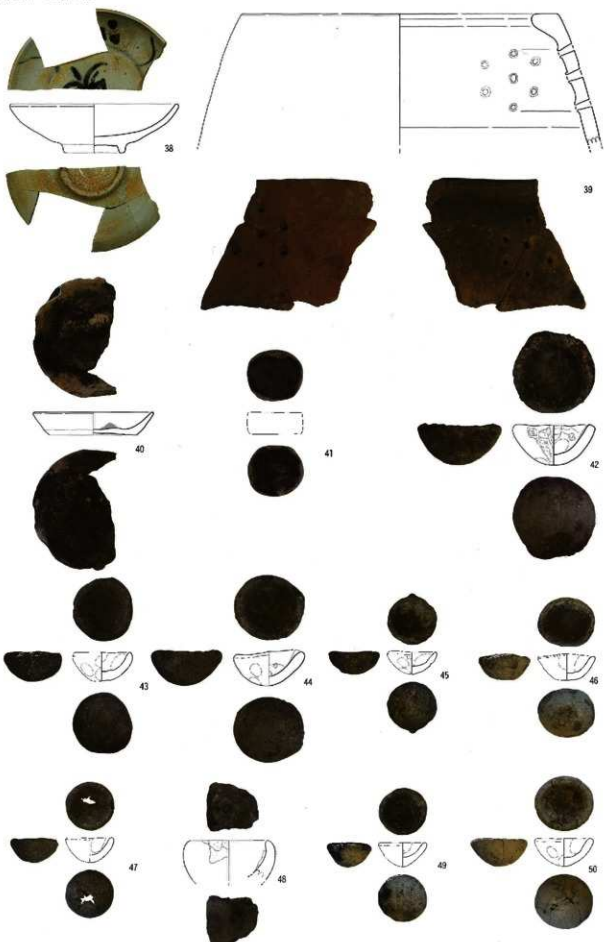
第87図 24調査区出土遺物 (1/3)



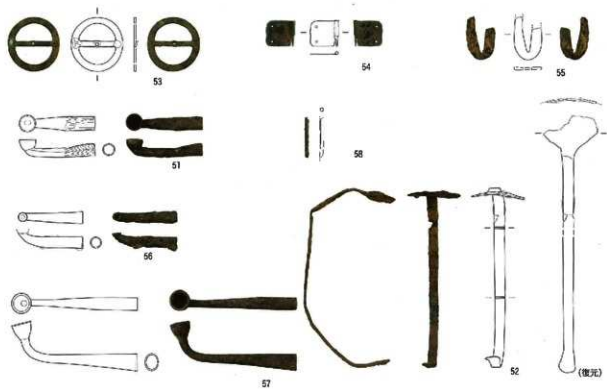
第88図 24調査区出土遺物 (1/3)



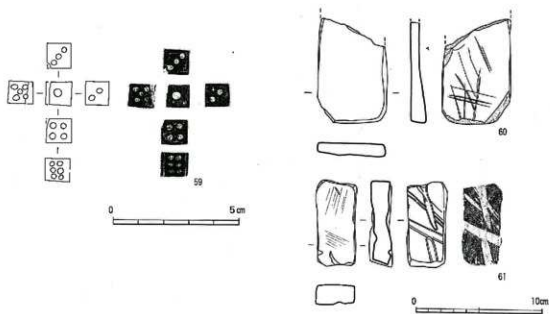
第89図 24調査区出土遺物 (1/3)



第90図 24調査区出土遺物 (1/3)



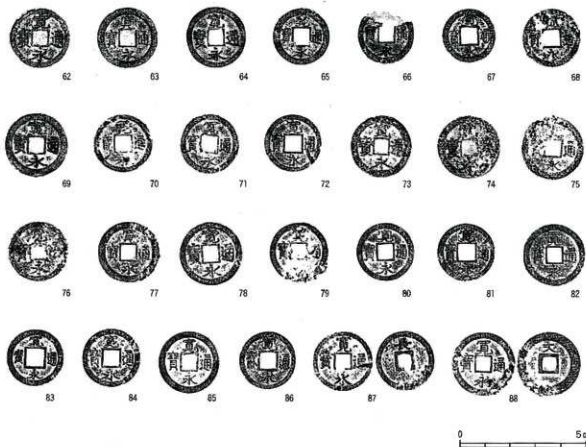
第91図 24調査区出土遺物 (1/3)



第92図 24調査区出土遺物実測図 (2/3、1/3)



第8節 24調査区



第93図 24調査区出土遺物 (2/3)

表8 24調査区出土遺物観察表

番号	遺物	出土土層	器種	大きさ (mm)				調査区	検出層	検出深度	特徴	時期
				口径	高さ	底径	底厚					
1	一銭		磁器 染付碗	5.7	4.2	3		1/4 破片	瀬戸黄瀬		19世紀中頃	
2	一銭		磁 碗	9.6				1/3 破片	萩		19世紀前半～小頃	
3	一銭		陶器 1匳					破片	備前赤		18世紀半～19世紀	
4	一匳		陶器 土匳	15.2				1/2 破片	備前赤		18世紀後半以降	
5	一匳		陶器 瓶・壺			9.4	14.4	器底の1/4	中納骨	原物、一次埋没	17世紀	
6	一匳		陶器 碗	6.4	5			口縁の1/5	萩黄瀬		19世紀中頃、迄々～有田銘	
7	一匳		小杯 小杯	5.9	2.9	2.4		3/4 破片	瀬戸黄瀬	染付の赤文字	19世紀中頃	
8	一匳		磁器 碗	8	2.1	1		2/3 破片	肥前	口縁に赤文字	18世紀後半	
9	一匳		磁器 染付碗	3				破片	肥前		1650～1660年	
10	一匳		磁器 小杯	6.9	3.9	4.2		1/3 破片	備前赤		18世紀後半～19世紀	
11	一匳		陶器 碗	10.4	2.2	4.9		器底の1/5	備前赤	焼印あり、打欠部あり	17世紀後半～18世紀前半	
12		地上2～3面	陶器 碗			2.8		器底の4/5	肥前	切り落	18世紀以降	
13		地上2～3面	陶器 土匳	10.2	2.4			底の1/4	備前赤	蓋あり	18世紀～19世紀	
14		地上2面	陶器 1匳	7.9	2.2			1/4 破片	備前赤	蓋あり	18世紀半～19世紀	
15		地上3面	磁器 瓶	10.9				口縁の1/5	肥前	蓋あり	1810～1820年	
16		地上3面	磁器 瓶			3.8		破片	肥前		?	
17		地上2面	陶器 土匳	3.6			9.6	1/3 破片	備前赤		18世紀半～19世紀	
18		地上3面	磁器 碗	9.1			8.6	14層の1/3	肥前		18世紀以降	
19		地上3～4面	陶器 土匳	8.8			8.1	口縁の1/5	肥前		18世紀以降	
20		地上3～4面	陶器 小杯	6	2.8	2.9		1/3 破片	備前赤		19世紀中頃	
21		地上3～4面	陶器 染付碗	7.8	1.6	3.3		1/3 破片	備前赤		18世紀後半～19世紀中頃	
22		地上3～4面	磁器 染付碗	5.7		3.2		1/5 破片	肥前		19世紀後半～小頃	
23		地上3～4面	磁器 染付碗	9.6	4.7	3.6		破片	肥前	口縁に赤文字	18世紀後半	

59	遺体	山十十村	品名	大きさ (cm)				現在地	再発生地	特徴	時期
				白粉粒	器具物	芯透物	銅針穴直径				
21		焼土3~4層	磁器	陶付瓦	10.8	4.4	4	3/4個体	肥前	高砂砂付門、足込地盤掘り	15世紀後半
25		焼土3~4層	磁器	上皿	8.7			1個体の1/5	関西系	白磁器	18世紀末~19世紀
26		焼土4層	磁器	碗			4.5		肥前		17世紀後半~18世紀前半
27		焼土4~5層	磁器	皿	13	3.1	4.7	1/2個体	肥前	足込砂付	1600~1800年
28		焼土4~5層	磁器	碗	9.8			白粉の3/3	肥前		19世紀前半~中葉
29		焼土4~5層	磁器	水筒					織戸	肥前・有田	17世紀末~18世紀前半
30		焼土5層	磁器	碗	6.8			11	西家系・月夜	色絵、穴の露地、赤灰	16世紀末~17世紀後半
31		焼土5層	磁器	碗			4		1/2個体	肥前	17世紀前半
32		焼土5~6層	磁器	陶付瓦	8.7	2.4	3.4	1/4個体	肥前		18世紀後半
33		焼土5~6層	磁器	皿	12.8	3.3	4.8	1/2個体	肥前	足込砂付、高砂砂付	1610~1800年
34		焼土5~6層	磁器	漆器小鉢			2.3		超短尻形	中朝	1080~1640年
35		焼土6層	磁器	茶			6.1		高深完形	肥前	7
36		焼土6層	磁器	陶付瓦	10.8	6.8	4.8	1/4個体	肥前		17世紀前半
37		焼土6層	磁器	陶付瓦	9.8	4.1	3.2	1/2個体	肥前		17世紀前半
38		焼土6層	磁器	陶付瓦	13.1	3.8	4.7	1/3個体	肥前	高砂砂付	1610~1800年
39	一括		陶器	火鉢	25				織戸	7層の穿孔	
40	一括		七律器		8.6	1.8	7	1/2個体		陶針系瓦、二次焼物	
41		焼土4~5層	瓦	瓦葺上品				摩さ1.7	完形		
42		焼土3~6層	土師器	トリス	6.5	3.2			完形	削え、焼物、赤褐色、色の戻	
43		焼土3~6層	土師器	トリス	4.8	2.3			完形	削りえ	
44		焼土5~6層	土師器	トリス	5.6	2.5~2.9			完形	削りえ、赤褐色の跡	
45		焼土5~6層	土師器	トリス	4	1.8			完形	削りえ、黒色の跡	
46		焼土5~6層	土師器	トリス	4.5	1.5~2			完形	削りえ	
47		焼土6~6層	土師器	トリス	3.9	2			完形	削りえ	
48		焼土6層	土師器	トリス	6.2	3.1		1/4個体	完形	削りえ、赤褐色の跡	
49		焼土6層	土師器	トリス	3.9	1.9			完形	削りえ、黒色跡	
50		焼土6層	土師器	トリス	4.6	2.2			完形	削りえ	
51		焼土3層	神瓦	康瓦	長3.6	幅1	火照径1.3	重さ8.7g	破片		
52		焼土3~4層	新製品	金具	幅14.1	幅0.8~1.2	厚さ0.1~0.15	重さ2.0g	破片		
53		焼土3~4層	新製品	漆器金具	幅4.2	幅3.3	厚さ0.15	重さ15.6g	破片		
54		焼土4層	新製品	漆器	幅5.2	幅2	厚さ0.05~0.2	重さ1.9g	破片		
55		焼土5~6層	新製品	漆器	幅3.5	幅2.3	厚さ0.15	重さ4g	破片		
56	一括		漆器	漆器	幅3.1	幅0.9		重さ8.5g	破片		
57	一括		漆器	漆器	長3.0	幅1.5	火照径1.5	重さ14.1g	破片		
58	一括		漆器	漆器	幅5.1	幅2.5	火照径0.15	重さ0.5g	破片		
59	一括		サイコロ	木製	長さ1	幅1		重さ1.1g	完形		
60	一括		漆器	漆器	幅5.7	幅3.5	厚さ0.7~1.2	重さ6.5g	破片		
61		焼土6層	磁器	陶付瓦	幅5.6	幅3	厚さ1.8	重さ39.2g	破片		大塚
62		焼土2~3層	磁器	陶付瓦	幅2.4			重さ2.7g	完形		「ス」の古瓦水
63		焼土3~4層	磁器	陶付瓦	幅2.4			重さ2.1g	完形		「ス」の古瓦水
64		焼土3~4層	磁器	陶付瓦	幅2.4			重さ3.5g	完形		「ス」の古瓦水
65		焼土3~4層	磁器	陶付瓦	幅2.2			重さ2.1g	完形		「ス」の古瓦水、裏面「元」
66		焼土3~4層	磁器	陶付瓦	幅2.3			重さ2g	完形		「ス」の新瓦水
67		焼土3~4層	磁器	陶付瓦	幅2.1			重さ2g	完形		「ス」の新瓦水
68		焼土3~5層	磁器	陶付瓦	幅2.3			重さ2.1g	完形		「ス」の新瓦水
69		焼土3~5層	磁器	陶付瓦	幅2.5			重さ3.4g	完形		「ス」の新瓦水
70		焼土4層	磁器	陶付瓦	幅2.3			重さ3.3g	完形		「ス」の新瓦水
71		焼土4層	磁器	陶付瓦	幅2.4			重さ2.5g	完形		「ス」の新瓦水
72		焼土4~5層	磁器	陶付瓦	幅2.3			重さ3.5g	完形		「ス」の新瓦水
73		焼土5層	磁器	陶付瓦	幅2.5			重さ3g	完形		「ス」の新瓦水
74		焼土上	磁器	陶付瓦	幅2.5			重さ3.4g	完形		「ス」の新瓦水
75		焼土上	磁器	陶付瓦	幅2.5			重さ3.5g	完形		「ス」の新瓦水
76		焼土上	磁器	陶付瓦	幅2.3			重さ3.3g	完形		「ス」の新瓦水
77		焼土上	磁器	陶付瓦	幅2.5			重さ3g	完形		「ス」の新瓦水
78	一括		磁器	陶付瓦	幅2.5			重さ3.7g	完形		「ス」の新瓦水
79	一括		磁器	陶付瓦	幅2.3			重さ3.1g	完形		「ス」の新瓦水
80	一括		磁器	陶付瓦	幅2.3			重さ3.1g	完形		「ス」の新瓦水
81	一括		磁器	陶付瓦	幅2.2			重さ2.7g	完形		「ス」の新瓦水
82	一括		磁器	陶付瓦	幅2.5			重さ3.8g	完形		「ス」の新瓦水
83	一括		磁器	陶付瓦	幅2.3			重さ2.8g	完形		「ス」の新瓦水
84	一括		磁器	陶付瓦	幅2.5			重さ3.4g	完形		「ス」の新瓦水
85	一括		磁器	陶付瓦	幅2.4			重さ3.4g	完形		「ス」の新瓦水
86	一括		磁器	陶付瓦	幅2.5			重さ3.1g	完形		「ス」の新瓦水
87	一括		磁器	陶付瓦	幅2.3			重さ3.2g	完形		「ス」の新瓦水、裏面「元」
88	一括		磁器	陶付瓦	幅2.0			重さ3.5g	破片		「ス」の新瓦水、裏面「元」

第8節 24調査区

写真8



24調査区全景（西方向から）



1号側溝（北方向から）



北壁面（南方向から）



配石（南方向から）



櫛状側溝（南方向から）



櫛状側溝（北方向から）



櫛状側溝（西方向から）



櫛状側溝（西方向から）

## 第9節 25調査区

25調査区は長さ約9.5m、幅約5.7mの長方形を呈する。調査区の東端部には側溝が確認できた。側溝の西側一帯は工事によって全体的に攪乱されており調査対象にはならなかった。地表面の標高は東の方で約6.6m、西の方で約7.1mである。

## 1 検出土物 (第94、95図、写真9)

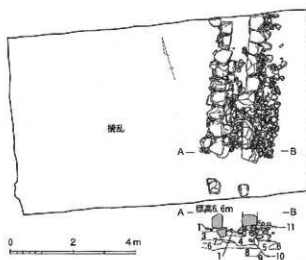
## 1号側溝 (第94、95図)

側溝は調査区の東端に位置するが現代に限らず近い所産である。側溝は、現県道の宗近魚町線にほぼ直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の全体幅は約1.8m、溝幅は約0.25～0.3m程である。側溝の断面をみると、側溝の両側には拳大～人頭大の川原礫が埋まれ、上面に巨石を乗せている。西片側は巨石が二段に積まれた所もあった。

側溝の確認面の標高は6.5～6.6mであり現地表面とほぼ同じである。石垣の基礎部は標高5.8m前後である。

## 2 出土遺物 (第96図)

本調査区の出土遺物の詳細は表9に記述している。



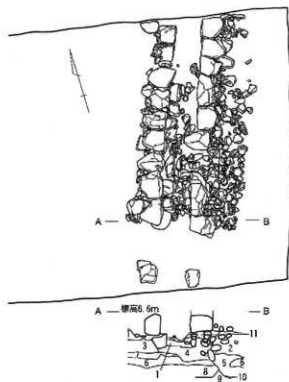
第94図 25調査区遺構配置図 (1/120)

## 【25調査区南壁土層説明】

- 1 黒灰褐色土 (炭片や焼土粒を含む)
- 2 淡灰褐色土 (僅かに炭片や焼土粒を含む)
- 3 茶褐色土 (黄褐色のブロック混入)
- 4 灰褐色土 (黄褐色と淡赤褐色のブロック混入)
- 5 灰黄褐色土 (径2～3cm前後の淡赤褐色の石を含む)
- 6 淡黄褐色砂質土 (小石を含む)
- 7 淡赤褐色土 (小石を多量に含む)
- 8 淡黄褐色砂質土 (炭化物や礫の混入有り)
- 9 暗黄褐色砂質土 (暗黄褐色ブロックや礫の混入。鉄分の沈着)
- 10 黒褐色土 (厚さ7cmの炭化物層。焼土5面)
- 11 淡赤褐色土

表9 25調査区出土遺物観察表

番号	遺構	用土・土層	特徴	大きさ (cm)				共存品	所在地点	特徴	時期
				口径径	型高由	底径径	胴径径(人直径)				
1	一基		磁器 染付面	径10	5.7	3.8		2/3 磁片	肥前	型製刷り	明治10年代
2	一基		磁	長さ11.3	幅5.5	厚さ1	長さ150.1	完整			
3	一基		磁器 黒水磁器		径2.4		長さ2.9g	完整		「ス」の古寛永	
4	一基		磁器 黒水磁器		径2.5		長さ3.5g	完整		「ス」の古寛永	



第95図 25調査区遺構配置図 (1/60)

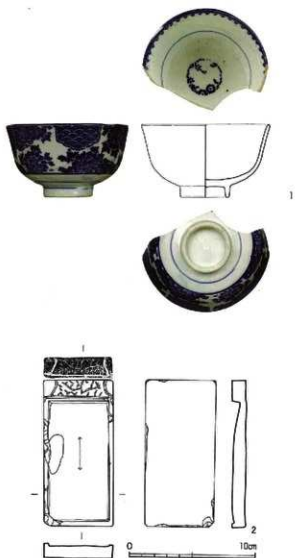


第96図 25調査区出土遺構実測図 (1/3、2/3)

写真9



1号溝出土状態 (南方向から)



## 第10節 26調査区

26調査区は長さ約19m、幅約5.3mの長方形を呈する。調査区の東端部と西端部には現代の側溝が確認できた。現在近魚町線の下には道路に平行する側溝があると推量される。調査区の北壁に検出された礫の並びは側溝の石垣と見做される。地表面の標高は約8.8mである。

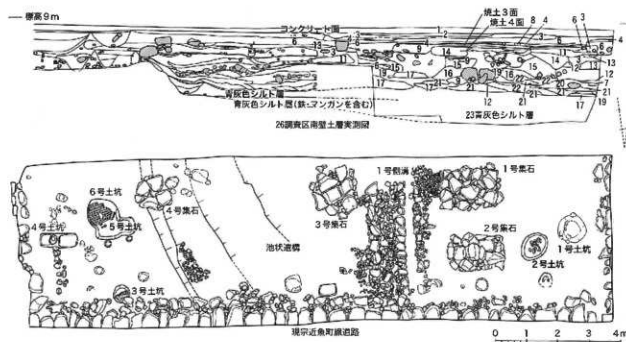
調査区で確認できた遺構としては、側溝、集石、土坑等であるが、調査区の東端から約4mの所から急に斜めの掘り込みの遺構があり、調査区全体に及んでいた。巨大な池状の遺構が何かの遺構であるが、遺構の北、西、南への展開は確認できてはいない。この中に遺存する遺構は、池状の遺構を埋め立てた後に構築されたものである。

26調査区の土層は、東端では地表面から約1.1~1.4m程度で地山となる。地山は調査区東端から西へ約5mの地点で地表から2.1mとなり、調査区西端で層序は地表から約3mとなる。地山の急激な変化は池状遺構に起因するものである。池状遺構内の土層は、深い部分で底から約1m程度に青灰色シルトが堆積しており、その上は人為的に埋められた黄褐色土の土土や礫の層が約1m以上も堆積していた。堆積土内には表土下約0.6~0.8mの地点で焼土3面~焼土4面と推量される焼土・炭化物層がバックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。これらの火災面は池状遺構の外まで確認できることから、焼土3面~焼土4面の頃には既に池状遺構は埋められていたことになる。

## 1 検出遺構 (第97~104図、写真10)

## 池状の遺構 (第97図)

26調査区の東端から西へ4mの地点で、池状遺構の掘り込みラインを確認している。池状の掘り込みは、標高7.7mの地山から斜めに掘り込まれたもので、底部は標高6.7mである。底部は徐々に深くなり標高5.9mの所まで



第97図 26調査区遺構配置図 (1/120)

## 【26調査区南壁土層説明】

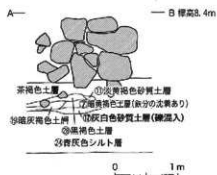
- |                              |   |
|------------------------------|---|
| 1 コンクリート地表面                  | 14 暗茶褐色砂質土 (灰片や礫を多く含む)                        |
| 2 明茶褐色砂質土 (部分的に灰片を含む)        | 15 淡灰褐色土                                      |
| 3 茶褐色土                       | 16 淡灰褐色土 (炭分の沈着)                              |
| 4 淡灰褐色砂質土 (小石粒を含む)           | 17 灰白色砂質土 (10cm前後の礫混入、灰褐色砂質土 (炭化物粒を含む)、炭分の沈着) |
| 5 暗黒褐色土                      | 18 灰白色砂質土 (10cm前後の瓦片混入)                       |
| 6 暗茶褐色土 (厚10cm前後の礫や瓦片を混入)    | 19 暗灰褐色土 (黄褐色の礫が混入、炭分の沈着)                     |
| 7 暗灰褐色土                      | 20 暗灰黄褐色砂質土                                   |
| 8 灰白色砂質土                     | 21 灰黄褐色砂質土                                    |
| 9 黄褐色砂質土                     | 22 淡灰黄褐色砂質土                                   |
| 10 灰褐色粘質土 (炭化物粒を含む)          | 23 青灰色シルト層 (小石粒を含む、炭分の沈着)                     |
| 11 淡灰黄褐色砂質土 (厚3~10cm前後の礫を混入) | 24 暗黄褐色土 (焼土3層)                               |
| 12 暗褐色土 (炭化物や礫の混入有り)         | 25 暗黒褐色土 (焼土4層)                               |
| 13 茶褐色砂質土 (灰片や小さな礫を含む)       | 26 暗黒褐色土 (焼土4層)                               |

確認できた。池状遺構の確認ラインは心持ち弧状を呈するが、遺構は調査区全体に及び、南方、北方、西方への展開は推測の域を超えるものである。池状遺構の中に位置する遺構は、これが人為的に埋められた後に構築されたものである。

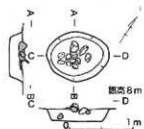
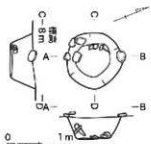
1号側溝 (第98図)

側溝は調査区の中央やや西に位置する。側溝は、現泉道の宗近魚町線にほぼ直角に配置されている。側溝の全体軸は約2m前後、溝幅は約30cm程である。側溝の両側には人頭大の川原礫が配置され、周辺に拳大の礫を置き補強したものである。西片側の南端には一辺1.5mの方形の敷石面が遺存していた。東片側は側溝に沿って幅1.3m、長さ3.7mの範囲に拳大〜人頭大の礫が敷き詰められていた。敷石の範囲の東側縁辺部には巨石を側溝と平行に配置していた。敷石内には焼け石を含み、瓦片や京焼風陶器碗を含んでいた。池状遺構の埋め戻し後の所産である。

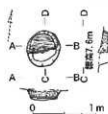
側溝の断面をみると、側溝の確認面の標高は7.85m、基底部は7.6mであり、何段にも積まれてはいない。



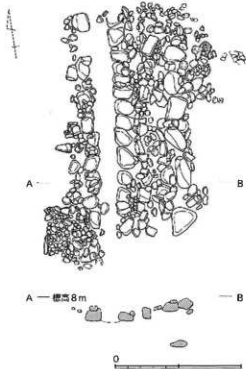
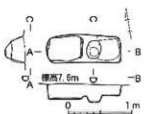
第99図 26調査区  
3号集石実測図 (1/60)



第100図 26調査区  
1号土坑実測図 (1/60)



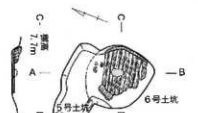
第101図 26調査区  
2号土坑実測図 (1/60)



第102図 26調査区  
3号土坑実測図 (1/60)



第103図 26調査区  
4号土坑実測図 (1/60)



第98図 26調査区1号側溝実測図  
(1/60)

第104図 26調査区  
5号、6号土坑実測図 (1/60)

## 1号、2号集石 (第97図)

調査区の西側に位置する集石遺構である。1号、2号集石は平面形態や大きさ、遺存位置等から一対として機能したものとも推察できる。1号集石は長方形を呈し、長軸2m、短軸1.4mで、確認面から基底部までは1.5mである。2号集石は長方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.2mで、確認面から基底部までは1号集石と同じである。集石は巨大な凝灰岩と川原礫が組まれており、建物の礎石の様相を呈する。確認面の標高は約8.5mであり、基底部は7mである。青灰色シルト層の直上の埋め土にまで達していた。池伏遺構の埋め戻し後の所産である。

## 3号集石 (第99図)

調査区の中央部南壁に沿って位置する集石である。平面形は長方形を呈し、長軸1.8m、短軸1.5mで、確認面から基底部までは1.3mである。集石は巨大な凝灰岩と川原礫が組まれており、建物の礎石の様相を呈する。確認面の標高は8.3mであり、基底部は7.2～7mである。青灰色シルト層の直上の埋め土にまで達していた。池伏遺構の埋め戻し後の所産である。

## 4号集石 (第97図)

4号集石は調査区の東端付近の池伏遺構の縁に位置している。平面形は楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.2mで、確認面から基底部までは0.7mである。集石は巨大な凝灰岩と川原礫が組まれており、建物の礎石の様相を呈する。確認面の標高は約8.5mであり、基底部は約7.8mである。池伏遺構の埋め戻し後の所産である。

## 1号土坑 (第100図)

調査区の西端に位置する円形土坑である。平面の直径は0.9mを呈する。確認面から底部までは約0.4mの深さである。底部に幾つかの川原礫が遺品している。確認面の標高は約7.9mである。池伏遺構の埋め戻し後の所産である。

## 2号土坑 (第101図)

調査区の西端に位置する楕円形土坑である。平面の長径は1m、短径は0.8mを呈する。確認面から底部までは約0.2mの深さである。中央上部に幾つかの川原礫が遺品している。確認面の標高は約7.9mである。池伏遺構の埋め戻し後の所産である。

## 3号土坑 (第102図)

調査区の東端の北壁付近に位置する円形土坑である。平面の直径は約0.55mを呈する。確認面から底部までは約20mの深さである。土坑内には桶の底部片が半分程度遺品している。確認面の標高は約7.4mである。

## 4号土坑 (第103図)

調査区の東端に位置する長方形土坑である。平面の長軸は約1.2m、短軸は0.45mを呈する。確認面から底部までは約0.25～0.3mの深さである。確認面の標高は約7.5mである。

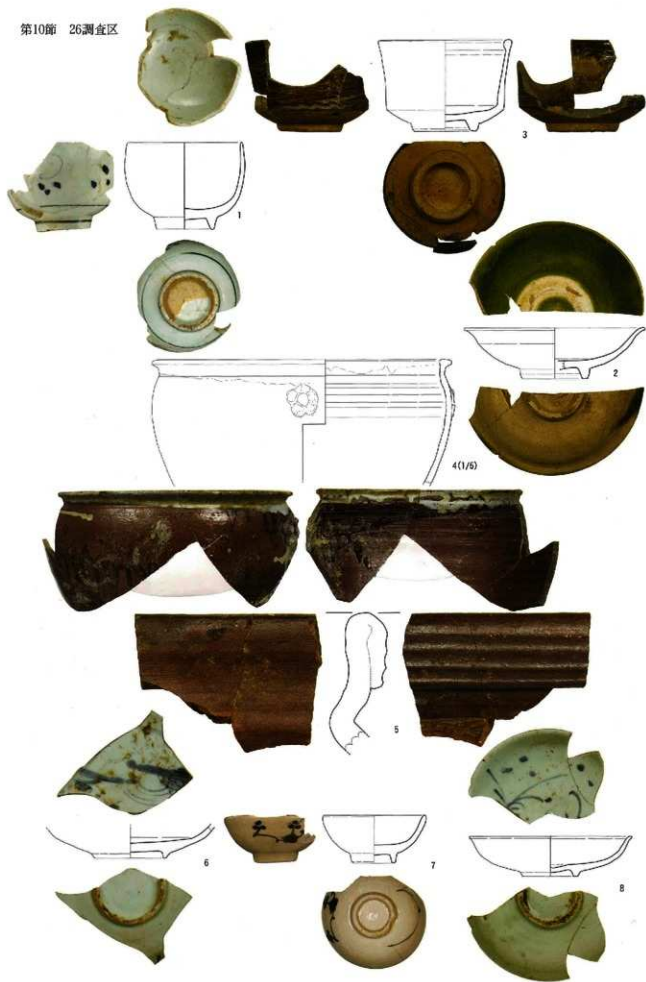
## 5号、6号土坑 (第104図)

調査区の東端に位置する長方形土坑と円形土坑である。5号土坑は長方形を呈し、長軸は約1.3m、短軸は0.55～0.6mを呈する。確認面から底部までは約0.37mの深さである。確認面の標高は約7.55mで底部の標高は7.2mである。6号土坑は直径約1mの円形であり、中に桶の底部が遺存していた。底部の標高は7.25mである。

## 2 出土遺物 (第105図～第110図)

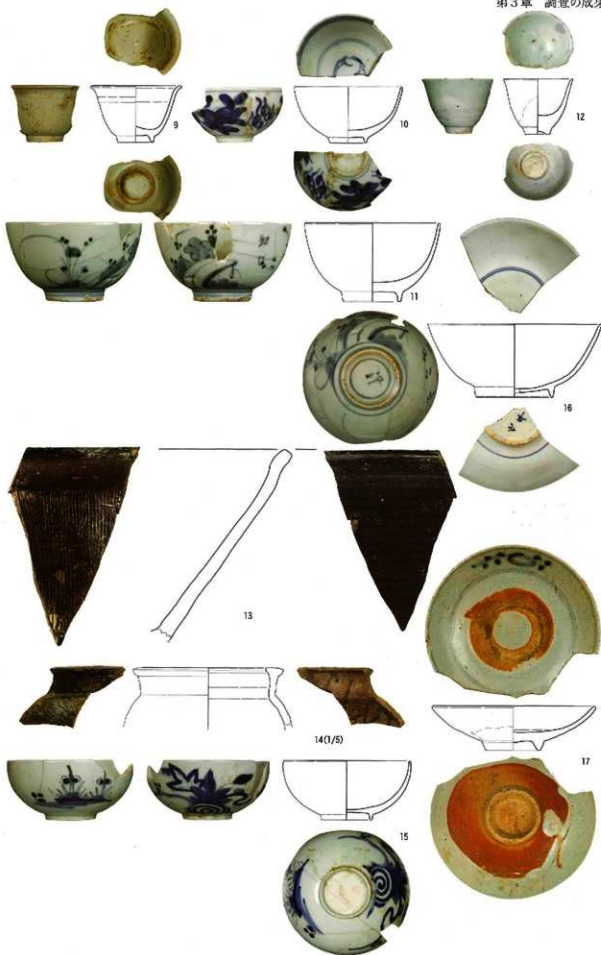
本調査区の出土遺物の詳細は表10に記述している。





第105図 26調査区出土遺物 (1/3)

※4は1/5



第106図 26調査区出土遺物 (1/3)

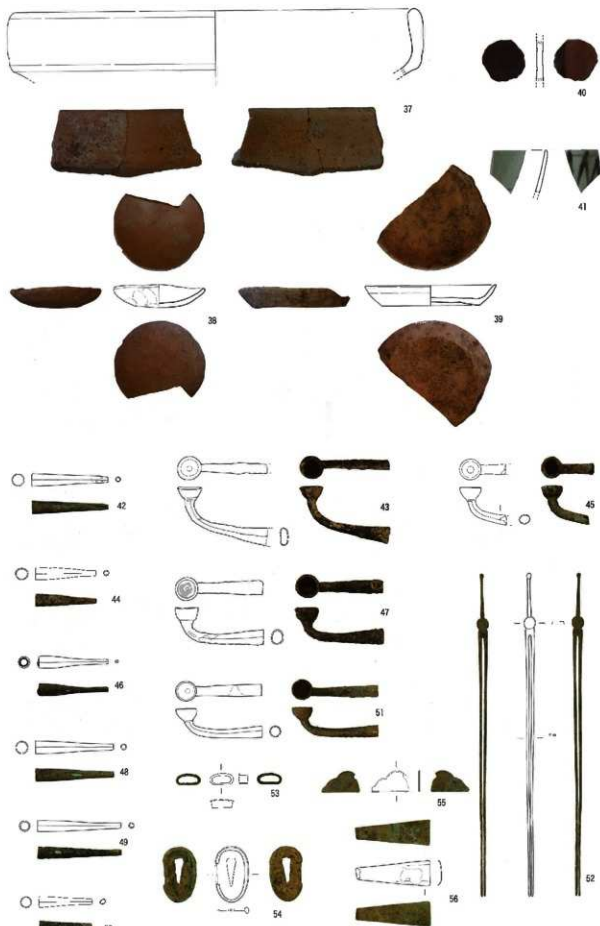
※14は1/5



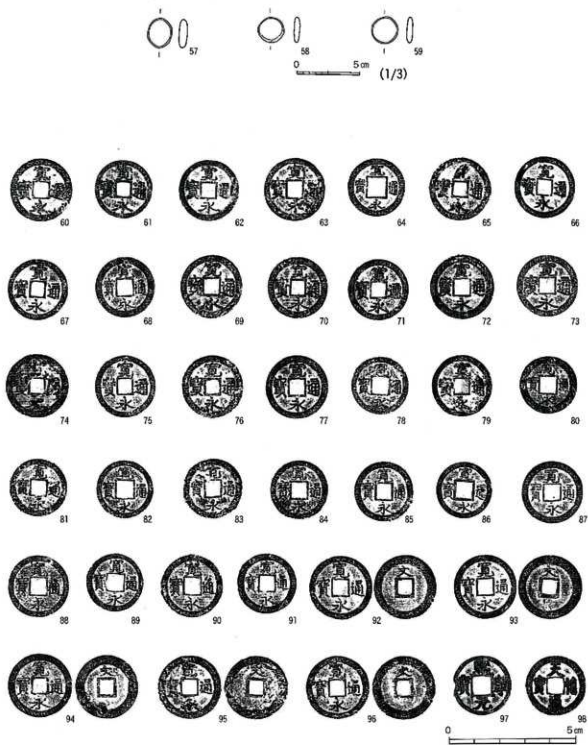
第107図 26調査区出土遺物 (1/3)



第108図 26調査区出土遺物 (1/3)



第109図 26調査区出土遺物 (1/3)



第110図 26調査区出土遺物 (2/3)

表10 26調査区出土遺物観察表

番号	遺物	出土層	形状	大きさ (cm)			残存数	発見地	行名	時期	
				白径	高さ	底径					
1	一器		磁器 染付筒	9	6.8	4.5	8.6	2/3 個体	肥前	内前原	1620 ~ 1630 年
2	一坏		陶器 卍	14.4	4	5.2		1/2 個体	肥前	肥前肥前郡行野地、肥前守ノ山	1690 ~ 1740 年
3	一器		陶器 多口・5連し	10.6	7.1	4.0		1/3 個体	肥前	外前山	1690 ~ 1740 年
4	一坏		陶器 壺	39				口縁の 1/5	?	花京御所より出土	?
5	一器		陶器 人型					破片	肥前	肥前文	16 世紀末
6	一坏		磁器 染付筒				5.6	器底の 2/3	肥前	高台砂付者	1630 ~ 1650 年
7	一坏		磁器 壺	8	3.7	3.4		4/5 個体	?		18 世紀後半
8	一器		磁器 染付筒	12.8	3.1	1.1		1/3 個体	肥前	高台砂付者	1630 ~ 1650 年
9	一坏		磁器 小杯	6.8	4.4	2.6		2/3 個体	肥前	外反し	?
10	一坏		磁器 染付筒	8.5	4.4	2.9		1/3 個体	肥前		17 世紀末 ~ 19 世紀前半
11	一坏		磁器 染付筒	16	4.6	4		3/4 個体	肥前		18 世紀後半
12	一坏		磁器 小杯	5.5	4.3	2		3/4 個体	肥前	白磁	1630 ~ 1650 年
13	一坏		陶器 罌					口縁の 1/10	?		18 世紀 ~ 19 世紀前半
14	一坏		陶器 壺	19.6				口縁の 1/10	?	肥前口縁	?
15	一器		磁器 染付筒	10.8	6.1	4.4		略筒形	肥前	大明年製くすね	18 世紀後半
16	一坏		磁器 染付筒	13.7	5.7	5		1/4 個体	肥前	大明年製化子	17 世紀後半
17	一坏		磁器 皿	12.8	3.3	4.4		3/4 個体	肥前	肥前肥前郡	17 世紀後半 ~ 18 世紀前半
18	一器		磁器 皿	4.9	3.1	0.8	1.6	2/3 個体	肥前	白磁、蓋付筒形	明治以降 ~ 昭和 包帯器・手帳
19	1号溝		陶器 瓶	2.2				口縁部分	肥前		18 世紀
20	№2		陶器 瓶	12	7.6	4.6		2/3 個体	肥前	筒形、透明釉	17 世紀後半 ~ 18 世紀前半
21	暗赤褐色砂質土層		陶器 壺	11	7.2	3.3		2/3 個体	肥前	内外透明釉	17 世紀後半 ~ 18 世紀前半
22	暗赤褐色砂質土層		陶器 壺	11.8	7.3	5.2		2/3 個体	肥前	内外透明釉	1630 ~ 1650 年
23	暗赤褐色砂質土層		磁器 染付筒	8.6	6.1	5.3		2/3 個体	肥前		17 世紀後半
24	1号上段		陶器 壺	11.8				1/5 個体	肥前		
25	1号上段		土器 皿	9.6	2	5.8		1/2 個体	肥前	片形赤切、口クロ調整	
26	2号上段		土器 壺			6.6		破片	肥前	片形赤切、口クロ調整	
27	一坏		陶器 壺			4.6		1/3 個体	肥前		
28	一器		磁器 壺			7.6		器底の 2/3	肥前		
29	一坏		磁器 壺					破片	肥前		
30	一坏		陶器 壺			4.6		器底	肥前		
31	一器		磁器 壺	13.4	3.2	6.4		1/5 個体	肥前		
32	一坏		陶器 壺	7	15.2			1/3 個体	肥前		
33	一坏		瓦器 瓦器	30.8				破片	肥前	口クロ調整、内外透明釉	
34	一器		瓦 祭丸瓦		14.4			厚さ 3.4	破片	肥前	巴文
35	一坏		土器 壺	9.6	1.7	7.7		略筒形	肥前	肥前赤切調整片形	
36	一坏		土器 壺	9.9	2.2	5.1		1/3 個体	肥前	肥前赤切、調整赤切	
37	一坏		土器 壺	21.5				破片	肥前	口クロ調整	
38	一坏		土器 壺	7.2	1.8			略筒形	肥前	手づくね	
39	一坏		土器 壺	10.4	1.6	7.7		1/2 個体	肥前		
40	一坏		陶器 壺			6.5		略筒形	?		
41	地下層		磁器 壺					破片	肥前		
42	2号上段		磁器 壺	残存長 6	幅 1	横口径 0.4	高さ 3g	破片	肥前		
43		暗赤褐色砂質	磁器 壺	残存長 7.2	幅 1.4	横口径 1.9	高さ 11.9g	破片	肥前		
44		暗赤褐色砂質	磁器 壺	残存長 4.8	幅 1	横口径 0.4	高さ 3.4g	破片	肥前		
45	一器		磁器 壺	残存長 3.7	幅 0.8	横口径 1.7	高さ 5.8g	破片	肥前		
46	一器		磁器 壺	残存長 3.6	幅 1	横口径 0.4	高さ 4.7g	破片	肥前		
47	一坏		陶器 壺	残存長 8.7	幅 1.2	横口径 1.9	高さ 11.1g	破片	肥前		
48	一坏		磁器 壺	残存長 6.2	幅 1	横口径 0.5	高さ 3.9g	破片	肥前		
49	一坏		陶器 壺	残存長 6.7	幅 1	横口径 0.5	高さ 6g	破片	肥前		

番号	地味	五十十屋	図柄	大きさ (mm)			残存数	出土層	特徴	明証
				口径値	器底径	高さ値				
30	一拵		紙管	残存長 4.2	幅 1	幅に径 0.4	長さ 2.7g	破片		
31	一拵		磁管	厚径	長さ 6.9	幅 1	穴距離 1.6	長さ 7.4g	破片	
32	一拵		カンザシ	カンザシ	長さ 33.6	幅 0.9	厚さ 0.2	長さ 11.4g	完整	
33	一拵		銅製品	銅製品	長さ 1.9	幅 1	厚さ 0.7	長さ 1.1g	破片	
34	一拵		銅製品	銅製品	長さ 3.4	幅 2.7	厚さ 0.5	長さ 12.2g	破片	
35	一拵		銅製品	銅製品	長さ 3	幅 1.7	厚さ 0.1	長さ 2.3g	破片	
36	一拵		銅製品	銅製品	長さ 5.9	幅 2	厚さ 0.1	長さ 3.7g	破片	
37	一拵		銅製品		長さ 2.4	幅 2	厚さ 0.7	長さ 5.9g	完整	
38	一拵		銅製品		長さ 2.1	幅 2.1	厚さ 0.5	長さ 3g	完整	
39	一拵		銅製品		長さ 2	幅 2	厚さ 0.4	長さ 2g	完整	
40	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 4.7g	完整	「ス」の古瓦水	
41	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 3.1g	完整	「ス」の古瓦水	
42	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 3.6g	完整	「ス」の古瓦水	
43	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
44	一拵		紙管	紙管	径 2.2		長さ 3.5g	完整	「ス」の古瓦水	
45	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.2g	完整	「ス」の古瓦水	
46	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3g	完整	「ス」の古瓦水	
47	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
48	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 2.7g	完整	「ス」の古瓦水	
49	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
50	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 3.7g	完整	「ス」の古瓦水	
51	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 3.5g	完整	「ス」の古瓦水	
52	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 4g	完整	「ス」の古瓦水	
53	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
54	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
55	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
56	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
57	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.5g	完整	「ス」の古瓦水	
58	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 2.7g	完整	「ス」の古瓦水	
59	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 4.1g	完整	「ス」の古瓦水	
60	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
61	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 3g	完整	「ス」の古瓦水	
62	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 3g	完整	「ス」の古瓦水	
63	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 2.3g	完整	「ス」の古瓦水	
64	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
65	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
66	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
67	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
68	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
69	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
70	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
71	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
72	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
73	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
74	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
75	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
76	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
77	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.5g	完整	「ス」の古瓦水	
78	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 2.7g	完整	「ス」の古瓦水	
79	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 4.1g	完整	「ス」の古瓦水	
80	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
81	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 3g	完整	「ス」の古瓦水	
82	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 2.3g	完整	「ス」の古瓦水	
83	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
84	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
85	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 3g	完整	「ス」の古瓦水	
86	一拵		紙管	紙管	径 2.2		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
87	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
88	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.8g	完整	「ス」の古瓦水	
89	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水	
90	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
91	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水	
92	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 2.5g	完整	「ス」の古瓦水、断面「文」	
93	一拵		紙管	紙管	径 2.6		長さ 3.4g	完整	「ス」の古瓦水、断面「文」	
94	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 2.8g	完整	「ス」の古瓦水、断面「文」	
95	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.2g	完整	「ス」の古瓦水、断面「文」	
96	一拵		紙管	紙管	径 2.5		長さ 3.3g	完整	「ス」の古瓦水、断面「文」	
97	一拵		紙管	紙管	径 2.3		長さ 3g	完整		
98	一拵		紙管	紙管	径 2.4		長さ 2.7g	完整		





26調査区全景（西方向から）



調査区全景（東方向から）



1号側溝（北方向から）



1号集石（下）、2号集石（上）（南方向から）



池状遺構・南壁土層面（北方向から）



池状遺構・北壁土層面（南方向から）



4号土坑（南方向から）



6号土坑（南方向から）

## 第11節 27調査区

## 1 調査の概要 (第111図、写真11)

27調査区は谷町の群屋・志保屋敷と町屋の道路との交差点に接する南東地区にあたる。文化12年の町屋敷絵図上ではこの交差点から東へ3筆分が調査対象地であった。3筆すべてが志保屋長右工門の屋敷にあたる。西部の屋敷については、水路や埋設物等への影響を考慮して西半部を調査対象地から除外した。溝2は最も西の志保屋長右工門屋敷と中央の屋敷との境、溝4は中央の志保屋長右工門屋敷と東の屋敷との境を区画する溝と推定される。調査対象地は現道の南縁が側溝と重なり、調査範囲はその内側となったため、町屋敷の間1部分は調査できていない。また、南側の水路と接する町屋最奥部は調査範囲外であったため、南限界の状況は把握できていない。調査の結果、溝や建物基礎部分の一部などを確認した。特に溝は石組みを伴う排水溝であり、区画を示す。出土遺物としては、主に17世紀初頭頃から19世紀間の陶磁器類や銭貨、キセルなどがある。

## 2 基本層序 (第112、113図)

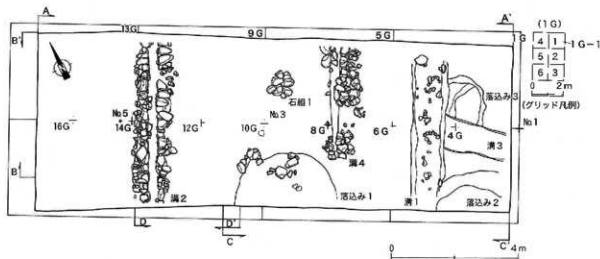
土層の堆積状態は、現道路面から谷の自然堆積土(シルト層)まで約1.5m、地山露層まで約2mで達するが、シルト土層の堆積土は火災痕跡と造成土を交互に積み重ねた人為的な整地を示していた。焼土面は各時期の生活面といえるものであり、6面を確認した。

西辺の土層断面B-B' (第113図)では、1~92層を観察できた。上層から1~4層が現在の造成土である。焼土面(生活面)は上から1面から6面までを確認した。生活面は焼土・炭化物主体層の上に、主に地山の泥礫黄褐色土を用いた整地層の上面である。この1面(5層)は最後の焼土面で北端部にわずかに残る、2面(11層)は北端部で被熱赤変しているが、以南では黒変硬化する。3面(13層上面)は、2面のほぼ直下にあり連続的に確認できる。4面(20層)は、被熱黒変しており、その下に整地層(礫・砂利層)が0.3m堆積する。5面(90層)は被熱上面から赤色、黒色、黒赤褐色と被熱の状況が観察できた。整地層は29層である。

北辺の上層断面A-A' (第112図)では、東半部は4面及び21層を掘り下げる大きな造成が確認できる。

南辺の上層断面C-C' (第112図)では、中央部から東部にかけて複数の掘込み、造成の痕跡がみられる。

各面・各層の時期は、5面が直上の23層出土遺物から17世紀中頃、6面は直上の89層出土遺物から17世紀前半と考えられる。また、6面下の91・92層から1600年前後の陶磁器類が出土している。また、22区の焼土面との対応関係は、4面が22区3面、5面が22区4面、6面が22区5面に相当するものと考えられる。



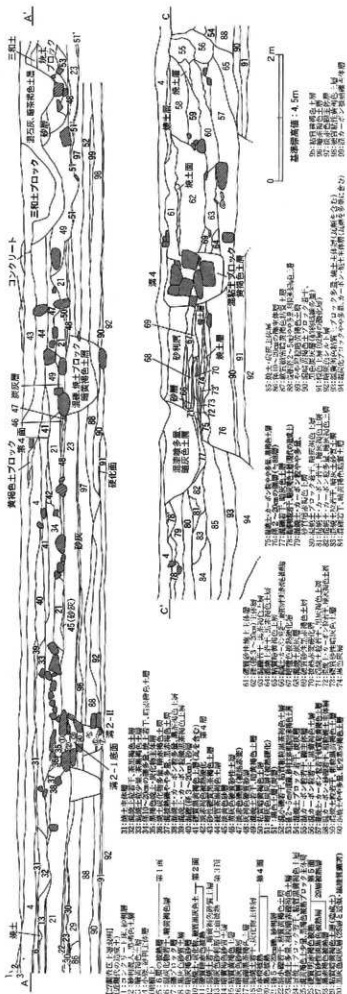
第111図 27調査区遺構配置図 (1/120)

3 検出遺構(第111、114、115図)

溝1(第114図)は、調査区東部の4Gと6G間に位置する。南北に延びる溝である。主軸方向は北62度東を指向するが、町屋の街路に対して直交する。確認面での規模は長さ約5m、幅1m~1.5m、底面幅0.7m~0.9m、深さ0.15m程度である。北辺の土層断面では、49層及び5面を切って構築されていた。溝内には径0.1m~0.4m程度の礎が若干堆積していた。

溝2(第115図)は、調査区西部の12Gと14G間に位置する。街路に対して直交する石組の溝である。新旧2条の溝(2-I・II)が上下に確認できた。溝2-I(新)は、埋没後その上に2・3面が形成されており、3面以前に構築されたこととなる。検出面での規模は長さ5.3m、幅0.25m、深さ0.5m程度である。北辺の土層断面A-A'では、49層及び5面を切って構築されていた。石組は内面に向けて面を揃えた状態で検出された。石材はほとんど加工されていない川原石が用いられていた。石組の積み方は、0.3m~0.4mの川原石を2~3段積み、その空隙に0.1m~0.2mの門礎を充填する手法が採られていた。川原石は平組面を内側に向けているが、長楕円形のものには短い方を外にやや下向きに傾斜させ据えていた。炭込めには小礎が用いられていた。溝2-Iの時期は溝底面から出土した陶磁器類が7世紀前半代であり、これ以降の構築であることを示しており、上下の堆積上出土遺物の時期とも整合する。

溝2-II(旧)は5面下で構築されていた。検出面での規模は長さ約5m、幅0.2m、深さ0.4m程度である。北辺の土層断面A-A'では、97層以降、5面以前に構築されていた。石組は面を揃えた状態で検出され、石材に川原石が用いられていた。石積は1段が残り、西側の石列は南北両端付近を欠くが、径0.1m~0.2mの礎が一例、東側の石列は径0.3mの礎が一例残っていた。石組は完存しておらず、石材が取り去られた状態であった。残存する石組は表面が被熱していた。また、西側石列の外側に径2cmの杭列が一例確認できた。石組以前の施設と思われるが、明確でない。



第112図 27調査区北辺A-A'土層断面図(1/60)

このように溝2は新田があってもほぼ同一位置が維持されており、境界施設を示すものといえよう。

溝3（第114図）は、調査区東辺から北西方向に延び溝で、主軸方向は北50度西を指向し、町屋の街路に対しては斜行する。西端部は溝1付近で消失する。確認面での規模は検出長2m、幅約1m、深さ0.2m程度である。現在の造成土下で検出したものであり、近世末から近代に構築されたものと想定される。

溝4（第111図）調査区東部の4Gと6G間に位置する。南北に延びる溝である。主軸方向は北60度東を指向するが、町屋の街路に対して直交する。石組をもつが遺存状態はよくない。確認面での規模は長さ3.5m、幅は底面では0.2m～0.3mである。北辺の上層断面では、2・3面以降の構築と考えられる。石組は径0.2m～0.4m程度の樫が東辺に残っていた。

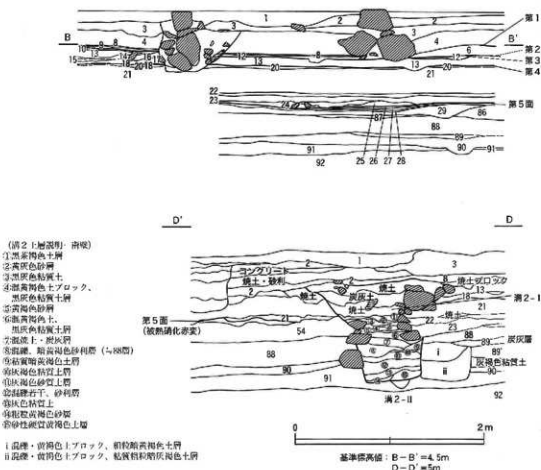
このように、街路から直交して南部の谷川へと延びる溝は排水溝と境界施設の機能をもつ。

落込み1（第111図）は調査区南辺中央で検出した。土層断面C-C'でみるように、現在の造成土下に構築されたものである。幅4.5m、深さ1m以上の規模をもち近世末から近代にかけて造成されたものと想定される。検出面では円形の範囲を確認した。

落込み2（第114図）は調査区南東隅に検出した。上層断面C-C'では、5面以前の構築と考えられる。径3m、深さ1m以上である。

落込み3（第114図）は調査区東辺付近に位置する。溝1・3に切られており、全体の形状は不明であるが、径2m、深さ0.5m程度と想定される。堆積土には焼土、炭化材を多く含んでおり、落込み2と同様に「焼土整理坑」（註1）と考えられる。

註1：「焼土整理坑」（『日本橋一丁目遺跡』日本橋・JH遺跡調査会他、2003）



第113図 27調査区西辺B-B'、南辺D-D' 土層断面図 (1/40)

石組1（第111図）は調査区中央部の7G-5に位置する。0.3m～0.4m程度の川原石7個を配している。深さ0.15mの掘り込みをもち建物基礎の一部と思われる。

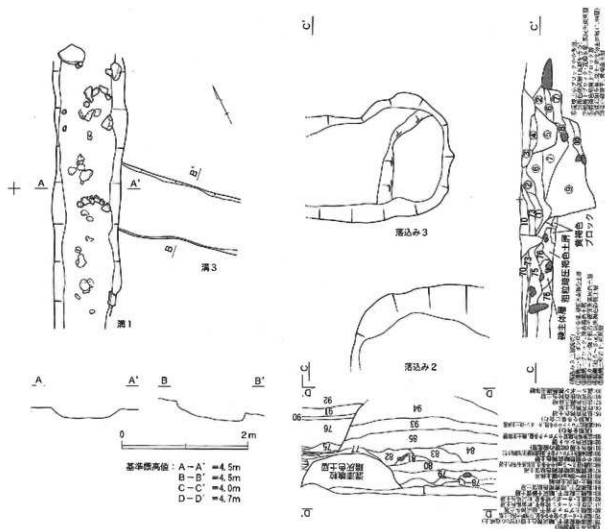
#### 4 出土遺物（第116～128図、表11・12）

27調査区から出土した遺物はコンテナ50箱と多量であった。このうち磁器45点、陶器61点、土師質土器14点、金属製品他21点、瓦類9点、銭貨76点を図示した。

#### 陶磁器類（第116～122・125図、表11）

溝2（2-1）では磁器小杯・碗・皿・鉢、陶器碗・皿などが出土した。陶器皿8、11、12は1600年～1630年の製作年代であるが、他の陶磁器類は1630年～1650年を示している。溝4では15の17世紀末～18世紀前半と考えられる「大明成化年製」銘の染付が出土している。

各層の出土陶磁器類は、5面直上の23層中に染付小杯・皿、陶器では鉢などがみられた。特徴的なものとして、38は伊賀（伊賀・美濃）の花入で17世紀初頭の貴重な例といえる。133はベトナム産の旋締陶器長胴瓶上半部である。この5面の時期は、出土陶磁器が1630年～1650年代を示しており、ほぼ17世紀中頃といえよう。6面をなす90層から1600年～1630年代の染付碗・皿、古磁皿、陶器鉢・皿が出土している。特に71は岸岳系陶器皿で藁灰釉を施し、1580年～1600年と古い時期を示している。直上の89層からは17世紀前半の染付が出土している。6面は17世紀前半の時期といえよう。造成面もしくは生活面よりも下層となるシルト上層から1600年～1630年代の陶器が出土している。



第114図 27調査区溝1・3、落としみ2・3実測図 (1/60)

## 土師質皿 (第126図、表11)

溝2、23層・29層、88層、90層などから出土した15点を図示した。口径8.2cm~14.4cm、器高1.1cm~2.7cm、底径5.7cm~8.8cmの大きさである。

## 瓦類 (第124図、表11)

落込み2・3などから出土した軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、椽瓦を図示した。軒丸瓦の瓦当文様は巴文である。

## 物差し (第123図108、表11)

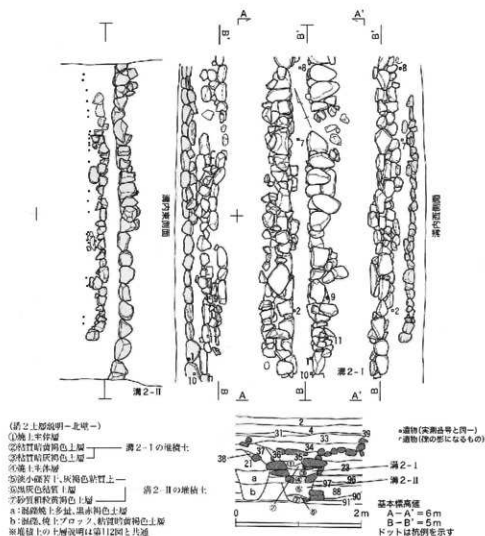
骨角製で約7cmが残る。1口幅3mmを刻んでいる。

## 金属製品 (第123図88~107、表11)

煙管の吸口、雁首10点、毛抜き、小柄4点、小型の鍵などが出土した。

## 銭貨 (第127・128図、表12)

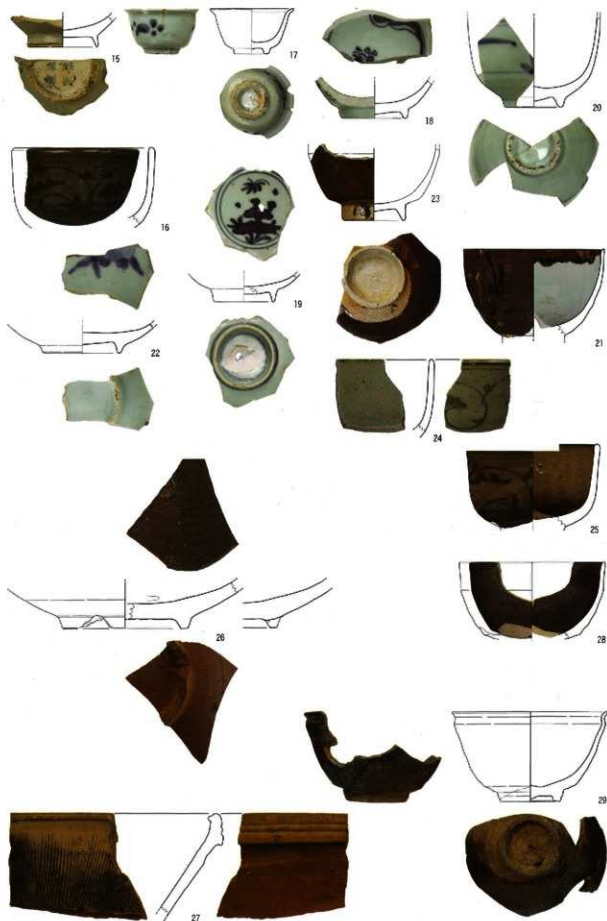
「古寛永銭」61点、「新寛永銭」6点、新旧不明の「寛永通寶」2点の他、中国銭「皇宋通寶」・「紹聖通寶」・「元豊通寶」・「元祐通寶」などが7点、計76点の拓影を掲載した。



第115図 27調査区溝2 (I・II) 実測図 (1/60)



第116图 27调查区出土遗物 (1/3)



第117図 27調査区出土遺物 (1/3)



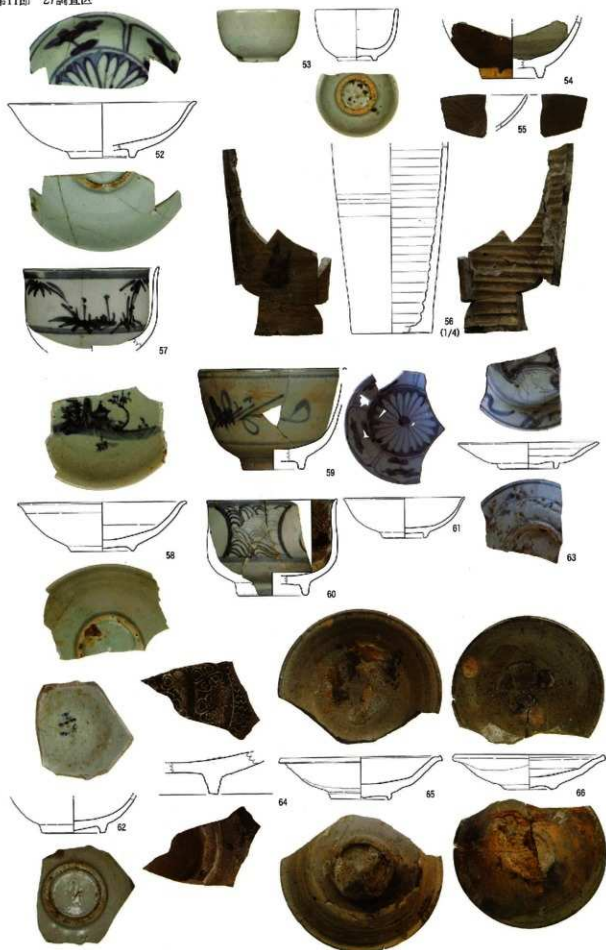


第118図 27調査区出土遺物 (1/3) ※38は1/4



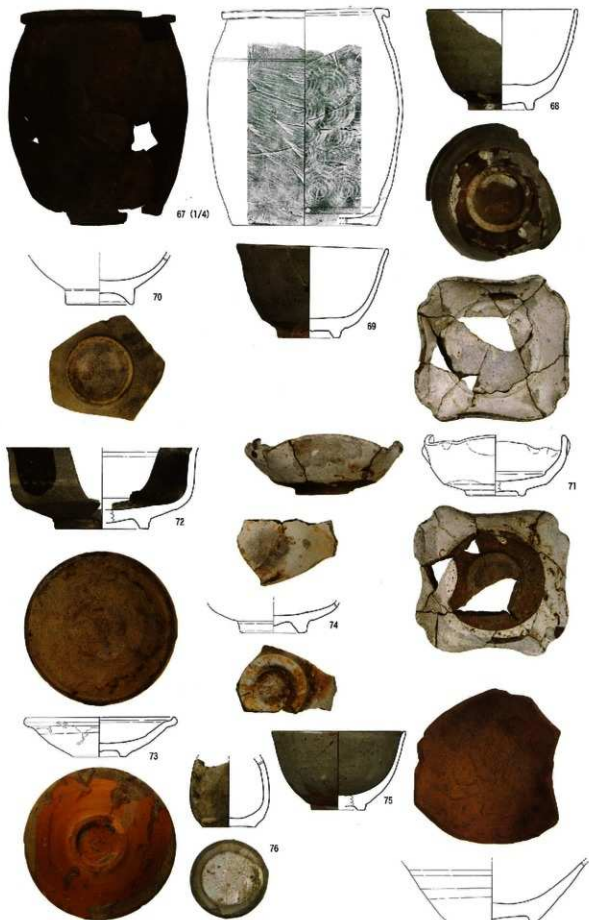
第119図 27調査区出土物 (1/3)

第11節 27調査区



第120図 27調査区出土遺物 (1/3)

※56は1/4



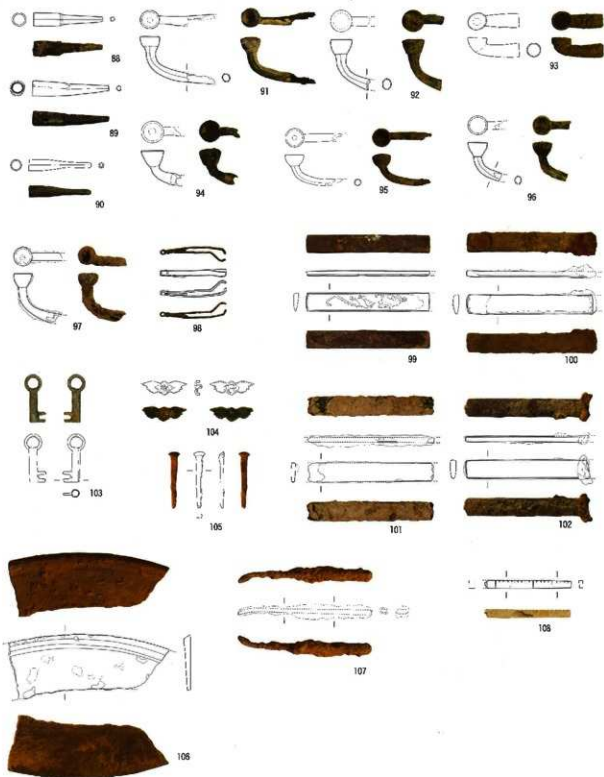
第121図 27調査区出土遺物 (1/3)

※67・77は1/4

77 (1/4)



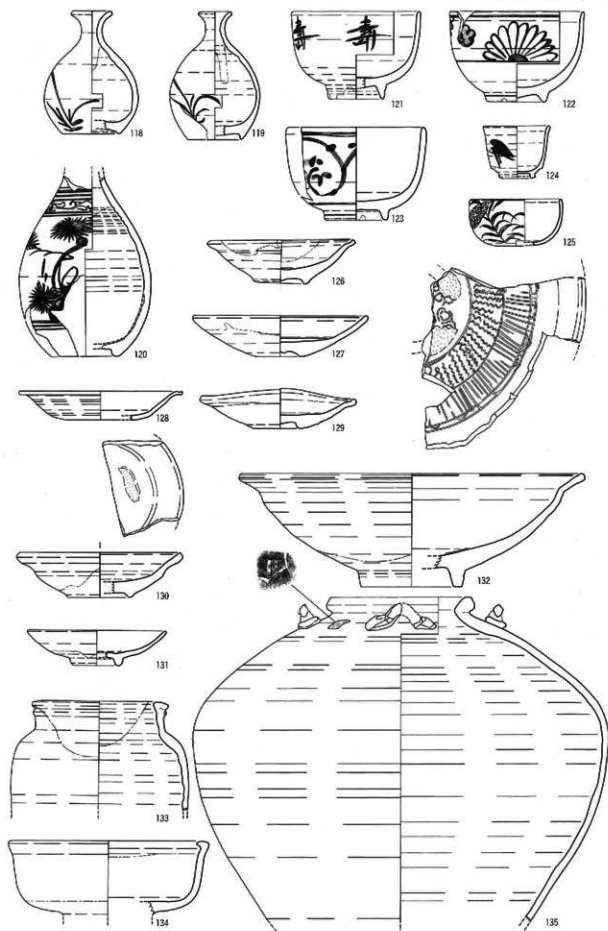
第122図 27調査区出土遺物 (1/3)



第123図 27調査区出土遺物 (1/3)

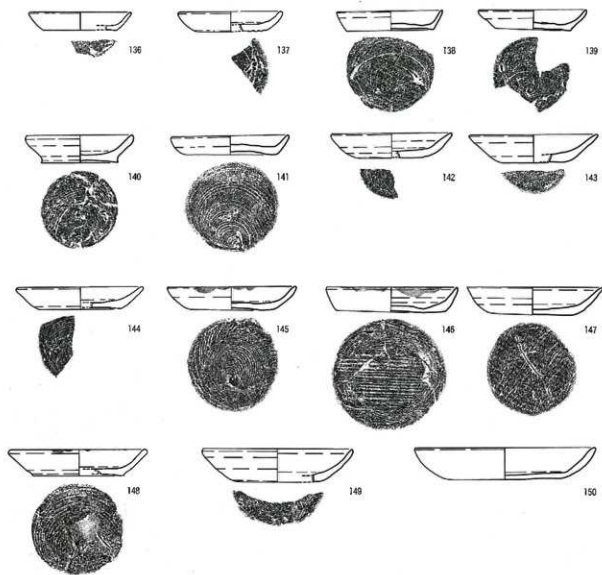


第124图 27调查区出土遗物 (1/4)

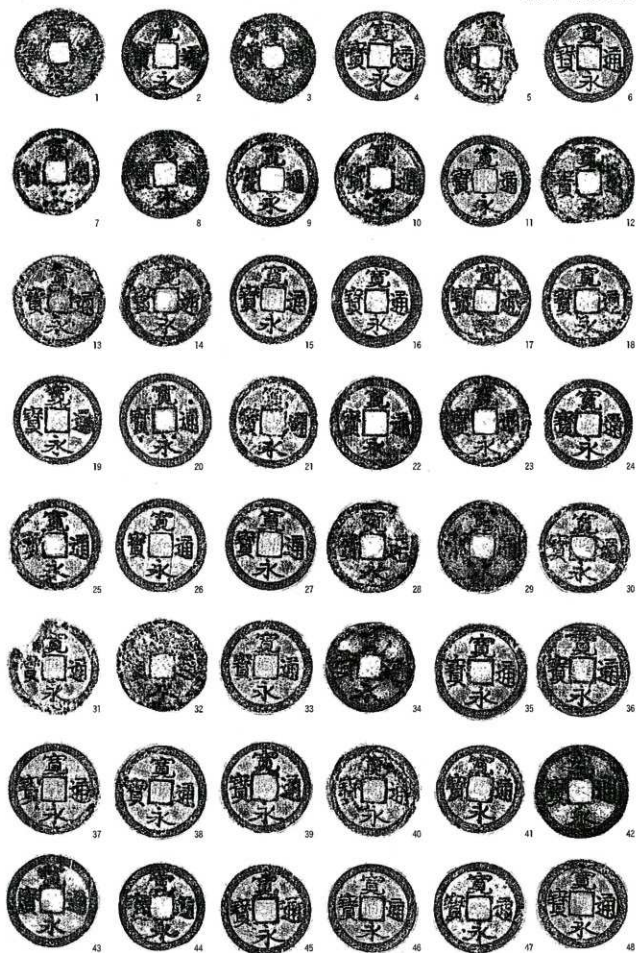


第125図 27調査区出土遺物 (1/3)



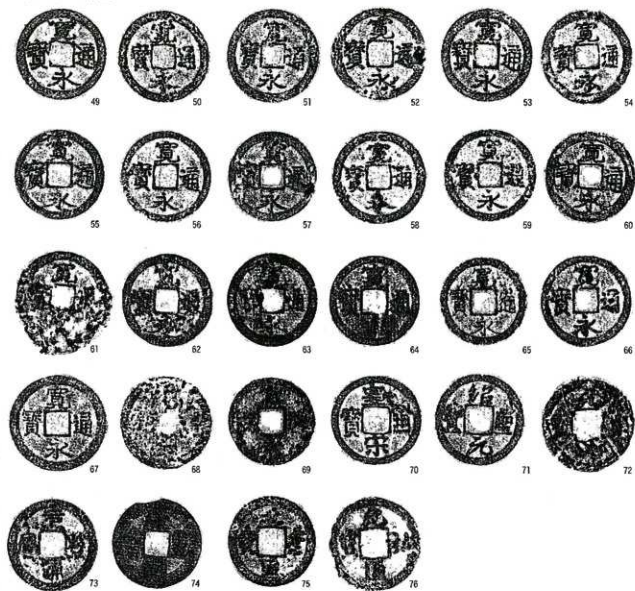


第126図 27調査区出土遺物 (1/3)



第127図 27調査区出土銭貨(原寸)

第11節 27調査区



第128図 27調査区出土銭貨 (原寸)

表11 27調査区出土遺物観察表

調査区番号	遺物番号	グロッソ名	遺物名	出土土層	器種	大きさ (cm)			推定用途	特徴	残存状況	時期	備考		
						口径	高さ	口径/高さ/底径							
116	1		焼2		磁器	染付碗				艶面	半部1/3割れ	1630～1640			
	2		焼2		磁器	磁器鉢?	7.4			艶面	外周鉄軸、内面透明釉	口縁	1630～1630		
	3		焼2		磁器	磁器鉢?				艶面		口縁	1630～1630		
	4		焼2		磁器	磁器小仔	6.4			艶面		口縁			
	5		焼2		磁器	磁器碗				艶面	外周鉄軸、内面透明釉	口縁	1630～1630		
	6		焼2		磁器	磁器碗			4.8	艶面		底～1/3	1630～1630		
	7		焼2		陶器				8	艶面	赤切				
	8		焼2		陶器	皿	13.3	2.9	4.2	艶面	砂目	口縁欠損	1630～1630		
	9		焼2		陶器	碗	11	7	4.6	艶面	内面透明釉	1/3割れ	1630～1630		
	10		焼2		陶器	碗	11.8	7.7	4.4	艶面	天目形	口縁欠損	17 C前半		
	11		焼2		陶器	皿	13			艶面	筒形	口縁	1630～1630		
	12		焼2		陶器	皿				艶面	筒形	口縁	1630～1630		
	13		焼2		陶器	鉢			8.6	艶面	片前口ワタ形	底面			
116	14	4 G 5	焼4		A層焼土	磁器	蓋	9.1	3.7	艶面	鉄軸、砂目、底面土層赤	表面	1610～1630?		
117	15		焼4		B層中	磁器	染付碗			艶面	'大形成化年製'	鉄軸	17 C末～18 C前半		
	16	4 G 5	焼4		南越焼	陶器	碗	10.7		艶面	胴筋全付	口～1/4	18 C前半		
	17	2 G 5	焼5		東上下70a-611b	磁器	染付小杯	9.6	3.6	2.7	艶面		口縁1/2		
	18	2 G 5	焼5		東上下70a-82a	磁器	染付碗		5	艶面		底面3/4	17 C後半?		
	19	2 G 5	焼5		東上下70a-611b	磁器	染付碗		4.7	艶面		底面	17 C後半?		
	20		焼5		東上下70a-611b	磁器	染付碗		4.6	艶面		1/2割れ	1630～1630		
	21	2 G 5	焼5		東上下70a-611b	磁器	碗	11		艶面	外周鉄軸、内面透明釉	口～1/3	1630～1630		
	22	1 G 5	焼5		東上下70a-611b	磁器	染付碗		6	艶面		底面1/3			
	23	1 G 5	焼5		東上下70a-100a	陶器	碗		4.7	艶面	内外周鉄軸	底～1/4			
	24	3 G 5	焼5		東上下70a-13b	陶器	碗			艶面	筒筋全付	口～1/2割れ	18 C後半?		
	25	3 G 5	焼5		焼土土層	陶器	碗	10		艶面	筒筋全付	口～1/4	18 C後半?		
	26	2 G	焼5		東上下70a-70a	陶器	鉢		10	艶面	筒形	底面	17 C		
	27	1 G 5	焼5		東上下70a-82a	陶器	鉢			艶面	筒形	口～1/2割れ	17 C末～18 C		
	28	5 G		10	～20層間の埋蔵層	陶器	陶器	11.4		艶面	内外周鉄軸	13割			
117	29			13		陶器	碗	12.1	7	4.9	艶面	天目形	1/3割れ	17 C前半?	
118	30	11 G 5		23	中層	磁器	染付小杯	6.5	4	2.8	艶面	二重天目文?	17 C前半?		
	31	11G～12G		23	中層	磁器	染付碗	12	3.6	4.6	艶面	口縁～底文?	1630～1650		
	32	11 G 5		23	上面	磁器	染付碗		7.5	艶面		底面	1630～1630(?)		
	33	7 G 5		23	下層	磁器	染付碗	12.4	2.3	4.6	艶面		1/4割れ	1630～1630(?)	
	34	11 G 5		23	上面	磁器	皿	13		艶面		口縁	1630～1630(?)		
	35	北層部		23	上層	磁器	皿	13	3.4	5	艶面	二次製鉄	1/2割れ	1630～1650	
	36	11 G 5		23	上面	陶器	底面?			艶面		口縁			
	37	11 G 5		23	中層	陶器	鉢	10.7	9.9	8.6	艶面	染付文、土馬子	口縁欠損		
118	38	12 G		23	中層	陶器	底面	8.4	27.3	-	伊賀	天目、伊賀	1/4割れ	17 C初葉	
119	39	14 G 5		23	下層	陶器	鉢	8.7	4.5	4.6	艶面	外周鉄軸	2/3割れ	17 C前半?	
	40	9 G		23	～21・22層中	陶器	碗	1.2	7.8	3.5	艶面	鉄軸部赤切	口縁欠損	17 C前半?	
	41	7 G 末		23		陶器	皿	22.4	2.4	11.4	艶面		1/2割れ	17 C前半?	
	42	11 G 5		29		磁器	染付碗	10	6.8	5.1	艶面	鉄軸、染付部分付	1/4割れ	1630～1650	
	43	14 G 5		29	90	陶器	陶器鉢?			艶面		口縁欠損			
	44	14		29		磁器	皿	13.3	2.9	4.5					
	45	5		47	焼土土層	陶器	蓋	7.3							
	46	4 G 5		52		磁器	碗	10.6	7.2	4.5	艶面	鉄軸、染付部分付	2/3割れ	1630～1650	
	47	7			焼土土層	陶器	鉢								
	48	10 G 5		54		陶器	皿	9.4	3.3		艶面	赤切、高取、土層赤	二重天目文?	17 C初葉?	
	49	4 G 5		70	73	陶器	皿	15.2	3.1	3.1	艶面	砂付、六徳鉄軸	欠損	1630～1630	
	50	6 G		73		磁器	染付碗	10.2	7.4	4.6	艶面		1/4割れ	1610～1630	
119	51	6 G		73		磁器	染付碗	12.1			艶面		口～1/3	17 C前半?	
120	52	6 G		73		磁器	染付碗	14.5	3.3	5.1	艶面		1/3割れ	1610～1630?	

第11節 27調査区

区画番号	建物番号	グロブ名	通称名	出上層	階層	大きさ (m)			竣工 年次	特徴	残存状況	時期	備考
						1階	2階	3階					
129	33	6 G		23	白磁 小作	6.4	4	3		塋墓		2/3 解体	
34	6 G			23	陶器 碑			5		塋墓	外石瓦葺、内面漆喰	墓へ隣 1/3	1630 ~ 1650
35		南蔵	55		陶器 碑								
36	12 G		88		2階 瓦入?	19.3+	8.4		?			半部1/3	
37	16 G		89		2階 漆喰 漆喰	10.7				塋墓		1/2 解体	17 C 前半
50	7 G		29		2階 漆喰	13.2	3.5	5		塋墓		1/3 解体	17 C 前半
50	16 G①		90		2階 漆喰	11.5	7.8	4.8		塋墓		1/2 解体	
50	8 G		90	上層	2階 漆喰	10.3	7.4	5.4		塋墓	二次建設	1/4 解体	17 C 初~後半
61	6		90		2階 漆喰	13.9	4.6	5.1					
62	8 G		90	上層	2階 漆喰			3		塋墓		全部	17 C 初~後半
63	10		90		青磁 塋	17	3.2	7.2					
64	8 G		90	上層	陶器 塋					塋墓	金銀文	全部	17 C 初~後半
65	9 G		90		陶器 塋	12.7	3.4	4.8		塋墓	砂目、溝縁直	白磁・埋文	1600 ~ 1630
120	66	9 G		90	陶器 塋	11.7	2.8	4.2		塋墓		白磁 埋文	1600 ~ 1630
121	67	13		90	陶器 塋	17.6	22.9	15.4	20.7				
68	13 G②		90		陶器 塋	11.8	7.7	3.1		塋墓	赤漆	白磁大平文	17 C 前期~後半
69	14 G②		90		陶器 塋	11.9	7.2	4.8		塋墓		白磁(埋文)	17 C 前期~後半
70	9 G②③		90		陶器 塋			5.2		塋墓	漆喰塋	全部	17 C 前半
71	10 G②④		90		2階 塋	11.8	1.7	1.8		塋墓	彫刻 埋文 二次建設	(白)埋文	1500 ~ 1600
72	16 G①		90		陶器 瓦葺?	15	6.9	7.4		塋墓	漆喰	1/2 解体	
73	4 G		90		陶器 塋	11.7	3.1	4.2		塋墓	漆喰、漆喰塋、二次建設	全部	1600 ~ 1630
74	4 G		91		陶器 高瀬?			5.3		塋墓		全部	17 C 前半
75	10 G②④		91		陶器 塋	10.5	6.1	4.2		塋墓		1/4 解体	1300 ~ 1610
76	4 G		91		陶器 塋			4.2	6.3	塋墓		全部	17 C 前半
121	77	8 G		91	陶器 塋			9.5		塋墓		全部	17 C 前半
122	78	8 G		92	組屋 漆喰	11.6	7+			塋墓	外周 1階 文	1/4 解体	1610 ~ 1630
79	8 G		92		高瀬 塋			4.8		塋墓		全部	
80	8 G		92		高瀬 塋	12.8	5.6	5.1		塋墓	漆喰 漆喰	全部	1600 ~ 1630
81	3 G	サブトレ			組屋 漆喰	11.2	7.1	4.2		塋墓		白磁 埋文	17 C 中~後半
82	2 G	サブトレ			青磁 塋			4		塋墓	漆喰色塋	全部	
83	6 G④			A層	陶器 小作	6	3.6	2.5		塋墓		白磁大平文	1630 ~ 1650
84					磁器 小作	5.4	3	2.4					
85	3				陶器 塋			4.7					
86	2			51 1階~3階迄	磁器 花瓶		7.1	5.4	8.4				
122	87	1 G④	惣門		陶器 塋	12.8	3.3	4.2		塋墓	溝縁直、漆目	1/4 解体	1600 ~ 1630
区画番号	建物番号	グロブ名	通称名	出上層	階層	大きさ (m)			竣工 年次	特徴	残存状況	時期	備考
						1階	2階	3階					
123	88		調査区		一階	横管	3.0	1.4	5.1			開口	
89			調査区		一階	横管	6.1	1.2	5.1			開口	
90			調査区		一階	横管	5	0.9	4.1			開口	
91	3				一階	横管	8+	4.5	3.1			扉直列	
92	6				一階	横管	3+	1.7	10+			扉直列	
93	8				一階	横管	1.1	1.5	6			扉直列	
94			調査区		一階	横管	3.1	1.8	6			扉直列	
95			調査区		一階	横管	5+	1.5	5+			扉直列	
96	13				一階	横管	2+	1.5	4.5+			扉直列	
97	4				一階	横管	3.8+	1.4	9+			扉直列	
98	2				一階	横管	3.5	0.4	0.2	2.1		扉直列	
99				共同色粘土	一階	横管	9.8	1.4	0.4	20.8		扉直列	
100	10		91		一階	横管	10.3	1.5	0.4	20.1		扉直列	
101	5		47		一階	横管	10+	1.5	0.2	24+		扉直列	
102	14		29		一階	横管	10+	1.5	0.2	20+		扉直列	

調査番号	農地番号	グランド名	遊戯名	粘土土層	肥料	大きさ (mm)				指定 用途	特徴	発見状況	時期	備考
						長さ (mm)	最大幅	厚さ	重量 (g)					
102	101	9		23		糞	3.8	1.8	0.6	3.7			発見品	
	104	11		23		鶏糞(白飯)	3.6	1.2	0.6	3.3			発見品	
	105	14		88		釘	4.5	0.9	0.7	3.5			発見品	
	106	3		90	23~90	鉄製品				100	-			
	107	15		86		鉄製品		0.7	0.5	13	-			
121	108		調査区		一括	物差し	7.4	0.7	0.5					
124	109	3	森込み3			軒瓦瓦	15.3						瓦葺部	
	110	4	森込み2		一括	軒瓦瓦	13.4		2.5				1/2	
	111		森込み3		一括	軒瓦瓦							1/2	
	112					軒瓦瓦							1/2	
	113		森込み3		一括	軒瓦瓦	3.0	2.8					2/3	
	114	2			東端粘土	軒瓦瓦	4.4	2.4					1/4	
	115	8		57		瓦瓦			1.9				軒瓦部	
	116	10		57		瓦瓦	28	13.8	2				1/2	
124	117	10		57		瓦瓦			1.8				2/3	
調査番号	農地番号	グランド名	遊戯名	粘土土層	肥料	大きさ (mm)				指定 用途	特徴	発見状況	時期	備考
						長さ (mm)	最大幅	厚さ	重量 (g)					
125	118	3・7 G		23		磁器 磁石小瓶	3.3	9.7	4.6		磁器	下田川遊戯場、八坂野の吹砂	1/4 磁体	1690 ~ 1650
	119	7 G		23		磁器 磁石小瓶	2.7	10.1	4.4		磁器	下田川遊戯場、八坂野の吹砂	1/4 磁体	1690 ~ 1650
	120	14・10 G		23		磁器 染付瓶			6.9		磁器	新、古の吹砂、有田川吹砂	1/2 磁体	1630 ~ 1640
	121	9・10 G		23		磁器 染付瓶	10.2	4.3	4.8					
	122	14 G		50・92		磁器 染付瓶	10.7	7.2	4.9		磁器		1/2 磁体	1630 ~ 1640
	123	3 G		90	惣地蔵	磁器 染付瓶	11	7.4	3				吹砂吹砂	遺物
124			調査区		一括	磁器 小片	5.4	4.1						
125	8 G			64	陶器	小瓶	7.4		4.2				1/4 磁体	遺物
126	7 G				陶器	杯	11.8	3.7	3				1/4 磁体	遺物
127	11 G			23		陶器	鉢	14	3.5		磁器	磁器	1/4 磁体	1610 ~ 1640
128	2 G				粘土層	陶器	81			4.1	磁器	八坂野の吹砂、砂屋ツム	1/5 磁体	1610 ~
129	4 G				粘土層	陶器	皿	12	3.1	2.2			一俵吹砂	遺物
130	12 G			70		陶器	皿	13.7	3.5	12.5	磁器	砂屋ツム	1/4 磁体	1600 ~ 1620
131	2 G		森込み3		磁器	磁石強磁石	11	2.3	8		磁器	八坂野の吹砂		
132	2・5・10 G		3・4・90		陶器	火皿	27.5	8.9			磁器	二島子、砂屋ツム	1/4 磁体	17 C 中 ~ 後半
133	9・10・10 G		25・27		陶器	瓦片瓶	8.6				1・1・1	1・1・1	上平吹	17 C
134	12 G		23	上面	陶器	火入れ	16		8		磁器	磁石を? 磁器	17 C 中 ~ 末	
125	131	7 ~ 12		25・34・40		陶器	四角皿	11.2			磁器		1/3 磁体	17 C、明後平
126	136	8 G		48	土師器	小瓶	5.2	1.4	3.7				1/5 磁体	
	137	5 G		21・27		土師器	小瓶	8.4	1.8	6.9			1/5 磁体	
	138		森端粘土	表土下	52 ~ 70	土師器	小瓶	2.5	1.1	6			1/2 磁体	
	139	4 G	森端粘土			土師器	小瓶	8.6	1.7	6			1/2 磁体	
	140	11 G		86		土師器	小瓶	8.6	2.2	7.3			1/4 磁体	
	141		調査区		表土上層	土師器	小瓶	9.5	1.6	3			2/3 磁体	
	142	13 G		90	下層	土師器	小瓶	9.7	1.9	3.6			1/4 磁体	
	143	3 G	森端粘土			土師器	小瓶	10.2	2.2	8.6			1/4 磁体	
	144	14 G		29		土師器	小瓶	10.2	1.5	7			1/4 磁体	
	145		調査区		表土上層	土師器	小瓶	10.3	1.9	8.8			1/4 磁体	
	146	16 G		8・9		土師器	小瓶	10.5	2.1	7.2			1/2 磁体	
	147	13 G		90		土師器	小瓶	10.8	2.2	7.2			1/4 磁体	
	148	10 G		90	表土	土師器	小瓶	11.1	2.1	7.2			1/4 磁体	
	149	12 G		23		土師器	小瓶	12	2.7	9.2			1/4 磁体	
126	150	10・12 G		25・27・86		土師器	小瓶	14.4	2.5				1/2 磁体	

表12 27調査区出土銭貨観察表

図版 番号	番号	グリッド 名	遺構名	出土上層		種類	大きさ		備考
							径 (mm)	重量 (g)	
127	1	14 G		21		古寛永	2.3	3.8	
	2	10 G		23	上面	古寛永	2.3	3.2	
	3	10 G		23	上面	古寛永	2.3	3.3	
	4	10 G		23		古寛永	2.4	3.9	
	5	11 G		23		古寛永	2.4	2.7	一部欠損
	6	11 G		23		古寛永	2.4	4	
	7	12 G		23	上面	古寛永	2.3	2.7	
	8	12 G		23	上面	古寛永	2.3	2.7	
	9	12 G		23	上面	古寛永	2.3	3.1	
	10	12 G		23		古寛永	2.4	2.9	
	11	13 G		23		古寛永	2.4	3.4	
	12	14 G		23	下層	古寛永	2.5	3.2	一部欠損
	13	16 G		23	下層	古寛永	2.4	2.6	
	14	4 G		23		古寛永	2.4	3.3	
	15	4 G		23		古寛永	2.4	2.3	
	16	6 G		23		古寛永	2.4	2.8	
	17	5 G	溝4	48	礎下	古寛永	2.4	2.1	
	18	4 G		52		古寛永	2.4	2.7	
	19	10 G		60		古寛永	2.4	3.6	
	20	4 G		70		古寛永	2.4	3.5	
	21	6 G		73		古寛永	2.4	2.4	
	22	12 G		88		古寛永	2.4	3	
	23	12 G		88		古寛永	2.4	2.9	
	24	12 G		88		古寛永	2.4	2.7	
	25	15 G		88		古寛永	2.4	2.9	
	26	7 G		89		古寛永	2.4	3.3	
	27	7 G		89		古寛永	2.4	3.3	
	28	9 G		89		古寛永	2.4	3.2	
	29	16 G		90		古寛永	2.3	3.7	
	30	16 G		90		古寛永	2.4	3.1	
	31	3 G		90	整地	古寛永	2.4	2.9	
	32	5 G		90		古寛永	2.4	2.7	
	33	15 G		91		古寛永	2.4	2.2	
	34	16 G		91		古寛永	2.4	3.7	
	35	5 G		92		古寛永	2.5	3.5	
	36	4 G		70・73		古寛永	2.4	4.2	
	37	4 G		70・73		古寛永	2.4	4	
	38	4 G		70・73		古寛永	2.4	4.2	
	39	4 G		70・73		古寛永	2.4	4.1	
	40	4 G		70・73		古寛永	2.4	2.8	
	41	4 G		70・73		古寛永	2.4	2.6	
	42		調査区	一括		古寛永	2.4	3.3	
	43		東端焼土	表土		古寛永	2.4	2.9	
	44	1 G	東端焼土	表土下	0.8～1 m	古寛永	2.3	3.3	
127	45	2 G		壁面		古寛永	2.4	2.9	

図版 番号	番号	グリッド 名	造構名	出上上層		種類	大きさ		備考
							径 (cm)	重量 (g)	
127	46	10 G				古寛永	2.4	4.1	
	47	10 G				古寛永	2.4	2.4	
127	48	12 G				古寛永	2.4	3.5	
128	49	13 G				古寛永	2.4	4.4	
	50	14 G				古寛永	2.4	3.5	
	51	16 G				古寛永	2.4	2.4	
	52	4 G	サブトレ		一括	古寛永	2.4	3.9	
	53	4 G	サブトレ		一括	古寛永	2.4	3.5	
	54	4 G			焼上層①	古寛永	2.4	3.1	
	55		調査区		一括	古寛永	2.4	4.5	
	56		調査区		一括	古寛永	2.4	3	
	57		調査区		一括	古寛永	2.4	3.7	
	58		東端焼土			古寛永	2.4	2.7	
	59		溝2			古寛永	2.4	3.1	
	60		溝2		上面一括	古寛永	2.4	3.7	
	61	14 G		23	下層	古寛永?	2.5	3.5	
	62	13 G		88	上層	新寛永	2.4	2.7	
	63	6 G①		70・73		新寛永	2.4	3	
	64	12 G			一括	新寛永	2.3	2.8	
	65	1 G		表上下	0.22m	新寛永	2.3	2.7	
	66	13 G				新寛永	2.4	4.1	
	67					新寛永	2.5	4	
	68	5 G		90		寛永通寶	2.4	3	
	69					寛永通寶	2.3	2.4	
	70	4 G		70		皇宋通寶	2.4	2.6	北宋銭初鋳1038年
	71	4 G		70		紹聖元寶	2.4	3.1	北宋銭初鋳1094年
	72	6 G		92		「・・・寶」	2.4	2.5	一部欠損
	73	9 G		23		元豊通寶	2.4	2.1	一部欠損
	74	6 G		76		元豊通寶	2.3	2.7	北宋銭
	75	7 G			一括	元豊通寶	2.3	3.5	北宋銭
128	76	16 G		89		元祐通寶	2.4	2.4	





27調査区遠景  
(南方向から)



全景  
(西方向から)



溝1  
(南方向から)



溝2-II  
(南方向から)



溝4  
(南方向から)



調査西壁土層状態  
(東方向から)

## 第12節 28調査区

## 1 調査の概要 (第129図、写真12)

28調査区は谷町の作屋・志保屋坂と町屋の道路との交差点に接する南西地区にあたる。絵図ではこの交差点から西へ5筆分が調査対象地であった。東から2筆が丸屋平兵衛、西に向かって和嶋屋(志)助、桶屋為右工門、山田屋兵助の屋敷と考えられる。このうち最も東部に位置する丸屋平兵衛屋敷については、地下に埋設物等があるため調査対象地から除外した。溝は各屋敷の区画する境界施設といえる。溝3が2筆の丸屋の間、溝1が丸屋と和嶋屋の間、溝4が和嶋屋と桶屋の間にそれぞれ設けられている。

調査の結果、溝や建物基礎部分の一部などを確認した。特に溝は石組みを伴う排水溝である。出土遺物として、主に17世紀初頭頃から19世紀間の陶磁器類、漆器、銭貨などがある。

## 2 基本層序 (第130～133図)

土層の堆積状態は、現道路面から谷の自然堆積上の21層まで約1.2m、35層(シルト)まで約1.6m、地山露層まで約2mで達する。27調査区と同様に自然堆積土の上には火災痕跡と造成土が互層となる人為的な整地がみられた。焼土面は各時期の生活面といえるものであり、3面を確認した。焼土(生活)面の呼称は27調査区と共通とする。土層は51層に区分できた。

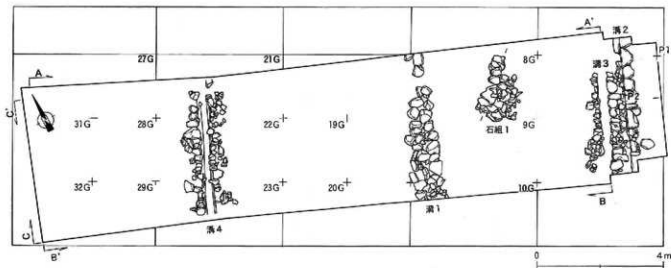
北辺の土層断面A-A' (第130図)の東半部では、上層から1-①～⑧層が現在の造成土である。焼土面(生活面)は4面から6面までを確認した。生活面は焼土・炭化物主体層の上に、主に地山の混雑黄褐色土を用いた整地層の上面である。4面(6層)は地表下0.5mの焼土面としては最上層となる。砂礫の造成土、焼土・炭灰層下が5面(12層上面の被熱硬化面)となる。6面は砂礫の造成土(29層)上面の被熱硬化面である。

29層以下の堆積土は32層が自然堆積土で、33層は薄い砂層で冠水痕跡を示す。34層は砂粒を含む黒灰色土層、21層・35層は灰色シルト層、36層は礫層となる。

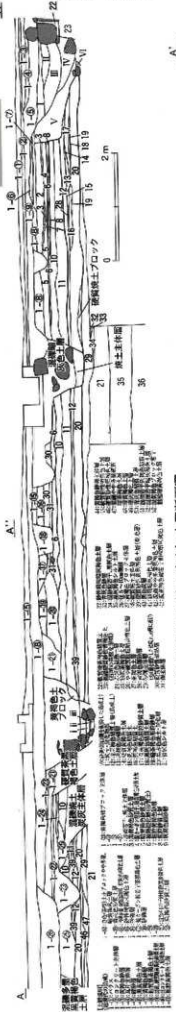
南辺の上層断面B-B' (第132図)では、西部では北辺と同様の土層を確認できるが、溝4の位置には溝4と構築時期が前後する2条の溝がほぼ同一位置の上下に造られており、地表には現在のコンクリート製排水溝がある。溝以東の上層状態は北辺よりも大きな改変の痕跡を示している。

西辺の土層断面C-C' (第133図)では、層中に石組などもあるが、頻りに造成された痕跡がみられる。

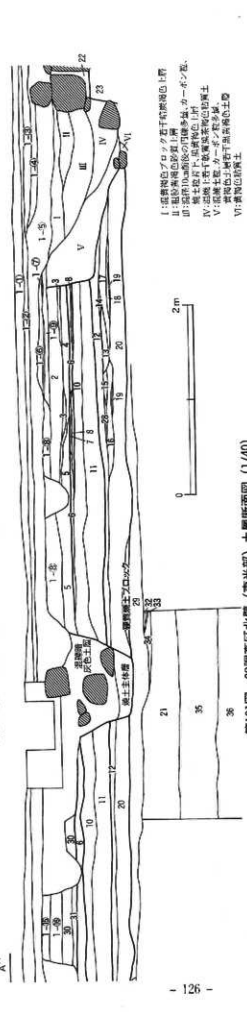
各面・各層の時期は、5面は下層の20層・20'層から17世紀前半の陶磁器類が出土しており、ほぼ17世紀中頃、6面は直下の29層の出土遺物から17世紀前半と考えられる。また、6面下の29層直下の21層から1600年前後の陶磁器類が出土している。27調査区との対応関係に矛盾はない。



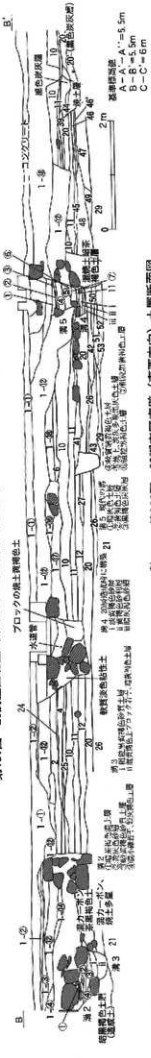
第129図 28調査区遺構配置図 (1/120)



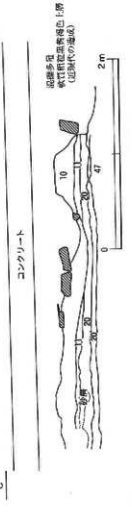
第130図 28調査区北壁 (東西方向) 土層断面図



第131図 28調査区北壁 (東半部) 土層断面図 (1/40)



第132図 28調査区西壁 (東西方向) 土層断面図



第133図 28調査区西壁 (南北方向) 土層断面図 (1/40)

I: 灰褐色土  
II: 灰褐色土  
III: 灰褐色土  
IV: 灰褐色土  
V: 灰褐色土  
VI: 灰褐色土

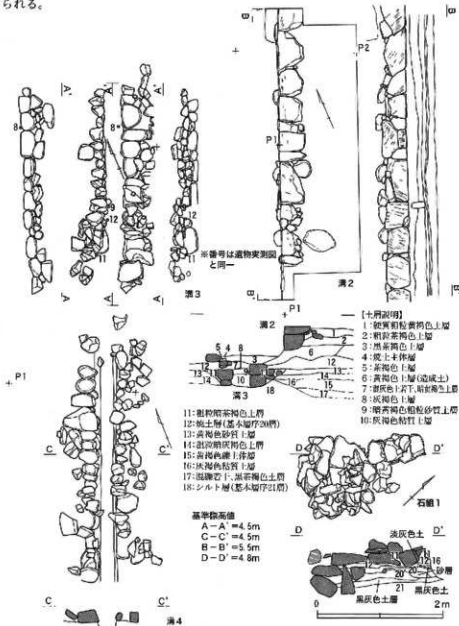
A-A' = 5.5m  
B-B' = 5.5m  
C-C' = 6m

3 検出遺構 (第129、134~136図)

溝1 (第129図)は、調査区東部中央寄りの13Gと16G間に位置する。南北に延びる溝である。主軸方向は北21度東を指向するが、町屋の街路に対して直交する。確認面での規模は長さ約5m、幅1m、深さは土層断面でみると、0.8m程度である。6層を切って構築されており、4面以降に造られている。

溝2 (第134図)は、調査区東辺部に位置する。街路に対して直交する石組の溝と考えられるが、対岸の西側には石組が残っていない。検出面での規模は長さ約5mである。土層断面では、石組直上に現在の造成上が0.45m盛られていた。石組は4面を平坦に加した0.2m~0.71mの石材が用いられていた。石組の空隙には小礫や白色の粘土が充填されていた。石組上面には被熱痕跡が顕著であった。構築状況や土層堆積状態から近世末以降の構築と考えられる。この溝の底面に溝3が位置する。

溝3 (第134図)は、溝2下に造られた石組の溝である。主軸方向は北22度東を指向し、町屋の街路に対して直交する。確認面での規模は長3.6m、土層断面での幅0.3m、深さ0.4mである。石組は2~3段残っており、基底部に0.3mの川原石を用いている。時期は溝2に切られているため、構築面を確認できないが、出土遺物から17世紀後半と考えられる。



第134図 28調査区溝2・3・4、石組1実測図 (1/60)

溝4 (第134図) 調査区東部25Gと28C間に位置する石組の溝である。主軸方向は北25度東を指向し、町屋の街路に対して直交する。確認面での規模は長さ4.3m、幅は0.35m、深さ0.3mである。石組は径0.2m程度の礎が主に残っていた。土層断面A-A'の所見から、4面以降の構築と考えられる。出土遺物は17世紀後半を示している。溝1~4は絵図上の屋敷境界と一致する。

その他の遺構 (第134、135、136図) として、石組や配石などを確認した。10層面では石組2・3、建物基礎と考えられる石組1~3が調査区西部にみられた。12・20・26層面では石組4~6、石列などを確認した。46層面では石組7・8を確認した。最下層の21層面では枕列が確認できたが、上層から打ち込まれたものと考えられる。

#### 4 出土遺物 (第137図~第147図、表13、14)

28調査区から出土した遺物はコンテナ60箱であった。このうち磁器50点、陶器31点、土師質土器・土製品6点、漆器1点、瓦類2点、金属製品13点、銭貨47点の計160点を図示した。

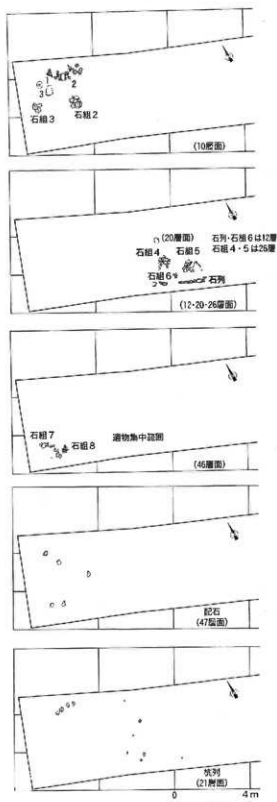
#### 陶磁器類 (第137~142図、第144~146図、表13)

石組1の周辺から白磁小杯・染付碗・皿などが出土した。1~3は1600年~1630年の製作年代である。5の青花皿は16世紀後半であり、古い磁器も混じる。溝3では8の染付碗、10・12の17世紀後半の陶器が出土している。溝4では14の白磁、1の陶器碗など17世紀後半の陶磁器類が出土している。

各層の陶磁器類についてみると、4而下層の11層から26の陶器皿、99の陶器刷毛皿など17世紀後半の陶器類が出土した。5面を形成する12層から1630年~1650年を示す29の染付小杯がみられるなど、概ね1630年~1650年の陶磁器類が主体である。21層 (シルト層) から1590年~1600年を示す46の朝鮮曹津藍灰釉瓶が出土しており注目される。同層上層から出土した45の染付碗は1630年~1650年と新しい。上部からの混入の可能性を考えておきたい。23層出土の90はベトナム産院師長脚蓋である。

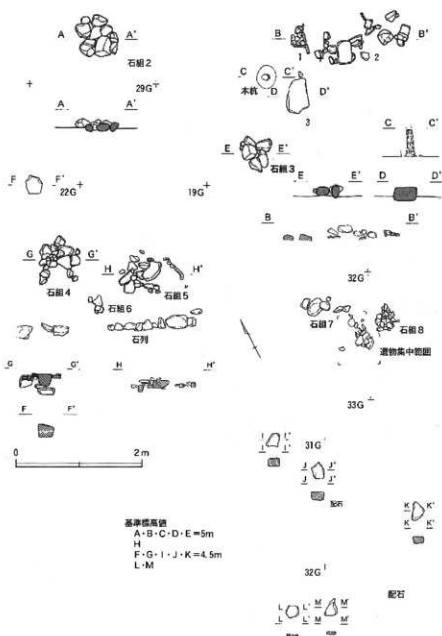
56は漆器碗であるが、漆膜の分析から当時の普及品と確認された。(註1)

(註1) 大分県立歴史博物館主幹研究員山田拓伸氏の教示による。



第135図 28調査区各層の遺構 (1/200)

土師質鉢・小皿3点(第146図96~98)、瓦類2点(第143図71・72)を図示した。金属製品(第143図58~70)には煙管の腫首8点、刀装具、鉞と思われる銅製品などがある。銭貨(第147図1~47、表14)は、「古寛永銭」36点、「新寛永銭」7点の他、中国銭「政和通寶」・「洪武通寶」・「元豊通寶」4点が出土した。



第136図 28調査区選構(石組2~8、配石)実測図(1/60)

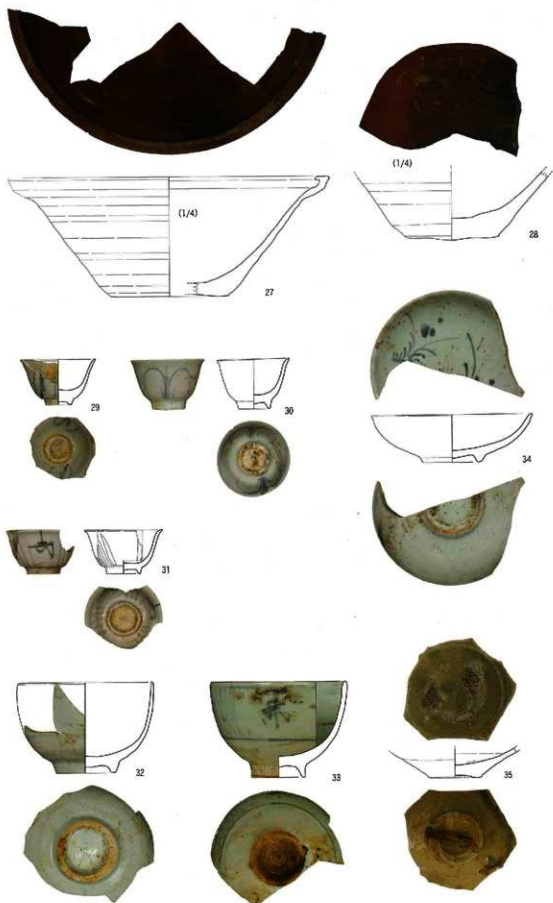


第137圖 28調査区出土遺物 (1/3)



第138図 28調査区出土遺物 (1/3)





第139図 28調査区出土遺物 (1/3)

※27・28は1/4



第140図 28調査区出土遺物 (1/3)

※42・43は1/4

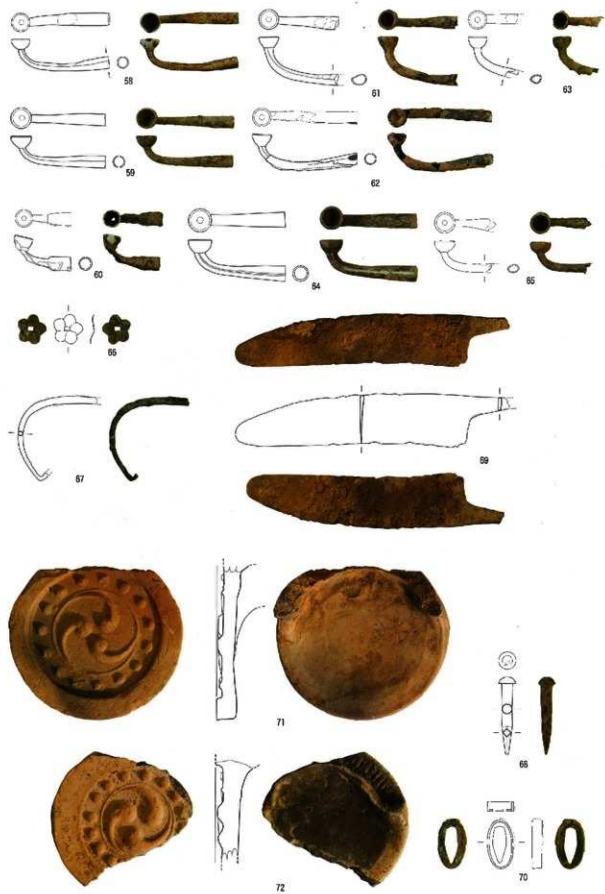


第141図 28調査区出土遺物 (1/3) ※44は1/4、51は1/6

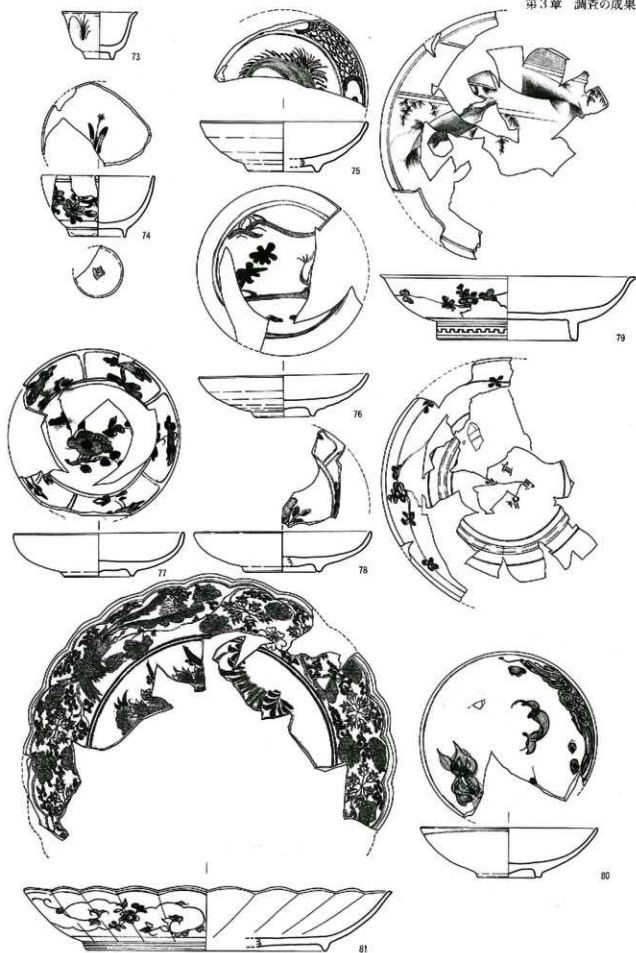


第142図 28調査区出土遺物 (1/3)

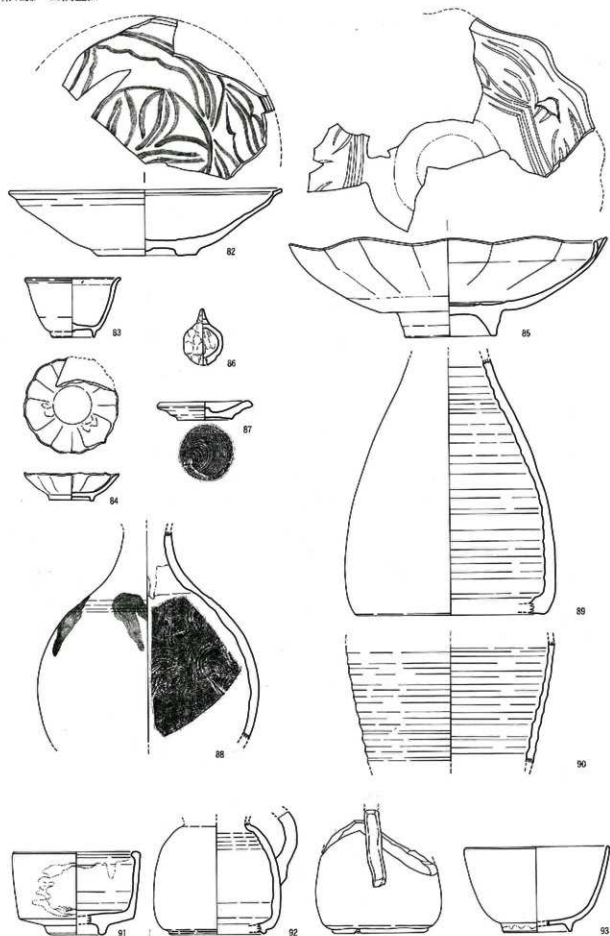
※56は1/2、55は1/6



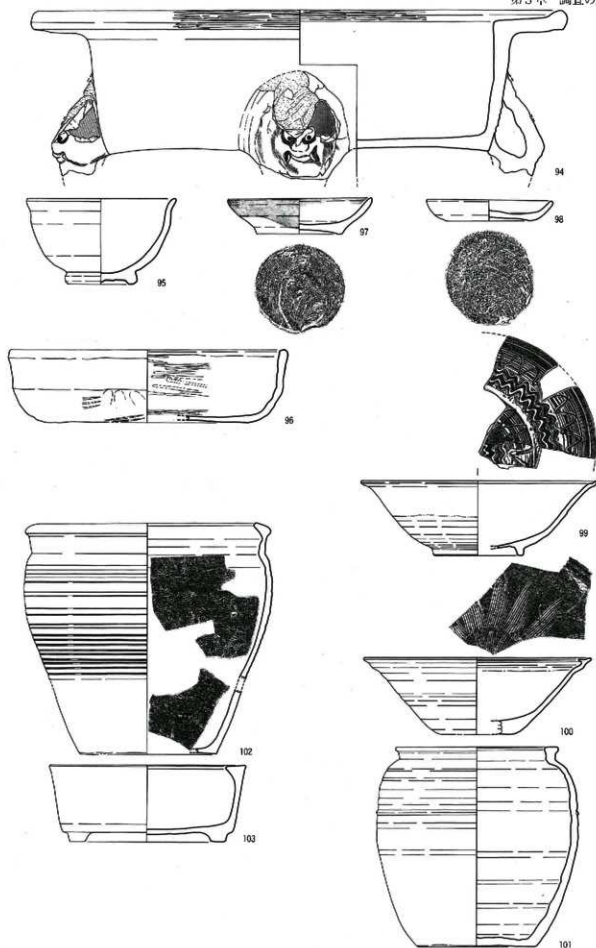
第143図 28調査区出土遺物 (1/3)



第144図 28調査区出土遺物 (1/3)

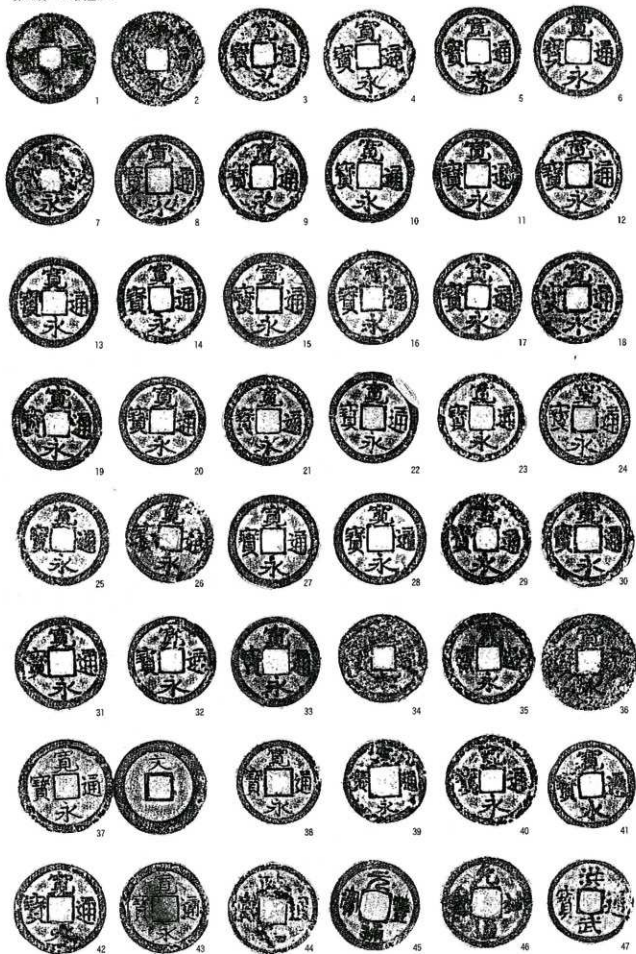


第145図 28調査区出土物 (1/3)



第146図 28調査区出土遺物 (1/3)





第147圖 28調査区出土銭貨（原寸）

表13 28調査区出土遺物観察表

調査 番号	遺物 番号	ツリノド名	発掘名	出土土層	形状		入きさ (cm)			測定 手段	持法	保存状	時期	備考		
					口径	底径	口深	器高	底深						器口径	
137	1	石皿1		覆土	白磁	小杯			2.2		彫削	焼文	底~体部下半	1630~1650年		
	2	石皿1		覆土	磁器	染付碗			4.6		彫削	内面彫削	底面1/3	1630~1650年		
	3	石皿1	2		磁器	染付碗			4.6		彫削		体部下半	1630~1650年		
	4	石皿1		覆土	磁器	碗					彫削		底面1/5			
	5	石皿1	2		磁器	青花碗	12.8	2.6	7.8		中国		底面1/3	16C後半		
	6	神2 神2	21		磁器	染付碗	12.9	3	4.3		彫削		1/2胴体	1630~1650年		
	7				磁器	染付碗							口縁部1/4	17C後半		
	8				磁器	染付碗	10.1	7.3	4.6		彫削		1/3胴体	17C後半		
	9				青磁	碗			1.0+	6.6		彫削	底面			
	10				陶器	鉢	19.3					彫削	二彩子	口縁部1/4	17C後半	
	11				陶器	碗			4.2		彫削	白浮 砂目	底面1/2	1600~1620年		
	12				陶器	碗	11.7	7.2	5.1		彫削		1/2胴体	17C中~後半		
	13				磁器	染付碗			8		彫削	焼文1回	底面1/3	16C		
	14				白磁	白磁	12.1				彫削		口縁1/5	17C後半		
138	15			青磁	碗	11.4	4.7	4.2		彫削		口縁1/6		18と接合		
139	16			陶器	碗			3.6		彫削		底面	17C後半			
17	22			白磁	碗	12	6.2	4.7		彫削						
18			基層	磁器	碗	10.6				彫削		口縁部1/4	17C中~後半			
19			基層	陶器	内輪灰浴土			6.7		彫削	外内彫削、内面彫削	底面1/3				
20				陶器	人形			5.5		2.3	彫削	内面彫削、人形心押入人形	1/4(完形)	1630~1650年		
21	14 G		1	陶器	染付小杯	6.1	3.7	2.1		彫削	焼文、染付、赤銅、黒銅2回	1/2胴体	1630~1650年			
22	16 G	11		陶器	染付碗	8.8	5.1	4.1		彫削		1/3胴体	16C			
23	8~9 G	11		陶器	香炉	6.3	6.6	6		彫削	内面竹葉文、丸、山、竹	45度(彫削)		遺付		
24	13 G	11		磁器	染付碗	12.4	3.2	3		彫削		1/3胴体	1630~1650年			
25	13 G	11		磁器	染付碗					彫削		1/4胴体				
26	23 G	11	上層	陶器	皿			5.1		彫削	外周縁部彫削(漆土)	底面	17C後半			
138	27 8~9 G	11		陶器	鉢鉢	34	12.6	12.5				1/3胴体				
139	28 8~9 G	11		陶器	鉢鉢			10				底面				
29	12 G	12		陶器	染付小杯	5.9	3.5	2.1		彫削		1/2胴体	1630~1650年			
30	13 G	12		磁器	染付小杯	2.7	3.9	2.5		彫削		底面				
31	19 G	20		磁器	染付小杯	6	3.4	2.6		彫削	焼文	1/2胴体	1630~1650年			
32	13 G	20		磁器	染付碗	10.7	7	4.7		彫削		底~体部下半	1630~1650年			
33	19 G	20		磁器	染付碗	10.6	7.4	4.3		彫削		口~体部1/3	1630~1650年?			
34	8~12 G	20		磁器	染付碗	12.7	3.7	4.7		彫削		1/2胴体	1630~1650年			
35	5 G	30		陶器	皿			4.2		彫削	白浮 砂目	底面	1600~1630年			
139	36 13 G	30		陶器	染付碗	1.8	9.2	4.6	9.4	彫削	外周縁部	底面				
140	37 15 G	30		陶器	染付碗	8.2	4.3	4.4		彫削		1/4胴体				
38	20 陶器	30		磁器	染付碗	6.8	7.5	4.8		彫削		1/2胴体				
39	20 陶器	30		磁器	染付碗							内面彫削、外文	1/2胴体	1630~1650年?		
40	23 G	30		陶器	碗			3		彫削?	底面?					
41	19 G	30	上層	陶器	碗	15.2	6.4	6				1/4胴体	17C前半			
42	22 G	30	上層	陶器	片口	17.7						底面				
43	7~8 G	30		陶器	鉢	20.4						二彩子、染付口	1/5胴体	17C後半~17C前半?		
140	44 19 G	30	上層	陶器	皿							底面1/3				
141	45 3 G	21		陶器	染付碗	10.4						1/4胴体	1630~1650年			
46	20 G	21		陶器	碗	18.5+	8.3	11.2		彫削	内面彫削、外文	口縁文?	1520~1580			
47	31 G	28		陶器	鉢	12.9	3.3	3.8		彫削	消線文、砂目	1/2胴体	1600~1630年			
48	22 G	42		青磁	碗	19.6	7.5	4.3		彫削	赤銅	1/4胴体	1630~1650			
49	22 G	25(1) 42		磁器	染付碗	11.4	6.2	4.6		彫削		1/3胴体	1630~1650			
50	22 G	25(1) 42		陶器	碗	11.7	7.8	5.1		彫削		1/4胴体	17C後半			
51	22 G	11~42	遺札?	陶器	染付皿			11.7		彫削	山水文	底面	1630~1650			
52	24 G		遺札?	陶器	碗	13.2				彫削	消線文、砂目	1/4胴体	1600~1630年			
141	53 西平澤		一括	陶器	碗			4.9		彫削		内面彫削	底面			
142	54 29~32 G	25(1) 42	遺物観察	陶器	皿	12.8	2.9	4.4				消線文	1/4胴体			

第12節 28調査区

調査番号	遺物番号	グロッツ名	遺物名	出土土層	器種	大きさ (mm)				測定方法	測定場所	特徴	残存状況	時期	備考
						口径	器高	底径	器底径						
142	55	29・32 G	陶器内底	46	扁形	大皿	34.6	9.8	10.3				1枚の欠片		
	56					深鉢									
142	37	24 G		一括	磁器	磁鉢	6.6	5.1	6.3				『戦 40』	定形	近世期(10～20)
調査番号	遺物番号	グロッツ名	遺物名	出土土層	器種	大きさ (cm)				測定方法	測定場所	特徴	残存状況	時期	備考
						長さ (L)	最大径	厚さ	重量 (g)						
143	58	9		10		磁器	7.8	1.5	6.7						
	59	16				磁器	7.3	1.6	7.3						
	60	19		11		磁器	4.5	1.5	3.7						
	61	19		12		磁器	6.9+	1.7	10+						
	62	22		12		磁器	8+	1.5	9+						
	63	22		11		磁器	4.5+	1.5	4.5-						
	64	31		10		磁器	7.7	1.9	20.5						
	65		灰砂瓦器			磁器	4.8+	1.7	7+						
	66	29			陶土層	鎌倉瓦	2.3	2.2	0.08	1.2					
	67	28		11		陶器品									
	68	15		6		鉄釘	8.1	1.4	0.8	24.2					
	69	6		33		包丁	22-	4.1	0.3	85+					
	70	14		12		刀柄具	4	2.3	0.8	6.9					
	71	12		11		新瓦瓦									
143	72		瓦			新瓦瓦									
調査番号	遺物番号	グロッツ名	遺物名	出土土層	器種	大きさ (mm)				測定方法	測定場所	特徴	残存状況	時期	備考
						口径	器高	底径	器底径						
144	73	3・8・29		12・20		磁器	祭付小杯	6.4	2.4	4					
	74	12・1・9		11		磁器	祭付小杯	9.6	5.1	4.8					
	75			20		磁器	祭付小杯	13.2	3.9	5.8					
	76	12-14-18		12・15		磁器	祭付小杯	13.4	3.2	4.7					
	77	20-29-32		20-47-107		磁器	祭付小杯	13.4	3.4	5.4					
	78			20		磁器	祭付小杯	14	3.2	6					
	79	31・32		16・20		磁器	祭付小杯	12.2	5.5	11.9					
	80	16・28		20		磁器	祭付小杯	14	3.9	4.8					
144	81	16-17-18-20		11		磁器	祭付大皿	29.7	5	19					
145	82	20		11		磁器	青磁鉢	21	5.2	7.8					
	83	32		10		磁器	白磁鉢	7.4	4.7	3.3					
	84	13・14		10		磁器	白磁鉢	8	2.2	3.7					
	85	13・13 G		8・11		磁器	鉢	25	7.6	7.2					
	86	19		11		陶器	土師			4.5					
	87	28				陶器	小皿	7.4	1.2	3.6					
	88					陶器	蓋	7.6	1.4	4.4					
	89	19-12-20-21		11-15-28		陶器	瓶			15					
	90	5 G		23		陶器	長頸瓶								
	91	3 G			陶土層	陶器	段形鉢	10.2	6.5	4.2					
	92	30		11		陶器	水注			7.4					
145	93	31・32		20・102		陶器	鉢	11.2	6.6	3.4					
146	94	19-20-22 G		11		瓦瓦	火鉢								
	95	18・28		20・21		陶器	碗	11.8	6.7	5.8					
	96	3	遺土層		十層瓦	鉢	21.8	3.7	16						
	97	20		20		土師瓦	小皿	11.5	2.8	6.9					
	98	20		20	土層	土師瓦	小皿	10.1	1.7	6.9					
	99	15-17-20		11		陶器	ヘクメ蓋	36.8	11.8	14					
	100	21・25	遺土層	29		陶器	磁器鉢			35.6					
	101	8・9・10	土層	14・17		陶器	煎茶釜	26	31.5	18.8					
	102	9-22-30-32		20		陶器	煎茶釜								
146	103	9		11		土師瓦	角鉢	12.1							

表14 28調査区出土銭貨観察表

図版番号	番号	グリッド名	遺構名	出土上層		種類	大きさ		備考
							径 (cm)	重量 (g)	
147	1		調査区	10		古寛永	2.4	3.4	
	2	15 G		11		古寛永	2.4	3.7	
	3	15 G		11		古寛永	2.4	2.9	
	4	17 G		11		古寛永	2.4	3.5	
	5	17 G		11		古寛永	2.3	2.2	
	6	18 G		11		古寛永	2.4	3.1	
	7	18 G		11		古寛永	2.4	3.6	
	8	19 G		11	上層	古寛永	2.4	3.3	
	9	19 G		11	上層	古寛永	2.3	2.6	
	10	31 G		11		古寛永	2.4	3.1	
	11	12 G		12		古寛永	2.4	3	
	12	12 G		12		古寛永	2.3	5.1	
	13	12 G		12		古寛永	2.4	2.5	
	14	12 G		12		古寛永	2.4	3.2	
	15	18 G		12		古寛永	2.4	2.8	
	16	5 G		18		古寛永	2.4	2.9	
	17	15 G		20		古寛永	2.3	4.5	
	18	19 G		20	下層	古寛永	2.4	2.5	
	19	31 G		20	上層	古寛永	2.4	3.5	
	20	9 G		20		古寛永	2.3	2.7	
	21	9 G		20		古寛永	2.3	3.3	
	22		遺構①	20		古寛永	2.4	2.5	
	23		遺構①	20		古寛永	2.3	2.1	
	24	28 G		39		古寛永	2.4	4.1	
	25	11 G		88		古寛永	2.3	2.4	
	26	32 G		102		古寛永	2.3	2.7	
	27	18 G	サブトレ			古寛永	2.4	3	
	28	18 G	サブトレ			古寛永	2.4	3.5	
	29	22 G			一括	古寛永	2.5	2.3	
	30	26 G	遺構			古寛永	2.5	3.6	
	31	29・30 G	サブトレ			古寛永	2.4	3.4	
	32		遺構①			古寛永	2.3	2.8	
	33		調査区		一括	古寛永	2.4	2.8	
	34	16 G		11	上層	古寛永?	2.3	2.3	
	35	12 G		12		古寛永?	2.4	3	
	36	29 G			焼土層	古寛永?	2.5	3.9	
	37	26 G				新寛永	2.5	3.1	文銭
	38	21 G		6		新寛永	2.3	2.4	
	39	13 G		8		新寛永	2.2	2.6	
	40	30 G		10		新寛永	2.4	3.2	
	41	9 G		11		新寛永	2.3	3.2	
	42	6 G		17		新寛永	2.4	3.7	
	43	30 G			焼土層	新寛永	2.4	3.5	
	44	17 G		11		政和通寶	2.4	2.9	北宋銭初鑄1111年
	45	31 G		12		元豊通寶	2.4	3.2	北宋銭初鑄1078年
	46	32 G		107		元豊通寶	2.4	2.7	北宋銭初鑄1086年
147	47	19 G		11	下層	洪武通寶	2.2	4.3	明初鑄 1368年



28調査区遠景  
(東上方向から)



溝1全景  
(北方向から)



溝2全景  
(南方向から)



溝3全景  
(南方向から)



溝4全景  
(南方向から)



溝3遺物出土状態  
(南方向から)

## 第13節 29調査区

## 1 調査の概要 (第148図、写真13)

29調査区は谷町の新屋・志保屋敷と町屋の道路との交差点に接する南東地区にあたる。絵図ではこの交差点から西へ5筆目から2筆目が調査対象地であった。2筆は東から山里屋兵助、油屋丈吉の屋敷にあたる。山屋屋敷については、28調査区の西部に当たるが、遺構配置の確認と西端部下層が未調査のため、その部分を調査対象とした。各屋敷の境は、溝4が桶屋為右エ門と山里屋兵助屋敷との境、溝3が山里屋兵助と油屋丈吉の屋敷との境を区画する溝と推定される。

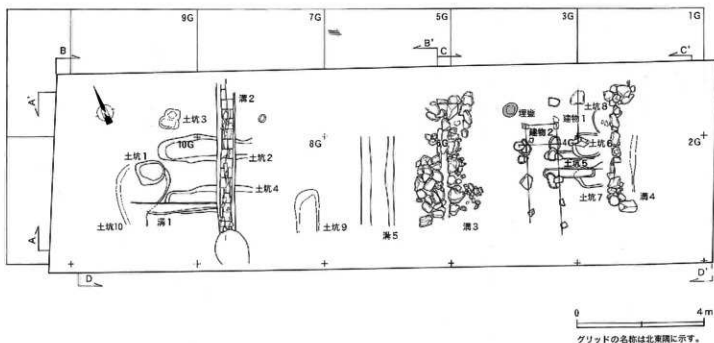
調査の結果、溝、土坑や建物基礎部分の一部などを確認した。特に区画となる溝は石組みを伴う排水溝であった。

出土遺物として、主に17世紀初頭頃から18世紀後半の陶磁器類、金属製品、銭貨などがある。

## 2 基本層序 (第149～153図)

土層の堆積状態は、現道路面から谷の自然堆積土(シルト層)まで約1.8mで達するが、シルト層の堆積土は火災痕跡と造成土を交互に積み重ねた人為的な整地を示していた。焼土面は各時期の生活面といえるものであり、8面を確認した。

西辺部の土層断面A-A' (第149図)では、1～24層を観察できた。上層から1-①・②の2層が現在の造成上である。焼土面(生活面)は上から1面～8面までを確認した。生活面は焼土・炭化物主体層の上に、主に地山の混雑黄褐色土を用いた整地層の上面である。1面(2層上面)は焼土層(3層)の上に堆積する硬化砂層で北端部付近に若干残る。2面は造成土(5層)の上面で被熱変質している。北半部に残る。3面(12層)は造成土(7層)上面の砂層である。4面は焼土層(14層)上面の硬化面である。5面は造成土(19層)の上層(18層)である。6面は造成土(22層)上の炭化物層(20層)である。7面は造成土(23層)上面の被熱硬化面である。8面は最下層の造成土(24層)上面の被熱硬化面である。3面～8面は北半部が大きく改変され、南端部付近に残る。



第148図 29調査区遺構配置図 (1/120)

北辺部の上層は東西で大きく異なるため、十層断面図を西半部B-B' (第150、152図)と東半部C-C' (第151図)に分けて作成した。中央部から東半部にかけて複数の掘込み、造成の痕跡がみられる。

南辺部D-D'では、西端部でA-A'と共通し、4面～8面を確認できた。中央付近では、7層を掘削する造成がみられ、東半部では9層(シルト層)に及ぶ大きな変化が顕著であった。

各面・各層の時期は、3面が直下の7層出土遺物から18世紀後半、4面は直下の14層出土遺物から18世紀前半、5面が17世紀前半以降、7面は直下の23層の出土遺物から17世紀中頃と考えられる。また、9面から1600年前後の陶磁器類が出土している。7面が27調査区の5面と対応し、シルト層の遺物は17世紀初頭頃と同様であった。

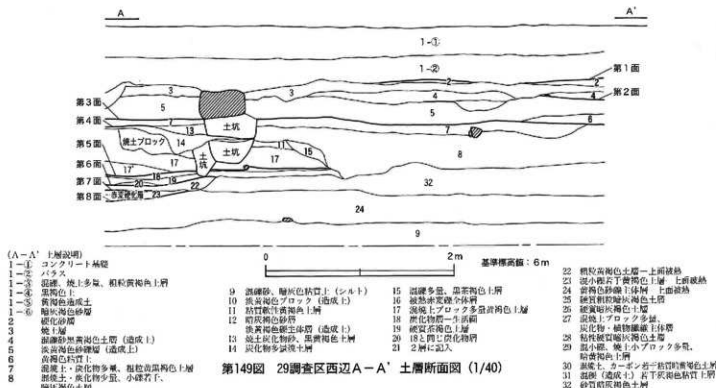
### 3 検出遺構 (第148、154～159図)

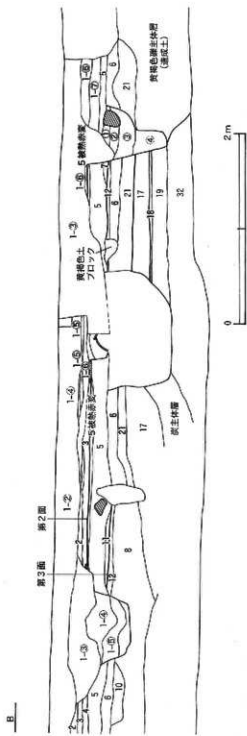
溝1 (第154図)は、調査区西部のほぼ10Gに位置する。東西に延びる溝である。主軸方向は北88度西を指向し、町屋の街路と平行する。確認面での規模は長さ2.5m、幅0.2m～0.3m、深さ0.1m程度である。土坑4を切って作られている。

溝2 (第155図)は、調査区西部の8Gと10G間に位置する。主軸方向は北20度東を指向し、街路に対して直交する溝である。構築方法に特徴がある。溝掘形に平瓦を並べ底面とし、これを挟むように両側面から瓦を合わせて被覆している。底面・被覆瓦が断面で三角形をなす。掘形規模は確認長3.4m、幅0.4m～0.45m、深さ0.15m～0.2mである。北辺の十層断面B-B'では、2面を切って構築されており、近世末・近代への遺構と考えられる。

溝3 (第156図)は6Gに位置する。5面下に構築されている。主軸方向は北22度東を指向し、街路に対して直交する石組の溝である。検出面での規模は長さ約4m、幅1.5mの範囲に石材の広がりが見られる。溝は幅0.2m、深さ0.2m程度を確認できる。北辺の十層断面B-B'では、溝3に対応する位置には近代以降の面から掘り込まれた溝があり、南辺ではやはり現地地表からの溝がみられる。溝が位置を変えずに作り替えられた結果といえる。溝の時期は近代以降と考えられる。

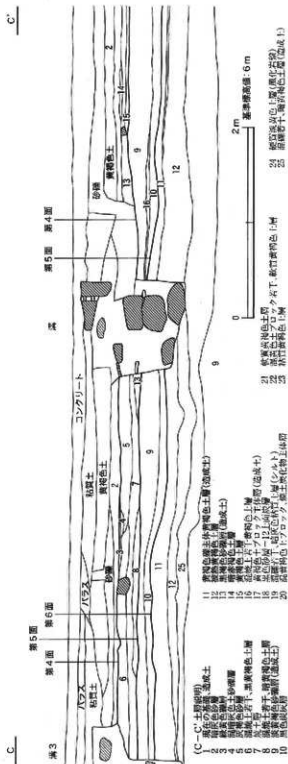
溝4 (第157図)調査区東部の2Gと4G間に位置する。南北に延びる溝である。主軸方向は北22度東を指向し、町屋の街路に対して直交する。石組をもった遺存状態はよくない。確認面での規模は長さ6m程度であるが両端部は不明瞭である。また、東側の石組は欠失している。溝は北辺の土層断面C-C'東部では、現道路面の下から掘り込んでいるが、平面図で示した石組はその底面付近に残る。現在の排水溝は下位の溝の位置を踏襲して設置されている。





(1) 珪質土  
(2) 黄褐色土  
(3) 黄褐色土  
(4) 黄褐色土  
(5) 黄褐色土  
(6) 黄褐色土  
(7) 黄褐色土  
(8) 黄褐色土  
(9) 黄褐色土  
(10) 黄褐色土  
(11) 黄褐色土  
(12) 黄褐色土  
(13) 黄褐色土  
(14) 黄褐色土  
(15) 黄褐色土  
(16) 黄褐色土  
(17) 黄褐色土  
(18) 黄褐色土  
(19) 珪質土  
(20) 黄褐色土  
(21) 黄褐色腐植土層 (腐成土)

第150図 29調査区北辺西部土層断面図 (1/40)



(C-C'土層断面)  
(1) 珪質土  
(2) 黄褐色土  
(3) 黄褐色土  
(4) 黄褐色土  
(5) 黄褐色土  
(6) 黄褐色土  
(7) 黄褐色土  
(8) 黄褐色土  
(9) 黄褐色土  
(10) 黄褐色土  
(11) コンクリート  
(12) 黄褐色土  
(13) 黄褐色土  
(14) 黄褐色土  
(15) 黄褐色土  
(16) 黄褐色土  
(17) 黄褐色土  
(18) 黄褐色土  
(19) 珪質土  
(20) 黄褐色土  
(21) 黄褐色腐植土層 (腐成土)

(22) 黄褐色土  
(23) 黄褐色土  
(24) 黄褐色土  
(25) 黄褐色土



建物1・2（第159図）は3G東南区、4G東平区に位置する。建物1は土層断面C-C'の5層面に礎石が配置され、南東隅と北、西に各1石の計3石が残っていた。建物2は1間×4間以上の建物と想定される。礎石は北辺2石と東辺4石、西辺3石が残る。礎石は16層面に配置されており、17世紀後半～18世紀前半の構築と考えられる。

埋溝（第158図）は3G南中央付近に位置する。掘形は底径0.3mの規模を確認できた。深さは0.1mほど残る。溝は底部から胴下部にかけて残っていた。掘形は土層断面C-C'の2層より上部からの掘り込まれているものと考えられる。

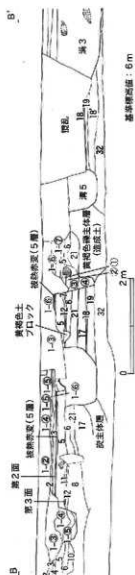
土坑（第154図）は1～10の10基を検出した。土坑1～4、9、10は7G～10Gに、土坑5～8は1・2・4Gに位置する。土坑1は径0.9mの円形を呈する。内部に礫が充填されており、建物基礎の可能性もあるが、周辺にその痕跡は発見されていない。土坑2・4は東西方向に長い楕円形を呈し、ともに確認長約3m、幅0.8m程で、2面より上層から掘り込まれている。土坑3は土層断面B-B'7層より上層から掘り込まれている。土坑5は1.5m×0.3mの長楕円形を呈す。掘込み面は土層断面C-C'13層上部と考えられる。土坑6・7・8は径0.7m程の円形を呈し、16層以上から掘り込まれている。

4 出土遺物（第160～164図、表15、16）

29調査区から出土した遺物はコンテナ52箱と多量であった。このうち磁器35点、陶器17点、土師質土器など6点、瓦類6点、金属製品17点、銭貨92点の計174点を図示した。

陶磁器類（第160～162図）

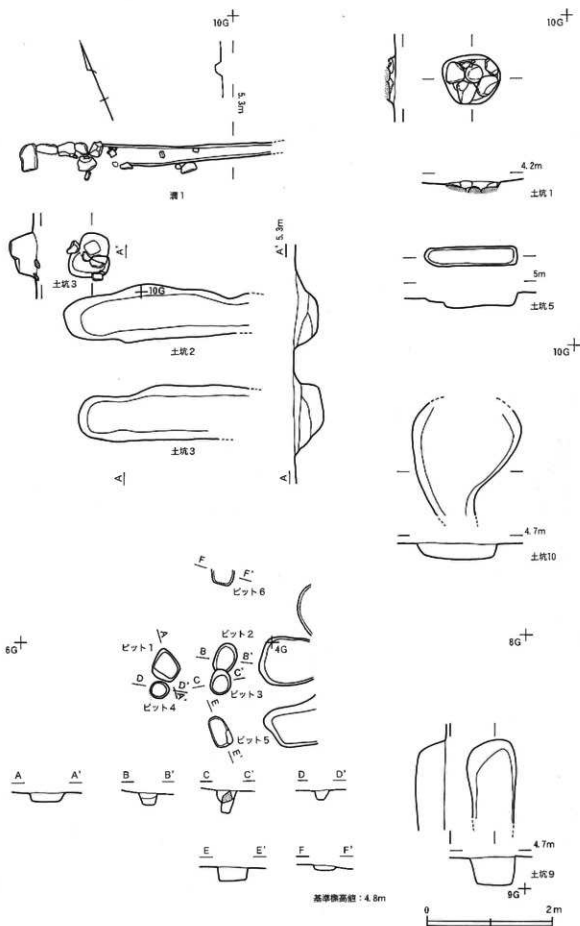
各層の出土陶磁器類は、3面直下の7層中に1630～1650年、1690～1740年及び18世紀後半の染付碗（9・10・11）がみられた。4面直下の14層には1630～1650年の染付小杯（22）、17世紀末～18世紀前半の陶器香炉（24）が出土している。5面下層の19層から1600～1630年の唐津が出土している。7層下層の23層から17世紀中頃の時期を示す染付碗、青花碗、陶器蓋（40、41、43）がみられる。ただ、46の陶器香炉は17世紀末～18世紀前半を示しており、上層からの混入の可能性もある。



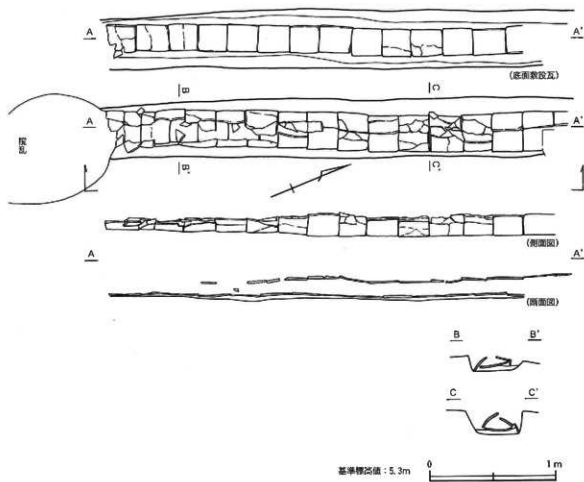
第152図 29調査区北辺西半部B-B'土層断面図 (1/80)



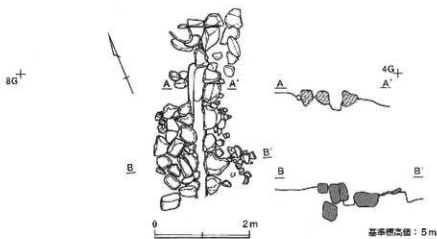
第153図 29調査区南辺D-D'土層断面図 (1/80)



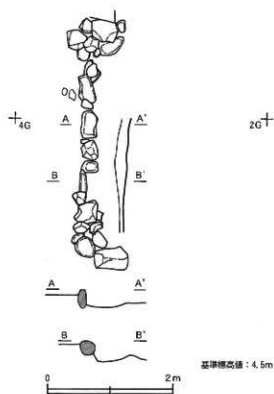
第154図 29調査区溝1、土坑1・2・3・5・9・10、ピット1～6実測図 (1/60)



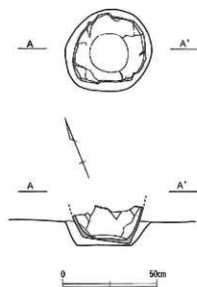
第155図 29調査区溝2実測図 (1/30)



第156図 29調査区溝3実測図 (1/80)



第157図 29調査区溝4実測図 (1/60)



第158図 29調査区埋壁実測図 (1/20)

9層のシルト上層から1580年～1640年代の青花小杯(13)、17世紀代の陶器碗が出土しており、28調査区のシルト層出土遺物の時期と矛盾はない。

#### 土師甕皿(第165図78～82)

9層・14層、17層から出土した5点を図示した。口径8.8cm～11.1cm、器高1.7cm～2.1cm、底径5.8cm～9.6cmの大きさである。

#### 瓦類(第164図66～71)

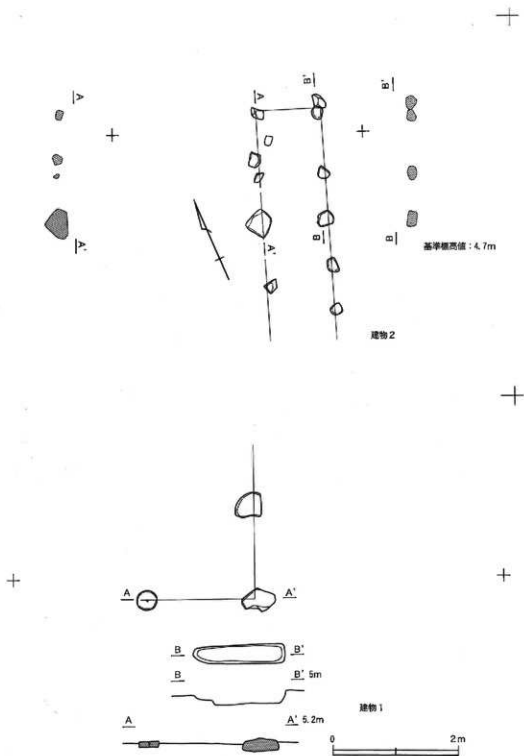
溝2の構築材である平瓦42点のうち、6点を図示した。長さ24.2cm～25.3cm、幅22cm前後、厚さ2cm程度である。溝の被覆に用いた瓦は相互に接する側縁部を打ち欠いて調整している。

#### 金属製品(第163図49～65)

煙管の破113点、雁首6点出土した。鏡(58)は完形品である。径9.7cm、厚さ0.5cm、重さ235gである。60～62は小柄と思われる。表面に線刻などの装飾がみられる。65は鐙と考えられる。重さ41.9gである。64は頭巻釘である。59は銅製品の表面の一部であろう。

#### 銭貨(第166図～第167図)

「古寛永銭」69点、「新寛永銭」17点、中間銭「泉宋通寶」1点、「永楽通寶」2点、「開元通寶」、「洪武通寶」、「紹聖元寶」各1点など計92点の拓影を掲載した。



第159図 29調査区建物1・2実測図 (1/60)



第160図 29調査区出土遺物 (1/3) ※4・17は1/4



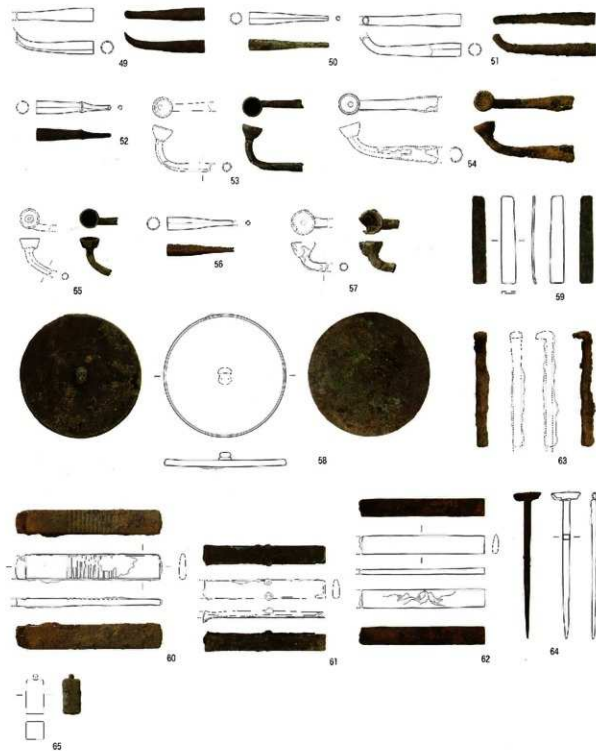
第161圖 29調査区出土遺物 (1/3)

※18は1/4

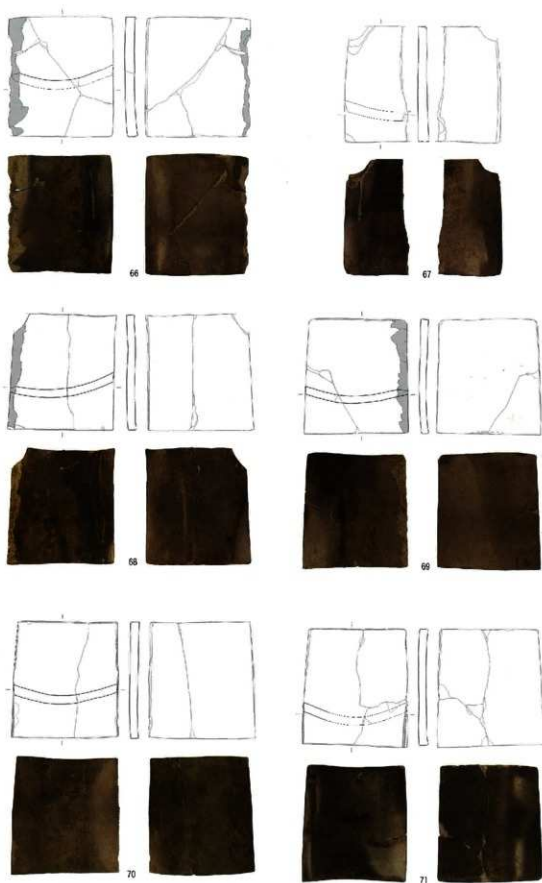


第162図 29調査区出土遺物 (1/3)

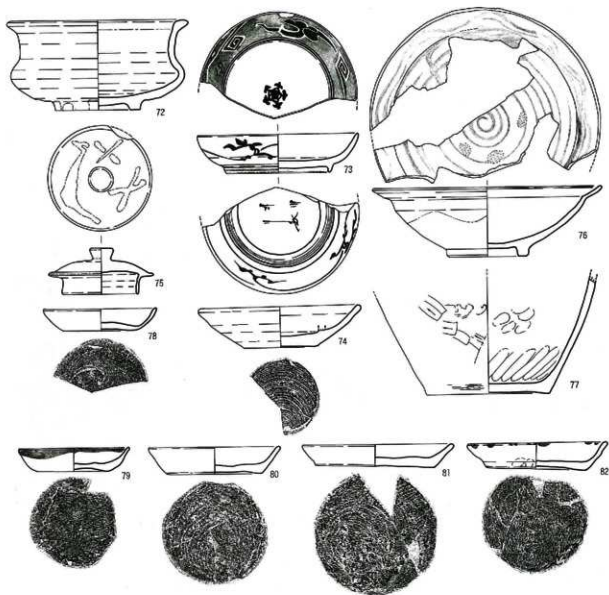




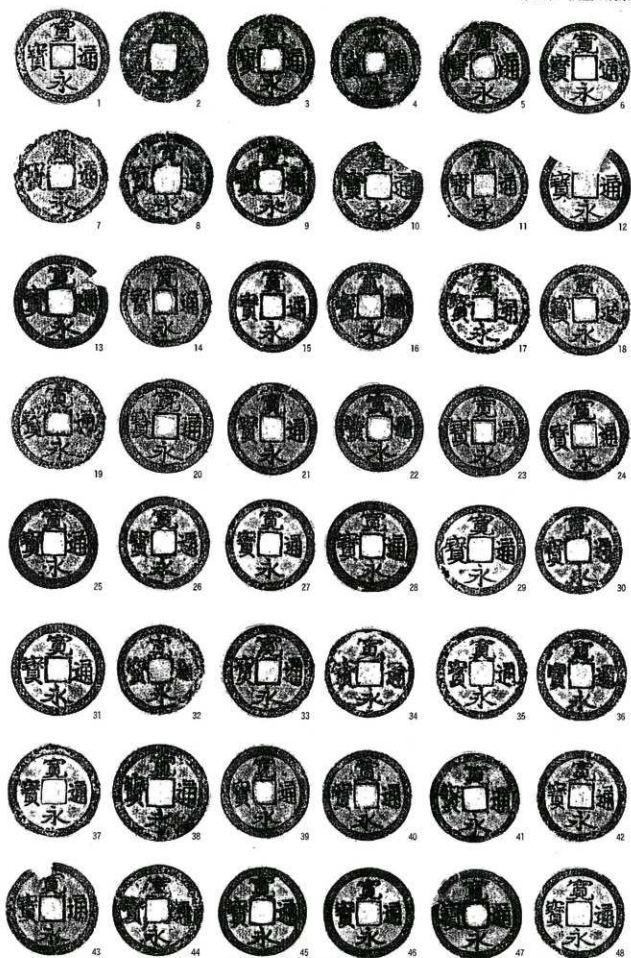
第163図 29調査区出土遺物 (1/3)



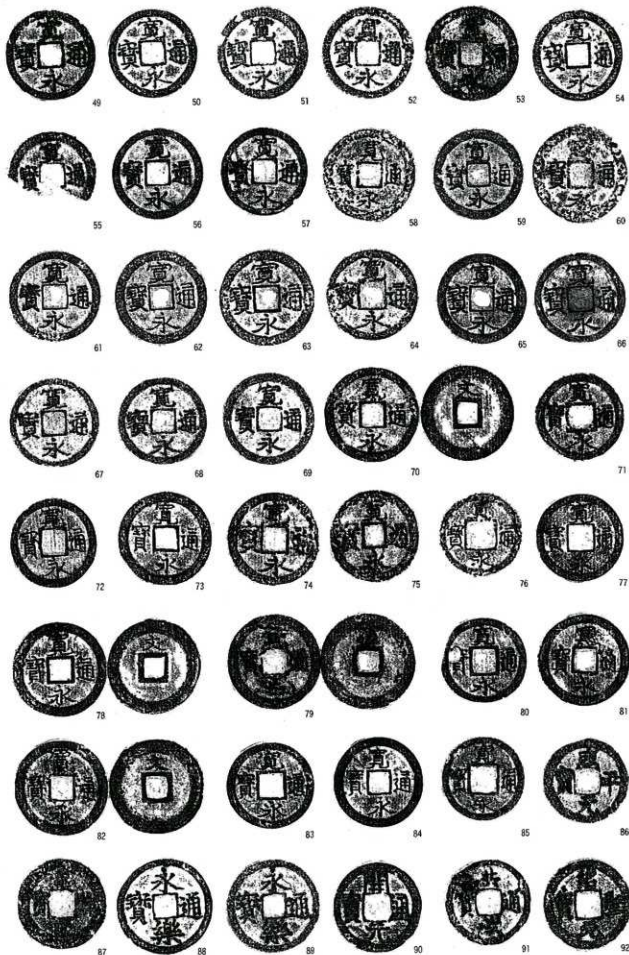
第164図 29調査区出土遺物 (1/8)



第165図 29調査区出土遺物 (1/3)



第166図 29調査区出土銭貨 (原寸)



第167圖 29調査区出土銭貨(原寸)

表15 20調査区出土遺物観察表

調査 番号	遺物 番号	遺物名	出土土層	器種	大きさ (mm)			形状 寸法	特徴	共存品	時期	備考	
					直径	高さ	長さ						
160	1		上層2	甕	赤				酒類	破片	?		
	2		土層7	甕	赤	7.2			酒類	口縁1/2	?	使用	
	3		土層9	甕	赤			10.7	酒類	口縁1/2	?	使用	
	4	調査区		陶器	甕		13.1		酒類	口縁	?		
	5		トレンゾ2	2	甕	赤	5.5	1.9	2.4		口縁部1/3欠	18 C後半	
	6	9 G-2a	3		甕	赤			2.2	肥田	口縁部	1630 ~ 1650	
	7	8 G-2a	6		甕	赤	13.1	3.4	4.8	肥田	1/2 胴体	?	二次焼成
	8	3 G-2a	6		甕	赤	15.1	4.5		陶器	1/3 胴体	18 C後半以降	
	9	3-4 G	3		甕	赤	10.2			肥田	1/3 胴体	1630 ~ 1650	二次焼成
	10	3 G-2a	7		甕	赤			4.2	肥田	口縁部1/4	1690 ~ 1749	
	11	3-4 G	7		甕	赤	8.8			肥田	口縁1/3	18 C後半	
	12	3-4 G	7		甕	赤				肥田	破片		
	13	8 G-2a	9		甕	赤	5.1	3.3	2	中皿	2/3 胴体	1580 ~ 1640	
	14	10 G-2a	9		甕	赤				肥田	口縁破片		
	15	10 G-2a	9		甕	赤			4.7	肥田	胴体白土層埋	口縁部1/3	17 C代
	16	4 G-1a	12		甕	赤	9.6	7.2	4.4	肥田	1/4 胴体	1630 ~ 1650	
17	4 G-1a	12		甕	赤				肥田	口縁部1/3	1630 ~ 1650		
18	4 G-2a	13		甕	赤	8.2	4.8	3.3	肥田	コネクタ側	1/3 胴体	1630 ~ 1650	
19	9 G-2a	12		甕	赤				肥田	破片	1630 ~ 1630		
20	1 G-1a	12		甕	赤				肥田	口縁部	17 C代		
21	9 G-2a	12		甕	赤			4.6	肥田	口縁部	17 C代		
22	8 G-2a	14		甕	赤	7.8	4.6	3	肥田	1/2 胴体	1630 ~ 1650		
23	8 G-2a	14		甕	赤			8.8	肥田	口縁部1/3			
24	8 G-2a	14		甕	赤	14			肥田	口縁部1/3	1630 ~ 1650		
25	10 G-1a	17		甕	赤	7	3.9	3	肥田	口縁部1/4	17 C後半		
26	8	14		甕	赤	12.1	2.3		肥田	口縁部	17 C代		
27	8 G-2a	17		甕	赤				肥田	破片	1630 ~ 1650		
28	10 G-1a	17		甕	赤	13.3	3.1	5.2	肥田	口縁部1/4	18 C後半		
29	8 G-2a	17		甕	赤				肥田	口縁部1/6	1630 ~ 1650		
30	8 G-2a	17		甕	赤				肥田	破片	1630 ~ 1630		
31	10 G-1a	17		甕	赤	13.6			肥田	口縁部1/3			
32	8 G-2a	17		甕	赤				肥田	口縁部	1630 ~ 1650		
161	33	10 G-1a	17	甕	赤				肥田	口縁部	17 C後半	二次焼成	
162	34	8 G-2a	17	甕	赤				肥田	口縁部	17 C後半		
33	8 G	18		甕	赤	10	6.8	3.8	肥田	口縁部	1630 ~ 1650		
34	8 G	18		甕	赤	12.6	3.8	4.4	肥田	口縁部	1630 ~ 1650		
35	10 G-1a	18		甕	赤				肥田	1/5 胴体			
36	10 G-2a	19		甕	赤			4	肥田	口縁部	1630 ~ 1630		
37	8 G-1a	21		甕	赤				肥田	口縁部	17 C ~ 18 C		
38	8 G-1a	23		甕	赤	3.7			肥田	口縁部	17 C前半		
39	8 G-1a	23		甕	赤			6.3	肥田	口縁部1/3	1630 ~ 1640		
40	10 G-1a	23		甕	赤	10			肥田	口縁部	1630 ~ 1650		
41	8 G-2a	23		甕	赤	6.7			肥田	口縁部	1630 ~ 1650		
42	8	27		甕	赤	5.3			肥田	口縁部	1630 ~ 1650		
43	8 G-2a	23		甕	赤	15			肥田	1/5 胴体	17 C後半	二次焼成	
44	9 G-2a	23		甕	赤	6.8	4	2.8	肥田	1/3 胴体	17 C後半		
163	6 G-1a	23		甕	赤	9	2.9		肥田	1/2 胴体	1630 ~ 1630		

※「龍岡新石器時代」第1巻2  
 (平成14年、大分県教育委員会)

第13節 29調査区

調査番号	道路番号	クワッド名	遺跡名	出土層	器種	大きさ (mm)			測定 単位	特徴	残存数	時期	備考			
						長さ (mm)	最大径	厚さ								
163	40	2		20		押骨	6.1	1	3.2		鍔口(大溝欠)					
	50	2		19		押骨	6.3	0.9	4.4		鍔口					
	51	2			一透	透骨	7.9+	1	9.8		鍔口(大溝欠)					
	52	8			一透	押骨	6.6	1	3		鍔口					
	53	8		17		押骨	5.4+	1.5	4.4		鍔口					
	54	8		17		押骨	8+	1.7	14		鍔口					
	55	10		27		鍔口	2.5+	1.6	7.2		鍔口					
	56	18		23		押骨	5.3+	1	3		鍔口					
	57		土灰9			押骨	2.9+	1.9	4.9		鍔口					
	58		灰土層4			鍔	9.7	1	0.5	25						
	20		溝4			銅製品	6.9+	1.1	0.3	6.3						
	60	8		14		銅製品	11.6+	2	0.7	64.7						
	61		銅製品		一透	小柄	9.7	1.5	0.5	15.0						
	62	8		19		銅製品	10+	1.5	0.5	16.1		銅製品				
	63	2			一透	銅製品	9+			21		釘状金具				
	64	6			一透	釘	11.6	2.2	0.5	12.2		銅製釘				
163	65	10		17		銅製品(鍔)	3.3	1.4	1.4	41.9		銅製品				
164	66		溝2			平瓦	25.5	22.3	2.4			瓦葺き行末大形瓦	溝2の部材			
	67		溝2			平瓦	24.5	14+	2.3			瓦葺き行末大形瓦	溝2の部材			
	68		溝2			平瓦	24.2	23.1	1.7			瓦葺き行末大形瓦	溝2の部材			
	69		溝2			平瓦	24.2	22.1	1.5			瓦葺き行末大形瓦	溝2の部材			
	70		溝2			平瓦	24.6	22.7	1.9			瓦葺き行末大形瓦	溝2の部材			
164	71		溝2			平瓦	24.8	22.3	1.7			瓦葺き行末大形瓦	溝2の部材			
調査番号	道路番号	クワッド名	遺跡名	出土層	器種	大きさ (mm)				測定 単位	特徴	残存数	時期	備考		
						長さ (mm)	最大径	厚さ	耳部 最大径							
165	72	2		一透	青銅	春杵	14.4	7	8.8			1/2 製作				
	73		土灰9			銅製	輪付蓋	12.6	3			定規	全周透明輪	1/2 銅体	近世	
	74	9		18		銅製	托	13	3.2	5.8			内面輪	1部、底面		
	75	8		21		銅製	蓋	8.4	5.6	6			瓦葺き部に輪	13/16 銅	近世	
	76	2			一透	銅製	人鉢	36	11	12		定規	外周輪、内面貫行輪	1/2 銅体	近世	銅製
	77	3		7		銅製	蓋			21			内外面コナテ	底面銅	近世	
	78	10		9		土製	小皿	8.8								
	79	10		11		土製	小皿	8.8	1.8	5.8						
	80	8		14		土製	皿	10.4	2.1	7.8						
	81	8		17		土製	皿	12	1.7	9.6						
165	82	10				土製	小皿	11.1	2	8						

表16 29調査区出土銭貨観察表

採取番号	番号	ブワッド名	遺跡名	出土層	種類	大きさ		備考
						径 (mm)	重量 (g)	
166	1		第1トレンチ	2	高橋水	2.5	2.9	
	2	8 G		5	高橋水	2.3	3.3	
	3	3 G	6	高橋水	2.4	3.3		
	4	8 G	7	高橋水	2.4	3.3		
	5	5 G	7	高橋水	2.4	3.1		
	6	8 G	7	高橋水	2.4	3.9		
	7	10 G	8	高橋水	2.4	2.1		
	8	8 G	8	高橋水	2.4	2.7		
	9	9 G	8	高橋水	2.4	2.8		
	10		酒蔵区	9	高橋水	2.4	2.9	
	11	14 G		10	高橋水	2.3	2.6	
	12	3・4 G		10	高橋水	2.4	1.9	
	13	3・4 G		10	高橋水	2.3	2.1	
	14	3 G		10	高橋水	2.3	3.4	
	15	3 G		10	高橋水	2.4	3.6	
	16	2 G		10	高橋水	2.3	3.6	
	17	4 G		10	高橋水	2.4	2.4	
	18	1 G		11	高橋水	2.4	2.2	
	19	1 G		11	高橋水	2.4	2.9	
	20	1 G		11	高橋水	2.5	2.6	
	21	1 G	11	高橋水	2.4	2.6		
	22	1 G	11	高橋水	2.3	3		
	23	1 G	11	高橋水	2.3	3.5		
	24	3 G	11	高橋水	2.4	2		
	25	4 G	11	高橋水	2.4	3		
	26	3 G	11	高橋水	2.3	3.5		
	27	4 G	11	高橋水	2.4	3.3		
	28	4 G	11	高橋水	2.4	3.1		
	29	10 G	12	高橋水	2.4	2.3		
	30	8 G	12	高橋水	2.3	3.1		
	31	8 G	12	高橋水	2.4	4.2		
	32	10 G	14	高橋水	2.3	1.2		
	33	10 G	14	高橋水	2.4	3.3		
	34	8 G	14	高橋水	2.3	4.3		
	35	8 G	14	高橋水	2.4	3		
	36	8 G	14	高橋水	2.4	3		
	37	8 G	17	高橋水	2.4	3.9		
	38	8 G	17	高橋水	2.5	4		
	39	2 G	18	高橋水	2.4	3.5		
	40	2 G	19	高橋水	2.4	2.6		
	41	8 G	19	高橋水	2.4	4.4		
	42	8 G	19	高橋水	2.4	2.4		
	43	8 G	21	高橋水	2.4	2.8		
	44	8 G	21	高橋水	2.4	3.2		
	45	8 G	21	高橋水	2.4	3.7		
	46	8 G	23	高橋水	2.4	3.6		
	47	8 G	25	高橋水	2.3	2.5		
	48	8 G	25	高橋水	2.4	2.1		
	49	8 G	25	高橋水	2.4	2.8		
50	8 G	25	高橋水	2.3	2.9			
51	8 G	25	高橋水	2.4	2.9			
52	8 G	25	高橋水	2.4	2.9			
53	7 G	25	高橋水	2.4	3			
54	9 G	27	高橋水	2.4	2.5			
55	10 G		高橋水	3.3	1.2			
56	6 G	溝	高橋水	2.4	4.2			
57	8 G	溝	高橋水	2.3	2.6			
58		第1トレンチ		高橋水	2.4	2.9		
59			七城2	一基	高橋水	2.4	3.4	
60		上城1		高橋水	2.5	3		
61		中城4		高橋水	2.4	3.7		
62		中城9		高橋水	2.4	2.2		
63		上城6		高橋水	2.5	3.7		
64		七城9		高橋水	2.4	2.5		
65		溝3	溝	高橋水	2.4	3.7		
66		溝4	溝	高橋水	2.4	3.3		
67		跡地遺跡1	一基	高橋水	2.4	3.1		
68		跡地遺跡1	一基	高橋水	2.3	2.3		
69		跡地遺跡1	一基	高橋水	2.4	3.3		
70		10 G	8	高橋水	2.5	3	文銭	
71		14 G	6	高橋水	2.3	3.6		
72		5 G	7	高橋水	2.3	2.9		
73		8 G	7	高橋水	2.4	4.6		
74		3・4 G	10	高橋水	2.4	4.1		
75		3 G	10	高橋水	2.4	3		
76		8 G	12	高橋水	2.3	4.8		
77		3 G		高橋水	2.3	3		
78		3 G		高橋水	2.5	4	文銭 背付	
79		4 G		高橋水	2.5	4		
80		6 G		高橋水	2.3	2.5		
81		6 G		高橋水	2.4	3.1		
82		8 G		高橋水	2.3	3.2	文銭	
83		8 G		高橋水	2.3	2.6		
84		溝3		高橋水	2.4	3.3		
85		溝3		高橋水	2.2	2		
86		溝4	一基	高橋水	2.3	1.7		
87		3 G	一基	高橋水	2.4	2.9		
88		2 G		高橋水	2.5	2.6		
89			一溝	高橋水	2.5	4.8		
90		跡地遺跡1	12	高橋水	2.3	2.7	銅貨	
91		2 G	20	高橋水	2.2	2.3	銅貨 明治初期上段年	
92		3・4 G	10	高橋水	2.3	2.6	北条銭	

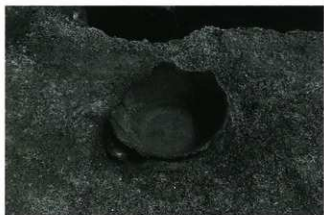




29調査区発掘時全景  
(東方方向から)



建物2全景  
(南方方向から)



埋掘出土状態  
(南方方向から)



溝2全景  
(南方方向から)



溝3全景  
(南方方向から)



土坑1～5全景  
(南方方向から)

## 第4章 文献資料調査

### はじめに

大分県教育庁蔵文化財センターが、平成15年～平成18年7月に実施した杵築城下町遺跡（杵築市大字杵築字中町・谷町）の発掘調査では、杵築城下町の成立から、その後の推移の過程を物語る興味深い成果が得られた。とりわけ、調査地区から、火災によるものとみられる計6面の焼土層が検出されたことは注目し直しよう。これらの焼土層は、1・2面については年代が判然としないものの、出土遺物から3面は17世紀後半～18世紀前半、4面は17世紀前半～17世紀中頃、5面は17世紀初め頃～17世紀前半、6面は17世紀初め頃のものとして比定されている。火災は、木造家屋が密集していた近世城下町にとって、そこに暮らす人々の生命と財産をおびやかすもっとも恐ろしい災害の一つであった。そのため、城下町では、火災を起こさないためのさまざまな措置が講じられていたが、実際には上述した焼土層が示すように、近世を通じてたびたび火災が発生していたのである。

以上の調査成果をふまえ、小稿では、文献資料からみた杵築藩城下町の火災と防火政策について検討することにした。もとより、上述した焼土層を、文献資料に記されたある特定の火災と結びつけることは難しいが、「杵築藩城下町の火災に関して、文献資料からいったい何がわかるのか」という視点に立って叙述を行う。なお、今回の発掘調査範囲は、城下町の町人居住区（旧中町・谷町）に該当しており、小稿における叙述の対象もこの町人居住区に限定することをあらかじめ断っておきたい。

### 1 杵築藩城下町に関する文献資料

まず最初に、杵築藩城下町に関する文献資料の残存状況とその概要について簡単に整理しておきたい。

杵築藩城下町に関する文献資料のなかで、質・量ともにまとまったものは、杵築市飛松天満宮社が所蔵する『飛松天満宮文書』（杵築市立図書館寄託）であろう。この『飛松天満宮文書』については、杵築市教育委員会編『杵築藩関係古文書調査報告書—古文書・和書目録—』（杵築市立図書館、1992年、以下「古文書調査報告書」と表記する）にその目録が収録されており、資料群の全容を把握することができる。同書によると、『飛松天満宮文書』は、飛松天満社にもともと伝わっていたもの（8件）と、町宿老を頂点とする町役人が勤務した町役所（町会所）に保管されていたもの（324件）の2種類に区別されるが、後者の324件の資料群が飛松天満社に移された詳細な経緯についてはわからないという。

町役所に保管されていた資料群のうち、とくに注目されるものが、計103冊から成る『杵築藩町役所日記』（以下「町役所日記」と表記する）である。これは、元禄15（1702）年から明治3（1870）年にかけて町役所が作成した公用日記で、城下町における商工業、町役人をはじめとする町人の生活・文化、さらに災害や事件など、さまざまな記事が収録されている。残念ながら10ヵ年分を欠くものの、「町役所日記」は、約170年間にわたり杵築藩城下町の歴史と文化を物語る基礎資料として、大分県の有形文化財にも指定されている。

前掲の「古文書調査報告書」によると、「土居文庫」（杵築市所蔵）にも杵築藩城下町に関する計118件の文献資料が存在することがわかる。「土居文庫」は、元杵築町長であった土居寛申氏が収集した資料群で、このうち城下町に関するものは、主として町奉行所および町役所に本来保管されていたと考えられる。

以上、「古文書調査報告書」から杵築藩城下町に関する文献資料を一覧すると、そのほとんどが、本来町奉行所や町役所に伝わった公的な資料であることがわかる。これらの資料群は、いずれも能見松平家が杵築藩主をつとめた時代（正保2（1645）年～明治4年）のもので、さらに18世紀以降に成立した資料が中心となっている。今のところ、17世紀における城下町の具体的な様子、文献資料を用いて明らかにすることは難しいといわざるを得ない。したがって、文献資料からは、前述した4～6面の焼土層に関連する有用な情報を得ることができない。そこで、以下では、焼土層3面との関連性が想定される18世紀前半の火災と防火政策について、前掲の「町役所日記」に収録された記事から明らかにしていきたい。

## 2 城下町の防火体制ー自身番と火番太ー

杵築藩城下町の防火体制は、町奉行所の支配のもとで、町役人をはじめとする町人みずからの手により支えられていた。こうした防火体制の中心に位置づけられるものが、自身番と火番太である。

自身番は、城下町の警備を目的に町ごとに課せられたもので、毎年10月から翌年の3月頃にかけて、原則として世帯主が交替でつとめた。宝永4（1707）年10月19日条によると、町人居住区の計7町のうち、西町は「大工券作かしや」に、新町は「かうしや弥兵衛かしや」に、中町は「はりまや清右衛門かしや」に、谷町は「又四郎かしや」に、下町は「新三兵衛かしや」に、魚町は「平右衛門納屋」に番所が設置されており、紺屋町のみ番屋がなかったことがわかる。自身番は、上述した勤務期間からも明らかなように火番を主たる職務とするが、そのほかにも時打ちや夜廻りはもちろん、町内を巡回して溝の破損などを点検することも求められていた。

宝永5年10月15日条には、「今晚より御家中衆夜廻りニ御出被成候間、町方自身番今夜より仕候様ニ、尤組頭中夜廻り足又いつも通り今夜より順番ニ廻り被申候様ニ書付を以申候」と記されている。この記事から、城下町の武士居住区では、武士みずからが夜廻りを行ったこと、自身番は武士居住区の夜廻りの開始日にあわせて始められていたこと、そして町人居住区では、自身番とは別に組頭が交替で夜廻りを行っていたことがわかる。こうした、武士・町人居住区ごとの夜廻りは、自身番と同様に翌年の3月頃まで行われた。

自身番が、約半年間の警備期間であるのに対し、火番太は1年間常置されたものであった。宝永4年7月19日条に「火番太儀、時分二時を不打破所ヲ町ヶ置在候二付、十六日夜おとりやつ共、下町より谷町所々のすだれ損さし石橋をはし候得共、火番太不存知段不届ケニ候、尤第一者火廻り、次二ハ諸事無油断氣を付可申役人」と記されているように、火番太の職務の第一は文字通り火番であり、このほか時打ちや城下町の「諸事」に気を配ることも求められていた。火番太は、城下町の計6カ所に設置された火番所に勤務したが（元禄16年9月8日条）、その所在地については今のところ明らかではない。また、火番太については、その人数や配置のあり方が判然としないものの、「町役所日記」には「谷町火番」「中町火番」「魚町火番」「大手火番」などと記されており、町ごとに、あるいは警備上の重要箇所配置されていたものと思われる。

自身番と火番太は、組頭の夜廻りとともに、城下町を火災から守るために町人へ課せられた重要な職務であり、勤務規定に違反した場合は厳しく処罰された。こうした自身番と火番太を中心とする防火体制は、「町役所日記」の記事により、明治期初頭まで続けられたことがわかる。

## 3 城下町の火災と藩の防火政策

ここでは、「町役所日記」の記事から、18世紀前半の城下町で発生した火災を一覧するとともに、杵築藩のさまざまな防火政策について述べることにしたい。

### (1) 18世紀前半における城下町の火災

18世紀前半における城下町の火災発生状況を一言すると、表17の通りとなる。計37件の火災のうち、7割を超える28件は10月から3月頃にかけて発生しており、自身番や組頭による夜廻りの実施期間が、毎年10月から翌年の3月頃にかけて設定された必然性を示している。また、発生時間が明確な35件の火災のなかで、夜間（午後7時～午前5時）に発生したものは6割に近い20件に及んでいる。ただし、寺院区を除いた武士・町人居住区ごとの火災発生件数には、とくに顕著な特徴は見出せない。

さて、表17に示した37件の火災のうち、大火災といえるものは、正徳元（1711）年12月8日に発生した下町の火災、享保10（1725）年11月23日に芥屋宮兵衛の酒蔵を火元として発生した火災、そして享保14年5月3日に三原屋平左衛門の薪小屋を火元として発生した火災であろう。

正徳元年12月の火災では、下町のほぼ全域が被災し、藩の勘定所および普請方会所を含む計41軒を焼失した（正徳元年12月8日条）。また、享保10年11月の火災では、町屋12軒とともに武家屋敷13軒が被災し、火元となった芥屋では「酒頭郎」（杜氏）の伊兵衛が焼死している（享保10年11月23日条）。「町役所日記」をみる限り、18世紀前半における最大の火災が享保14年5月の火災である。武家屋敷10軒を焼失したが、被害は町人居住区に集中して

おり、紺屋町が全焼したほか西町・中町・谷町にも延焼し、町屋130軒および中町に所在した町役所が被災している（享保14年5月3日条）。

以上をふまえ、「町役所日記」の火災記事と、前述した焼上層3面との関連性について言及したい。

上述したように、享保14年5月の大火災（以下「三原屋火災」と表記する）では、全焼した紺屋町から、さらに西町・中町・谷町へも延焼した。中町と谷町を被災範囲に含むこの三原屋火災は、焼上層3面と関連する可能性を有する事例といえる。ただし、焼上層3面は、17世紀後半～18世紀前半に比定されており、一方で「町役所日記」の記事は、18世紀初頭の元禄15年以降のものである。したがって、焼上層3面と関連する可能性をもつ、17世紀後半の城下町における火災については、今のところ文献資料から明らかにすることができない。もとより、焼上層3面が、1度の大火災によるものなのか、それとも17世紀後半～18世紀前半にたびたび発生した火災により形成されたものなのかという判断も困難である。

いずれにしても、火災の規模とその被災範囲をみる限り、三原屋火災と焼上層3面が関連する可能性は高いが、今後は17世紀の城下町に関する文献資料を見出した上で、この点について再度検討する必要がある。

## （2）さまざまな防火政策

城下町における藩の防火政策は、たとえば消火用水の確保などのように、消火活動に直接関わるものだけでなく、後述するように町人の生活や年中行事に関連するものまで多様である。

①煙硝（火薬）の管理 宝永3年12月、町奉行所は、町人が所有する煙硝について、「町中鉄砲業商売仕候者有之分者火用心無心元」との理由から、翌年4月まで藩の上蔵にすべて預けるように指示している（宝永3年12月13日条）。こうした、町人が所有する煙硝の管理に関する町奉行所の指示は、これが初めてのものとみられ、直後には町人の煙硝所有状況が調査され、誤帳屋勘兵衛（80匁）・芥屋七右衛門（35匁）・油屋与兵衛（17匁）・山城屋弥兵衛（5斤50匁）の4名が藩の上蔵に煙硝を預けている（宝永3年12月16日条）。なお、煙硝の預かり期間を翌年4月までに設定したのは、冬季に火災が発生しやすいことを考慮したものである。

②消火用水の確保 いずれまでもなく、実際の消火活動に不可欠となる消火用水の確保は、城下町にとっても重要な課題であった。宝永7年11月、町奉行所から「町方自然火事之節、川水計りニ面ハ無覺連候間、一町々ニ水溜桶用意致置」くように指示が出された。町奉行所が、城下町をほぼ東西方向に貫流する谷川の川水だけでは、十分な用水が確保できないのではないかと懸念をもっていたことがわかる。これに対し、町宿老は、「新町口ニ川せき置申候、西町両所ニ池御座候二付所々川せき置申候、町筋火事之節西町池之水満よりくミなかし可申候、其外裏々井戸数多御座候得者町方之火事ニ余り水手間ハ御座有間敷候」との認識を示している。つまり、谷川の川水だけではなく、多くの井戸や西町には二つの溜池が築造されていることから、川水は十分に確保できるというのである。結局、町宿老は、「町家別頼下ニ水絶不申くミ置、又風立候之節者家々門ニ水手桶出置」くように町人へ指示するので、「一町々ニ水溜桶用意致置」く必要はないことを上申し、町奉行所もこれを認めている（宝永7年11月20日条）。

以上から、城下町では、谷川の川水だけではなく、井戸水や池水を消火用水として有効に利用していたことが知られるが、これ以降も川水に関する記事が散見されるので言及しておく。

正徳4年10月、町奉行所から「町方裏々二井戸有之候分ハ、井戸と紙戸り大きニ書付罷見ハ候処、衣口ニはり付置」くように指示が出されている（正徳4年10月12日条）。これは、井戸をもつ町屋を明確に表示して、迅速な消火活動を可能とするための措置である。また、享保11年4月には、藤原吉左衛門が、「第一水無御座、近所懸儀仕候間用水旁仕度」との理由から谷町或草前に井戸を掘ることを願ひ出ており、町奉行所から許可されている（享保11年4月10日条）。こうした井戸の水が、飲用水としてはもちろん、火災の際には消火用水としても利用された可能性は高い。

上述した西町の溜池に関して、元文2（1737）年2月14日条には、「西町溜池にちり芥捨申ものも有之候由二相聞候、今度池さらへ被仰付候間、向後ちり芥捨申間敷由被仰」と記されている。これは、捨てられたゴミにより池床が上がると、十分な用水を溜池に貯水できないため、池浚いを行うとともに溜池にゴミを捨てることを禁じ

たものである。元文5年8月20・21日条には、「仲町用水池浚候趣ニ、其後雨も降り不申故切寸と水無之、殊ニ色々成ル評議致、方一之節水無之候而ハ何分間ニ合不申ニ付、与垣中心付キ会所ニ出所候、及相談ニ候趣ニ致候定、宍組より武人つゝ夫出候而池之近辺ノ近ク所より井戸之水、右池ニ兩日汲込」との記事がみえる。これから、降雨量の不足により十分な貯水量が得られなかった中町の溜池に、付近の井戸水を汲み上げて用水を確保していたことがわかる。なお、中町の溜池が築造された時期や経緯については今のところ判然としない。

③被災跡地の活用 前述した享保14年5月の三原屋火災では、町奉行所から、火元となった三原屋半左衛門の竈小屋跡地を「川水堀」とするように指示が出されている（享保14年5月11日条）。その後、翌6月には「用水検地」が行われ、「西表口五間四尺、裏横四間四尺、南入拾間六寸、北入拾間四尺五寸」の規模をもつ用水堀が築造されることになった（享保14年6月6日条）。これは、火災の延焼を防ぐ火除け地の役割を果たすだけでなく、いわゆる防火水堀としても利用されたとみられ、被災跡地の活用事例を示す興味深いものといえる。

④町人の生活・年中行事に関する規定 宝永4年12月15日条には、「自今以後、すゞはきの事、夜之内ニ取申儀火用心煙敷ニ付御法度被仰付候」と記されている。これは、不用心との理由から、夜間のすす掃きを禁じたものである。宝永6年5月6日に発生した「大坂屋清兵衛組塩屋藤古かしや九蔵後家」宅を火元とする火災では、直後に「町宅後家老人者」の調査が行われ、町奉行所から「自今以後、女ど人宅不罷成候間、商人宛相談致候ハ、其通、老人宛申候儀不罷成」との指示が出されている（宝永6年5月9日条）。一人暮らしの九蔵後家が起こした火災をふまえ、おそらくは不用心であるとの認識から、城下町における女性の一人暮らしを禁じたものであろう。享保10年正月5日に谷町で発生した火災の直後には、町奉行所から「町方高き家」に梯子をかけておくように指示が出されている（享保10年正月8日条）。これは、高層家屋に登りやすくして、消火活動の迅速化を図ったものと思われる。

さて、宝永3年12月23日条には、「年徳棚ニ燈明上ヶ候事、無用心ニ被思召候衆、当年よりドニともし中様ニ被仰付」と記されている。「年徳」とは、その年の福徳を司る歳徳神のことであり、人々は毎年正月に境内に棚を設けて供物をささげ、歳徳神を迎えたという。町奉行所は、この棚にあげる燈明を、棚の下に置くように指示している。これは、棚の上に燈明をあげると燈明の火が天井に近くなり、火災の原因になることを懸念してのものと思われるが、藩の防火政策が祭祀の具体的な形態に影響を与えた事例として興味深い。

## おわりに

小稿では、「町役所日記」の記事から、18世紀前半の杵築藩城下町で発生した火災と藩の防火政策について検討した。さらに、発掘調査により検出された焼上層と、文献資料に記された情報との関連性についても言及したが、資料的な制約もあり今回は明らかにできなかった。しかし、今後の杵築城下町遺跡における発掘調査に対して、文献資料のもつ情報により新しい視点を提示できたのではないだろうか。

城下町では、谷川の川水とともに井戸水や池水を消火用水として利用していたことは前述した通りであるが、文献資料の記事からは溜池の規模や形状をうかがい知ることができない。また、享保14年5月の三原屋火災直後、被災跡地に築造された用水堀も、周囲を土塀（「ねり塀」）で囲まれていた（享保14年6月6日条）こと以外、やはりその形状が明らかではない。溜池や用水堀といった消火用水関連施設の具体的なイメージは、発掘調査の成果からもたらされるものである。

前掲の「町筋火事之節者西町池之水溝よりミなかし可申候」（宝永7年11月20日条）という一文は、池水を消火用水として有効に利用する上で、城下町に巡らされている溝が重要な役割を果たしていたことを物語っている。また、十分な貯水量が得られない中町の溜池に、付近の井戸水を汲み上げた事例（元文5年8月20・21日条）は、消火用水に関連する諸施設が相互に補充しあう形で利用される場合があったことを示している。

今後の杵築城下町遺跡の発掘調査は、井戸・溜池・用水堀・溝といった消火用水関連施設の具体的な規模や形状はもちろん、これらの諸施設が城下町においてどのように配置されていたのかという点についても留意して行われる必要がある。

表17 18世紀前半における杵築藩城下町の火災発生状況

年次	月日	時刻	被災場所		内容
			範囲	区分	
宝永3 (1706) 年	11月26日	申上刻	—	武士	浅見屋敷 (藩匠) 長屋から出火、武家屋敷5軒が被災
宝永5 (1708) 年	3月15日	昼七ツ前	西町	町人	御料理人安楽 (石衛門) の木小屋から出火
	11月10日	夜九ツ前	—	武士	備川五衛門屋敷から出火、武家屋敷3軒が被災
宝永6 (1709) 年	2月5日	夜八ツ時	—	武士	岩木勘兵衛屋敷から出火、勘兵衛屋敷のみ全焼
	5月6日	昼七ツ半頃	—	町人	大坂屋敷兵衛組地蔵屋敷がかりや九蔵後家宅から出火
	10月23日	夜九ツ時	—	町人	大坂屋敷兵衛の「むろ際」から出火
正徳元 (1711) 年	12月8日	晝六ツ半時	下町	町人	深江屋銀行衛門所の井筒屋敷太郎兵衛の納屋から出火、被災軒数41軒 (このうち御勘定所1軒、御普請方2軒、空地1ヵ所)
享保9 (1724) 年	7月8日	昼九ツ時	下町	町人	御普請方殿治場から出火
	12月27日	夜九ツ時	—	武士	加藤号一兵衛長屋から出火
享保10 (1725) 年	正月5日	昼九ツ時	谷町	町人	新原宅から出火
	11月23日	夜八ツ時	—	武士・町人	芥屋普兵衛酒蔵から出火、町屋12軒・武家屋敷13軒が被災
享保11 (1726) 年	11月27日	夜九ツ前	下町	町人	放火
享保12 (1727) 年	3月5日	七ツ半頃	—	寺院	正覚寺隠居所から出火
	4月朔日	八ツ時	—	町人	数屋の「えんせう (煙筒) こしらへ之家」から出火
享保14 (1729) 年	5月3日	夜四ツ半時	組町町・西町・中町・谷町・武家屋敷 (北台)	武士・町人	三原屋半左衛門の薪小屋から出火、組町町は全焼、町屋130軒・武家屋敷10軒・町会所が被災
享保16 (1731) 年	3月6日	日通	—	武士	宮本孫八隠居所から出火
	3月12日	夜四ツ前	魚町	町人	七兵衛宅から出火
	9月2日	夜五ツ半頃	—	武士	附置久平兵衛から出火、武家屋敷2軒が被災
享保17 (1732) 年	12月18日	夜四ツ半時	組屋町	町人	放火
享保20 (1735) 年	5月21日	夜九ツ時	吉野下丁	武士	木本七右衛門の灰屋から出火
	8月6日	昼九ツ時	北派	武士	矢野只助の灰屋から出火
	10月25日	夜九ツ半時頃	袋町	武士	塚本作左衛門屋敷から出火
	11月7日	夜五ツ半時	吉野下丁	町人	吉野下丁要領から出火
	12月4日	夜九ツ時	—	武士	坪生御五衛門長屋から出火、興夜、寺町でも火災
元文元 (1736) 年	12月13日	夜九ツ半	西町	町人	御膳屋右衛門退新古宅から出火
元文5 (1740) 年	閏7月27日	夜八ツ時	—	武士	龜井太兵衛兵衛から出火
	8月13日	夜四ツ半頃	吉野上丁	武士	白井仲右衛門屋敷から出火
	12月9日	夜四ツ時頃	—	武士	川上素助屋敷から出火
寛保元 (1741) 年	正月24日	亥刻	—	寺院	妙徳寺から出火
寛保2 (1742) 年	11月29日	昼九ツ時	—	武士	村上大野右衛門屋敷から出火、武家屋敷12軒が被災
寛保3 (1743) 年	4月朔日	昼八ツ半	—	武士	御茶屋番田辰重蔵長屋から出火
	12月6日	昼七ツ半頃	吉野中丁	武士	—
延享元 (1744) 年	11月11日	朝明ヶ六ツ	—	町人	舟木屋組自身番から出火
延享2 (1745) 年	2月5日	朝ヶ六ツ半時	—	町人	川崎屋左衛門宅から出火
寛延元 (1748) 年	10月6日	朝ヶ六ツ時	新町	町人	和哥屋三郎助組美古屋清介宅から出火
	閏10月3日	夜	—	—	芝屋勘小原から出火
寛延3 (1750) 年	8月5日	昼八ツ半時	—	—	「金正寺八坂蔵藏斗蔵」から出火

(註1) 杵築藩町役所日記、から作成した。

(註2) 「区分」項目の「武士」は武士居住区を、「町人」は町人居住区を、「寺院」は寺院区を意味している。

## 第5章 総括

### 杵築城下町の概観

杵築城下町遺跡は都市計画道路宗近魚町線の道路拡幅に伴って発掘調査されたものである。発掘調査は用地買収や家屋移転という発掘条件の整った地点を対象として平成14年度～平成18年度にかけて実施された。平成14年度の調査成果は既に発掘調査報告書として刊行済みである。本報告書は平成15年度～平成18年度の調査成果を収録している。発掘調査の主体は杵築市大字杵築字谷町を中心としたものであるが、一部中町も対象とした。現在の谷町の中心を走る宗近魚町線は近世の基幹道路をそのまま踏襲したものであり、現在の谷町の地割りを見ると、近世の城下町絵図の区画がそのまま利用され、あるいは幾つかに統合されて使用されていることが一目瞭然である。発掘調査で確認できた町屋の区画は間口の狭い短冊形の地割りであり、区画の境界ごとに排水の側溝が設置されており、これが今の側溝と同じ位置に確認できることから、基本的な区画の単位は近世のままであるといえよう。

近世の城下町絵図をみると、谷町は商人、職人の活躍する町屋であり、中心を走る道路の両側に軒先を並べた様相が描かれている。谷町の地形をみると標高は東端が低く、西方向へ行くにつれて徐々に高くなる傾向が顕著である。谷町の南側には西から東へ流れる谷川が描かれており、現在も同じ位置に谷川が流れているが、南北に長い家屋の床下を流れるように工夫されており、谷川を直接堰にすることは少ない。短冊形の地割りの境界線の側溝はほとんど全てがこの谷川に注がれており、まさに側溝で区画された町と表現できる。現地表面で標高約4mであり、当時の2m前後の標高を考慮すると、排水設備の維持・管理が谷町の生活環境を支える基礎条件であるといっても過言ではない。

一方、谷町の北側と南側には平坦な台地が広がり、北台や南台と呼ばれる武家屋敷が建ち並んでいた。平地地の武家屋敷には石垣や土塼を廻らし、門や庭園を持つ家老屋敷や上級、中級武士の屋敷が並び、北台の西端やその周辺部は下級武士の居住区であった。また、南台の西には寛徳寺、正覚寺、妙徳寺、木付氏代々の菩提寺である安住寺、長昌寺が並ぶ寺院区が位置していた。

### 城下町の機能的配置

北台、谷町、南台は群屋の坂、塩屋の坂、船屋の坂、天神の坂、北台の東には勘定場の坂があり、武家屋敷と町屋とはそれぞれ有機的に結びれていた。視覚的には、南北の両高台を武家居住地が占め、その谷間に町人居住区が配置されるという構造であった。この地形的特徴を豊田寛三氏は『大分歴史事典』（平成2年）で杵築城下町は「町人居住地を武家村住地が取り囲み、しかも高みから見下ろすという、身分の上下を居住地の高低差に上乘せするという形で計画されている」と指摘している。

確かに、この様な現象を視覚的に把握してみると上述の結論となるが、武家居住区と町人居住区とは長い歴史的な自然開発史の発展過程、つまり、土地開発や占有の先後関係において結果的に生じた現象であり、いつの時期に谷町が形成されたのかという開発の時期と不可分の関係があると推察されるのである。北台、南台は谷町より早い段階に開発されていたのは事実であり、果たして、近世の城下町の構造に意図的な住み分けが当初から計画されていたものなのであろうか。なぜならば、高台にあった台山城は近世には海を背後とした低地の城郭に移転しているのであり、現杵築中学校の位置には堀と海とに囲まれた御殿場、御殿、西御殿があり、海に面する低地を意図的に利用して近世城郭の中核部が構築されていたのである。城郭区の標高は約4m前後であり谷町や魚町等の町屋のそれとほとんど同じである。この現象を視覚的に捉えたと、城郭区は北台や南台の上級・中級家臣より見下ろされた位置を占めるとも言えなくはない。この一見矛盾とも言える土地の選地の構造は、戦いと防衛を主目的とした中世的城郭から、治安と経済の流通を意図した近世的な城郭へと移行したことを意味しており、条件整備の現実的な対応結果と見做されるのである。

近世城郭の普遍的な特徴の一つとして、共通する選地条件は背後に海を控えた良港を持つことといえる。海上交通と物資輸送の利便性を重視した政治・経済活動の中心地となる条件の一つに、城郭に付随した舟入や港は必

要不可欠な要素であろう。八坂川の河口は物資流通と海上輸送の拠点であり、谷町の商人や職人の経済活動に与えた影響は容易に推測できる。そういう意味で、領民の政治・経済活動の拠点は水陸両面に利便性のある低地にあるといっても過言ではない。

北台と南台とに挟まれた谷部の基幹道路の両側には間口の狭い矩形状の敷地がみじん切りのように区画され谷町を形成している。今回の発掘調査は谷町を中心に実施した。

杵築城下町の谷町地区が記載された『町屋敷絵図』は写本とされるが、当時の町役所日記との照合から文化12年(1815)頃の製作とされている。今回の調査区と『町屋敷絵図』とを比較していくと、17～19調査区は吉野家吉兵衛、銅屋吉兵衛、佐渡屋直藏、20～22調査区は伊豫屋兵左衛門、長門屋半右衛門、志保屋利兵衛、27調査区は志保屋長右衛門、28調査区は丸屋平兵衛、和嶋屋兵助、桶屋為右衛門、29、23調査区は山里屋兵助、油屋文吉、24調査区は若尾三郎助、25調査区は川嶋屋治助、26調査区はぬのや源三郎助の屋敷に比定できる。屋号から当時の職種を推測することは適当ではないが、銅屋、志保屋、油屋、ぬのやに加え、酢屋の坂、節屋の坂等の名称からも、当時の職人、商人の活躍ぶりがおぼろげながらも想像できる。

発掘調査で出土した膨大な陶磁器類や煙管の数の多さに加え、一般民衆の経済流通の証左ともいえる寛永通寶の出土数は400枚弱にも上り、谷町一帯の活発な商業活動や町屋の生活の一端を垣間見ることができた。では、この谷町が果たして何時ごろから形成されていたのであろうか。今回の発掘調査の問題点と成果はこの点に集約できる。

#### 谷町の火災と層序堆積

発掘調査は谷町の中心部をはしる基幹道路に沿って、標高の低い東方から高い西方へと断ち割る方法で実施された。調査区は市街の中心のため、細切れに設置したが、基本層序の跡跡は幾つかの火災焼土の相対的な重なり合いを鍵層として把握することができた。各調査区に共通する火災焼土は焼土3面～焼土5面であり、焼土1、2面に關しては近代～現代に限りなく近いことから部分的で希薄な堆積であった。焼土6面に關しては表七下約2m、標高2mの位置をしめる。表上下約1.5mで水の湧き出す条件下の発掘調査でもあり、焼土6面を面的に検出できたとは言いがたい。焼土6面は地山の上に普遍的に堆積する青灰色シルトの上で、薄い炭化物として確認できるものである。焼土7面は焼土が部分的に残るもので、焼土6面との関係は定かではない。

谷町の発掘調査で留意されたのは、火災の時期とその後始末の方法である。火災は全部で5～7回確認できるが、中でも焼土3面、焼土4面、焼土5面の焼土の堆積痕跡は顕著であった。焼土は炭化物を含んで厚さ数cm～20cmもあり比較的平坦に堆積している。焼土内には陶磁器類が含まれ火災の痕跡と見做された。この様な焼土層の上層には黄褐色土に岩や砂礫の混じった山土が20cm～40cmも置かれ嵩上げされ整地されていた。火災の度に同じような嵩上げ事業がおこなわれており、層序を見るとサンドイッチの状態、つまり版築された状態に見える。青灰色シルトの上に約2mの土砂が堆積しているが、全て人為的な嵩上げによる整地層と見做すことができる。単純計算すると、一回の火災で約30～40cmの嵩上げをした計算になる。現在でも、地表面の標高は約4mであり、約1.5mも掘ると水が湧く環境であるが、嵩上げする前の標高は約2mであり、排水施設の整備は谷町を維持管理するのに必要不可欠であったと推察できる。

低地に進出した近世城下町の開発史において、このような人為的な整地層の形成は普遍的に認識できる行為であると云える。

#### 谷町の開発の時期

文化12年(1815)頃の『町屋敷絵図』によると、谷町は間口3～3.5間が谷町全体の約62%を占める。矩形状の敷地の両側町であるが、一区画ごとに側溝が設けられ谷川へ流れるような構造である。発掘調査では現在の側溝の下部には人頭大や巨大な河原礫を両側に並べた側溝が出土している。この様な石組みの側溝が構築された時期を明確にできないが、石組み側溝の出現する以前は、小指の太さの竹や葦のような中空の棒を約5～8cm間隔に密に立て並べ、これを3cm間隔に横棒で繋いだ、小さな柵状のような施設を両側に並べて側溝施設の一部とした遺構が検出されている。これが9月上旬の地層は青灰色シルトの直上の面である。



各調査区に普遍的な焼土3面～焼土5面、焼土6面出土の陶磁器類をみると、焼土3面は17世紀後半～18世紀前半、焼土4面は17世紀前半～17世紀中頃、焼土5面は17世紀初頭～17世紀前半、焼土6面は16世紀末～17世紀初頭に比定できる。

このことから、現代まで営々と続いてきた谷町の成立は、少なくとも焼土6面頃の16世紀末～17世紀初頭までしか遡れない。焼土6面は地山の上に普遍的に堆積する青灰色シルトの上面であり、当時の地理的、地層的な条件を考慮すると、人々の生活に適した環境ではないことは一目瞭然である。現在の八坂川河口の植生から想像すると、八坂川に注ぎ込む谷川周辺は扇状地形の氾濫原で一面の葦原であったことは容易に推察できる。青灰色シルトの上面に薄く確認できる炭化木層は谷川周辺の荒地を開発する中で葦原を焼却した痕跡と見做されよう。谷川一帯の開発は16世紀末～17世紀初頭頃と想定できることから、慶長元年(1596)の杉原氏、慶長5年(1600)の細川氏等の入部の時期に谷町の基礎が構築されたと推察できる。

次に、焼土4面、焼土5面の時期には谷町の側溝は河原礫の石組側溝に仕上げられている。出土遺物をみると、焼土4面は17世紀前半～17世紀中頃、焼土5面は17世紀初頭～17世紀前半に比定できる。17世紀前半代は杵築城主が目まぐるしく変わり、元和元年(1615)の一國一城令により城郭構造や配置に改変が加えられたところである。青山賢信氏は、昭和56年の『杵築市伝統的建造物群保存対策調査報告書』において、延享3年(1764)の『御巡見控帳』を引用し、城山の北の海手に城郭を移したのは、寛永10年(1633)に入部した小笠原氏時代としている。谷町、中町の方にある新町もこのころに造られたものと推察している。この城郭移築に伴って武家屋敷をはじめ町屋の移転や改変を伴ったであろうことは推測に難くない。そういった意味で、焼土5面は小笠原氏時代、焼土4面は正保2年(1645)に入部した初代藩主能見松平氏の時代に想定できそうである。

今回の発掘調査は、杵築城下町中の谷町を中心に実施された。調査対象地は、現在も日常的な営業活動をしている商店街の中心部であり、水の湧き出る狭小な調査範囲でもあり、遺構の面的な広がりを検証することは不可能であった。しかし、北台と南台に挟まれた狭い空間に密集しつつ展開していった当時の民衆の活力は、その豊富な陶磁器類、煙管、銭貨という出土遺物をはじめ、短冊形地割りの両脇にくまなく設置された側溝、不断に繰り返された火災処理と嵩上げ整地造成のなかに読み取ることができた。

今回の発掘調査は、近い将来に開発される部分に限って実施したものであり、多くの貴重な遺構、遺物は未だ地中深くに眠っている。これらを、活用しつつも、保護・保存し、後世に残し伝えていくことが、現在に生きる私達に残された使命の一つであるともいえるのである。

## 報告書抄録

ふりがな	キツキジョウカマチイセキ 2
書名	柞築城下町遺跡 2
副書名	都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	*
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	栗田勝弘・小林昭彦
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
発行年月日	平成20年(2008)2月15日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柞築城下町遺跡17～19調査区	柞築市大字柞築	44210	118	33°24'47"	131°37'25"	2003年12月～ 2004年3月	420	都市計画道路宗近魚町線道路改良事業
柞築城下町遺跡20～26調査区	柞築市大字柞築	44210	118	33°24'47"	131°37'12" ～ 131°37'23"	2004年7月～ 2004年12月	1400	都市計画道路宗近魚町線道路改良事業
柞築城下町遺跡27～28調査区	柞築市大字柞築	44210	118	33°24'46"	131°37'20"	2005年9月～ 2005年12月	260	都市計画道路宗近魚町線道路改良事業
柞築城下町遺跡29調査区	柞築市大字柞築	44210	118	33°24'47"	131°37'18"	2006年5月～ 2006年7月	130	都市計画道路宗近魚町線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柞築城下町遺跡17～19調査区	町屋敷跡	近世	溝・土坑	陶磁器・土師質土器・瓦質土器・砥石・銅銭	
柞築城下町遺跡20～26調査区	町屋敷跡	近世	溝・土坑・杭列	陶磁器・土師質土器・瓦質土器・砥石・埴管・銅銭	
柞築城下町遺跡27～28調査区	町屋敷跡	近世	溝・土坑・建物基礎	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・石臼・砥石・瓦・刀装具・銅銭	ベトナム産焼締陶器
柞築城下町遺跡29調査区	町屋敷跡	近世	溝・土坑・建物基礎	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・石臼・砥石・瓦・銅銭・銅製品	ベトナム産焼締陶器

---

## 杵築城下町遺跡 2

都市計画道路赤近魚可線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第22集

平成20年2月15日

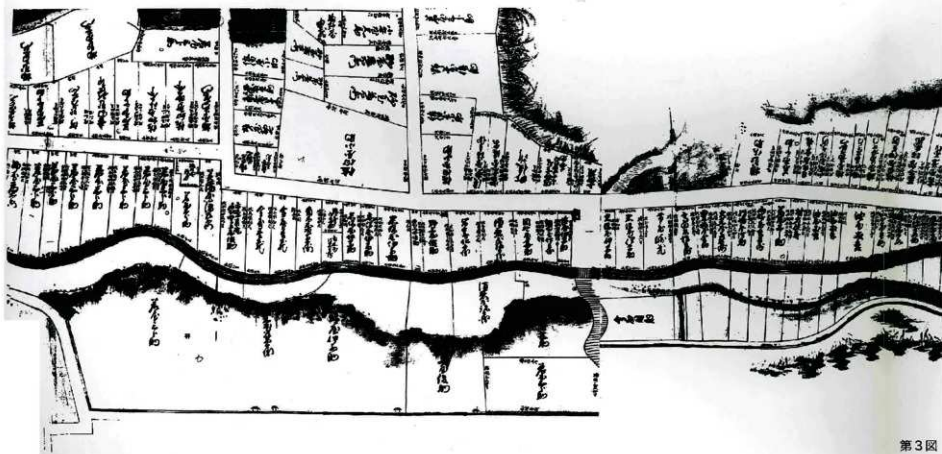
発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地  
TEL (097) 597-5675

印刷 フタバ印刷社  
〒874-0930 大分県別府市光町8-28  
TEL (0977) 21-1328

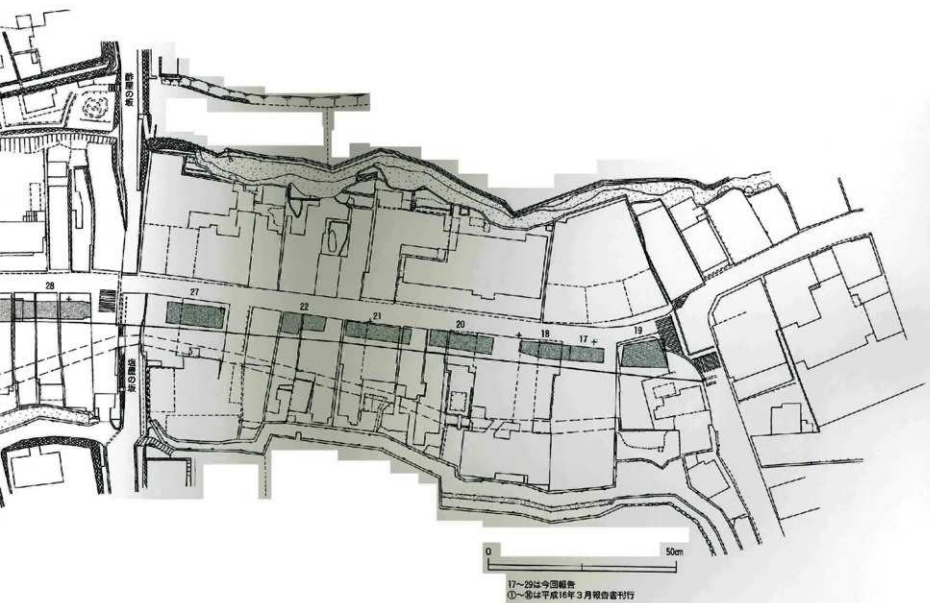
---



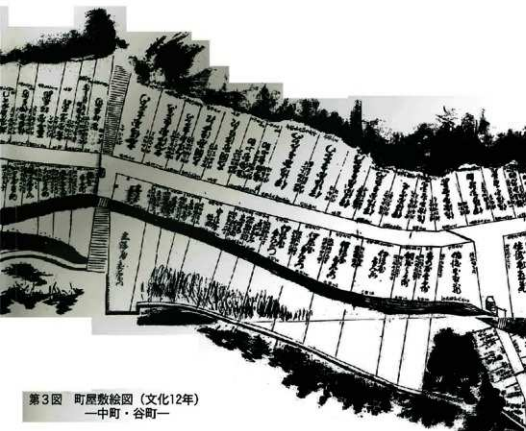
第2图



第3图



第2図 杵築城下町遺跡（中町・谷町地区）の調査区



第3図 町屋敷絵図（文化12年）  
—中町・谷町—

